

---

# 仮面ライダー〇〇〇外伝～仮面ライダーデマリー～

ハナト・ブレイブ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダー〇〇〇外伝〜仮面ライダーテマリー〜

### 【Nコード】

N3746R

### 【作者名】

ハナト・ブレイブ

### 【あらすじ】

800年の眠りから覚めたメダルの怪人グリード。人の欲望を喰らい、世界を破滅させる。それと時を同じくして目覚めた戦士、仮面ライダーオーズ。彼らのメダルをめぐる戦いの中、一人の青年が巻き込まれる。青年は仮面ライダーテマリーとなり、人々を守るために戦い続ける。はたして、その先に待つものは何か……注！仮面ライダーオーズにオリジナルの展開を加えた作品です。そういうのが苦手な人は回れ右を。それでもいい方はどうぞ！



## オリキャラ紹介（前書き）

番外編はこちらに移ります。  
ご注意ください。

## オリキャラ紹介

名前 日野 勇樹 ひの ゆうき

性別 男

年齢 17歳

職業 高校生

好きなもの 人のためになること

嫌いなもの 誰かが不快な思いをすること

備考

妹と二人暮らしのごく普通の高校生。親がいないことから、幼い頃から泉兄妹に相手してもらっていた。

そのため、アंकが取り付いたときは驚きのあまり気絶していた。二人暮らしだったせい、家事全般は得意。バイクの免許は持っていない。基本無欲で、高いところとゴキブリが苦手。

自分をここまで育ててくれた人や、お世話になった人のためなら危険を惜しまない。まあそれ以外の人も助けてしまうが。

ひょんなことから沙良に出会い、仮面ライダーテマリとして戦うことになった。テマリという名前がかっこ悪いので改名したいと考えている。現在のメダルはユーズの6枚とパンダメダル1枚の計7枚。

名前 ユーズ（犬神<sup>いぬがみ</sup> 沙良<sup>さら</sup>）

性別 女

年齢 不明 人間体は17〜18くらい

職業 ナニソレ？

好きなもの 人間 勇樹 優花 メダル メロンパン

嫌いなもの 敵対するグリード 欲望

備考

一応グリード。見た目はリリカルなのはのフェイト。グリードなのに無欲。というか人間大好きな超いい人。そして天然。昔から人間に味方していたグリード。自分のコアメダルを持っていた勇樹がテマリードライバーとの適合率が良かったため一緒に行動している。イヌ科のグリードなため、人懐っこい性格。勇樹に対して信頼はしているが、恋愛感情があるかは不明。メロンパン大好き。

名前の由来は【譲る】から。属性は大地。

名前 ひの 日野 ゆうか 優花

性別 女

年齢 16歳

職業 高校生

好きなもの お兄ちゃん 沙良 家事 お世話になった方々

嫌いなもの お兄ちゃんを悪く言う人 平気で人をきずつける人

備考

勇樹の妹。重度のブラコン。ただけではなく、兄をちゃんとしかることもある。家事全般が得意。危険なところに行く兄をいつも心配

している。その他基本兄と同じ。

#### 仮面ライダー テマリ

大体オーズと同じ。オーズの本体の黒い部分が白くなった感じ。オーズと同じコンボにもなれる。まあ現段階では無理だが。名前の由来は三連星【temary】から。

#### ジャックオオコンボ

ジャッカル・キツネ・オオカミのコアメダルで変身する。ジャッカル<sup>キツネソード</sup>の発達した聴覚と、イヌ科特有の巣穴を掘る能力、キツネの背中にある剣十字、オオカミの強靱な脚が特徴。

必殺技は高速で相手に接近して切り裂く【ブレイブストライサー】  
(命名勇樹)



ジャパンオオ

ジャッカル・パンダ・オオカミのメダルで変身する。キツネの代わりにパンダの強靭な腕で攻撃する。他はジャッキオオと同じ。

必殺技は高速で相手に接近し、風をまとったアッパーを食らわせる

【ソニックブリンガー】（命名勇樹）

## オリキャラ紹介2

名前 カケル（イイズナ）

性別 男

年齢 不明

職業 不明

好きなもの ギャンブル 弟子

嫌いなもの 勝手に自分のメダルを使う奴 面倒なこと

備考

<sup>ユース</sup>沙良の師匠。基本的に面倒なことが嫌いなため、表舞台に出ることは少ない。今は冬眠中らしい。自分が認めてない奴が自分のメダルを使うことには苛立つ。賭け事大好き。  
名前の由来は【賭ける】から。イイズナというのは、沙良が【いい横綱】からつけたあだ名。属性は風。

名前 カナ（牛若<sup>うしか</sup> 空音<sup>そらね</sup>）

性別 女

年齢 不明 人間体は17

職業 高校生

好きなもの ピアノ 作詞 勇樹と話すこと

嫌いなもの 乱暴な人 音楽を理解できない人

備考

勇樹のクラスメート。クスクシエでバイトを始める。普段は大人しくて控えめな少女。その正体はグリード。沙良とは昔から仲がいい。ピアノがうまい。勇樹と話すうちに、自分とは正反対の彼に惹かれていく。本人に自覚はないがかなりの美人でもてる。

名前の由来は【奏でる】から。属性は電気。ウヴァと違い、青い電気を任意の部分に纏わせることができる。

テマリー新能力

サンショウオメダル

能力は自身にぬるつとした粘膜を纏わせる。

カエルメダル

高くジャンプでき、壁に張り付くことも可能。

イタチメダル

不明

クマメダル

キックの威力が大幅に上がる。

タンクコンボ

イタチ・パンダ・クマのメダルで変身するコンボ。主に肉弾戦で戦う。足や腕に風を纏わせることも可能。必殺技は力強く突進し、風を纏った両手でパンチする【二連爆裂暴風拳】

ジャッキオオコンボ覚醒  
突然起こったなぞの現象。キツネソードを使った技ではなく、キツ  
クになっている。威力はヤミーフ体を一撃を倒すほど。必殺技名は  
【ファングインパクト】

## オリキャラ紹介3

名前 テルス

タイプ 両生類

色 暗い翠 ウヴァより毒毒しい。

備考

両生類タイプのグリード。ゲゲツという独特の笑い方が癖。スペックはかなり高く、テマリーを3回も倒している。頭は悪いが戦闘力が高い。毒や炎を扱うことを得意としているが、水中船も可能。ヤミーは自分の欲望から生み出し、1つの欲望で複数体産まれる。

サンマルコンボ

サンショウウオ、サラマンダー、カエルのメダルで変身するコンボ。

翠の体をしている。炎による攻撃や、攻撃の回避、水中戦を得意としている。

必殺技は炎を纏った両足での蹴りを放つ【バーニングドライバー】  
(命名勇樹)

カナのメダル

頭 フクロウメダル  
色 青

体 コウモリメダル  
色 紫

脚 ミミズクメダル  
色 青紫

雷を使うことと空中戦が得意。

現時点ではバランスの取れたイキルコンボ、攻撃力のタンクコンボ、

防御や回避のサンマルコンボ、スピードのジャッキオオコンボを使い分けることができる。



## オリキャラ紹介4

仮面ライダー テマリー フクコウズコンボ

フクロウヘッド 夜でも昼間と変わらない景色で見ることができる。  
青い。

コウモリアーム コウモリの様な翼がはえ、紫のタジャスピナー、  
コウスピナーが左手に付く。相手に触れることでセルメダルを吸収  
できる。（吸血的な）紫色。

ミミズクレッグ 鋭い足先になる。青紫色。

備考

カナのメダルで変身するコンボ。勇樹曰く「空音コンボ」 空中戦  
や夜の戦闘が得意。電機を操れる。

必殺技は上空からのキック、「ライジングクロー」と、ギガスキャ  
ンから敵に突撃する「フルムーンストライク」

名前 黒月 くろつき 金太 こんた

年齢 10歳(?)

性別 男

備考

長い前髪で右目を隠した少年。不明な点が多いが、謎のドライバーを所持していることから、仮面ライダーと思われる。一人称は「僕」。

そしてアンケート(?)

え、3月5日から連載しておりますこの仮面ライダー000外伝「仮面ライダーテマリ」なのです・・・

もう少しで10000PVに突入するんすよ！

えっ！？遅いつて？

．．．．．知ってますよ．．．．．。

で、ですが！その記念に番外編を書こうと思うのですが、次の内どれが良いでしょう？

？勇樹と沙良のほのぼの話

？とりあえずリリなのの世界にぶち込む

？もしくは仮定の話（もしもシリーズ。もしも沙良がツンデレだったら、もしも優花がヤンデレだったら、もしも勇樹が違うライダーだったら）

？テマリーとあの子と800年前の物語

？？と？

？？と？

？？と？

？？と？

？？と？

？？と？

？読みたいの3本選ぶ

？全部

？自分で決める！

？お前の小説なんか読みたくねえよお（ペッ

の、どれがいいでしょうか？

勇樹

「選択肢多っ！」

沙良

「ていうか？が来ちゃったらどうするの？」

泣く。

勇樹

「オイ！」

沙良

「まあそこは置いて、応募してくださった方は勇樹と私の登場券を差上げます」

いらなかったら破き捨ててください。

沙良

「ひどっ！」

勇樹

「1票でもあったのは書きますので、投票が多かろうが少なかろうがリクエストがあれば書きます」

どんどん応募してくださいねー！

勇樹・沙良

「「お待ちしてまゝす!!」」

## オリキャラ紹介DX・人気投票のお知らせ（前書き）

小説家になろうが今日で7周年だそうです。  
ハッピーバースデー！！

つてな訳でキャラ紹介DXです。

## オリキャラ紹介DX・人気投票のお知らせ

名前 ひの 日野 ゆうき 勇樹

性別 男

年齢 17歳 18歳

身長 166センチ

体重 52キロ

職業 高校生

好きなもの 沙良 優花 金太 泉家 映司 笑顔 人の為になること

嫌いなもの 誰かが不快な思いをすること テルス スブツ

備考

言わずと知れた本編主人公。風都出身。

キャラクターコンセプトは【折れるたび強くなる男】【真っ直ぐな主人公】

妹（姉）と二人で暮らしていたごく普通の青年。偶然沙良に出会い、テマリーとして戦うことになる。

同じマンションで似た様な境遇である泉兄妹に育てられた。

家事全般は得意。機械は大の苦手。

特に格闘技をやっていたり部活に所属しているわけではない為、身体能力は平凡以下だった。



現在はボクサーの岡村にリハビリを兼ねて基礎対術を学んでいる。  
テマリーとしての戦闘経験が大分増えてきた為、第1話から飛躍的に強くなっている。

成績は5段階評価でオール3しか取ったこと無いというある意味奇跡的な頭脳の持ち主。

現在はテマリーとして戦っている為、体育は5、その他2という残念な形になっている。

本人曰く「人の命より、成績を優先させるな!」らしい。この後、優花にこっぴどく叱られました。

基本的に暗い過去は全部振り切っちゃうタイプ。だが目の前の暗い現実には震えてしまう、メンタル面はまだ弱く脆い。

自分の気持ちに鈍感で、沙良に対する感情に気付いていない。(と  
いうか分かってない)

にらめっこ無敗という無駄にすごい記録を持つ。

テマリーという名前が最初は嫌いだったが、今は愛着を持っている。  
コンボはジャッキオ以外正式名称(タンク等)ではなく、持ち主  
の名前(お師匠コンボ、テルスコンボ、空音コンボ)で呼ぶ。

名前 犬神<sup>いぬがみ</sup> 沙良・ユーズ<sup>さじ</sup>

性別 女

年齢 17歳（817歳）

身長 160センチ

体重 「量ったこと無いや〜」

職業 クスクシエアルバイト

好きなもの 勇樹 優花 金太 その他クスクシエ関係の皆様  
人間 メロンパン

嫌いなもの 好きな人やものを馬鹿にする奴 テルス スブツ

備考

本編ヒロイン。

キャラクターコンセプトは【良いグリード】【天然犬っ娘】

800年前から人間に味方していたグリード。先代テマリーについて  
思わせぶりの発言が目立つが・・・？

勇樹をテマリーに選んだ。一瞬で勇樹が器にふさわしいと見抜いた  
が、どうやったかは不明。

メロンパン大好き。そのせいで勇樹の財布の中身はいつでも振り切  
っちゃてる。

機械が大の苦手。具体的に言うとな器用。耳の裏をカリカリされる  
事と頭をなでられるのが好き。

足が速く、身体能力は高いが、天然もあってか頭はそんなに良くない。  
明るく無邪気で真っ直ぐな性格。その性格や存在が勇樹の戦う原動力になっている。  
勇樹同様、自分の思いに鈍感で、勇樹への気持ちに気付いていない。  
メダルは専用のファイル（アंकが使っているものの赤い奴）に入れている。

物語中盤、人間になりたいという欲望が芽生えるが……？

名前 日野 優花  
ひの ゆづか

性別 女

年齢 16歳（17歳）

身長 156センチ

【データは削除されまし

職業  
高校生

好きなもの 兄(弟) 沙良 金太 その他兄(弟)と同じ

嫌いなもの 兄（弟）と同様

備考

勇樹の妹であり姉。

キャラクターコンセプトは【妹であり姉】  
【勇樹の保護者】

一度死んでセルメダルでできた体を持つて復活した人造生命体

勇樹の双子の姉であるが、復活するまでに1年かかった為1個下の妹扱いになっている。

最初のキャラ設定のその他兄と同じ、という部分はここへの複線だ  
つたりする。

定期的にセルメダルを投入しないと肉体が持たない。

その為、仮面ライダーバンクとして、生きる為、自分に関わった人を守る為戦うことになる。

名前の優花ゆうかが勇樹ゆうきとアルファベット1文字違いで、一つ上の音なのは双子の姉であることに由来する。

名前 くろつき 黒月 こんた 金太

性別 男

年齢 10歳（810歳）

身長 145センチ

体重 32キロ

好きなもの テマリーの関係者 ソフトクリーム ミートボール

嫌いなもの セロリ ピーマン

備考

人間でありグリード。

キャラクターコンセプトは【半グリード半人間】 【裏テマリー】

今は登場したばかりだが、仮面ライダーネイトとして戦い続けてきた少年。

どういうギミックかは分からないが、変身すると身長が伸びる。

自分の命を救ってくれた代わりに自我を失ってしまったグリードを完全復活させるために戦う。

沙良とは昔から姉弟のような関係。 勇樹と沙良の恋を密かに応援してる。

ウシ・シカ・ウマのコアメダルを所持している。

名前 カケル（イイズナ）

年齢 不明

好きなもの 賭け 弟子

嫌いなもの 無断で自分のコアメダルを使う奴

備考

勇樹&沙良の師匠。

キャラクターコンセプトは【おやっさん】**【漢グリード<sup>おぐりど</sup>】**  
クマ系のメダルを持っている。

本編では沙良を賭けて勇樹と戦い、テマリーにふさわしいか見極めた。

沙良の悩みに冬眠から起きてきたりと、なにかと弟子のことが心配。

現在はスブツにやられた模様……。  
楚良さんからアイディアを頂いたグリード。

名前 牛若<sup>うしか</sup> 空音<sup>そらね</sup>・カナ

年齢 17歳（817歳）

好きなもの 勇樹 沙良 ピアノ 音楽

嫌いなもの 音楽（又は楽器を汚す奴） テルス

備考

勇樹のクラスメートであり、沙良の親友。

キャラクターコンセプトは【良い人版カミーラ】 【作者お気に入り】  
夜行性生物のメダルを所持している。

勇樹のクラスメートとして人間界に溶け込んでいた。  
ピアノが上手く、賞をいくつももらっている。

本編では勇樹に心惹かれていたが、まさかの途中退場という形になってしまう。  
そのさいに、「勇樹が沙良に対する気持ちに気付くまでは愛している」という、半ば諦めの混ざった言葉を残しメダルになった。  
そのさい、「日野さん」と呼んでいた勇樹を「勇樹」と呼んでいる。  
結果的にはテルスを倒し、勇樹が高所恐怖症を克服する切欠となった。

名前 テルス

年齢 不明

好きなもの 悲鳴 血

嫌いなもの 笑顔 喜び 正義

備考



言わずと知れた書くのも片腹痛い最悪キャラ。  
キャラクターコンセプトは【最悪の存在】【嫌われ担当】  
両生類系のメダルを持っている。  
ゲゲツという独特の笑い方が特徴。  
テマリーを3連続で倒すほどの戦闘力を持つ。  
恐らく最も嫌われているキャラ。  
最終的には全部振り切った勇樹にあっさりと倒されてしまった。

名前 スブツ

年齢 不明

好きなもの 絶望 恐怖 仲間割れ

嫌いなもの 仮面ライダー 沙良 カケル 空音

備考

現時点でのラスボス。  
キャラクターコンセプトは【女帝】 【最凶のグリード】  
詳しくは本編のネタバレになるが、カケルを倒した張本人。  
毒爬虫類系のメダルを持っている。  
テルスを支配下においていた。

名前 佐藤 さとう  
漣 れん

年齢 17歳

備考

勇樹のクラスメート。

キャラクターコンセプトは「たっくんオルフェノクが！」  
学校でヤミーに取り付かれていた所を勇樹に助けられる。  
そのため勇樹からしたら平気でヤミーとかのことを話せる重要な相手。  
手。

実は空音のことが好きという裏設定がある。

鈴とは幼馴染。

一度だけ仮面ライダークロムに変身した。

名前 鈴木 鈴

年齢 17歳

備考

勇樹のクラスメート。

キャラクターコンセプトは【ツンデレ担当】

修学旅行先でヤミーに寄生されたところを勇樹に助けられる。

漣の事が好きという裏設定がある。

彼とは幼い頃からの友達。（本人曰く「腐れ縁よ！」とのこと）

## 仮面ライダーテマリ

### 備考

オーズの欠点であった『変身しすぎると暴走する』というのを抑えた分劣化した仮面ライダー。  
その分を補う為のコンボがあるらしいが………？  
フォームは多すぎるのでコンボだけ。

イキルコンボ

頭：イタチ

体：キツネ

脚：カエル

### 備考

リスクの無いコンボ。その分他のコンボより弱いが、初戦の相手にはこれがピッタリ。

必殺技は両足キックの【イキルキック】

ジャッキオオコンボ

頭：ジャツカル

体：キツネ

脚：オオカミ

備考

勇樹が初めて変身したコンボ。800年前もこのフォームで映ってる事が多いが・・・？  
スピードと回復力が自慢。

必殺技は高速で切り裂く【ブレイブストライサー】

ジャッキオオ第1覚醒

メダルが突然吼える謎の現象。テマリが覚醒する前触れらしいが・・・？

必殺技は【ファンゲインパクト】【ギャラクシーファンゲ】

タンクコンボ

頭：イタチ

体：パンダ

脚：クマ

備考

勇樹曰く「お師匠コンボ」パワーが自慢のガチムチ形態。  
必殺技は両方の拳から放つ【二連爆裂暴風拳】  
にれんばくれつぼうふうけん

サンマルコンボ

頭：サンショウウオ

体：サラマンダー

脚：カエル

備考

勇樹曰く「テルスコンボ」翠で炎を操る水中戦担当。防御や回避が得意だが、持ち主がテルスだった為抵抗感があり、本編での出番は少ない。

必殺技は両足キック【バーニングドライブ】

フクコウスコンボ

頭：フクロウ

体：コウモリ

脚：ミミズク

備考

勇樹曰く「空音コンボ」空中戦担当。基本色は紫で、左手にコウスピナーが付く。

必殺技は両足キック【ライジングクロー】と、ギガスキャンからの突撃【フルムーンストライク】

仮面ライダーネイト

ウシカウマコンボ

頭：ウシ

体：シカ

脚：ウマ

備考

二刀流のコンボ。氷を操ることが可能。今のところネイトはこれ以外のコンボは見つかっていない。

必殺技は相手の足元を凍らせて切り裂く【ブリザードストラッシュ】

## 仮面ライダーバンク

### 備考

金のバース。ただそれだけ。優花が変身し、攻撃して得たセルメダルは変身者の体内に吸収される。  
必殺技は各種【セル・バースト】

## 仮面ライダークロム

### 備考

本編に一度だけ登場し、沙良が無くした伝説のドライバーから変身する。  
セルメダル125枚を消費する上に超弱いので別にいいが。  
漣のみ変身。



人気投票〜！！

上記のキャラクターから3名以下選んで応募してください。

最高3名までですが、できれば3人分応募してくださいと嬉しいですよ。

後、この先はしたい方だけで良いですが、テマリーの中で一番好きなコンボ、それから一番好きな平成ライダーも応募してくださいと嬉しいです。

投票は感想からでかまいません。

コーナーじゃない方も投票できるので、みなさん是非応募してください！

オリキャラ紹介DX・人気投票のお知らせ（後書き）

期限は4月7日までです！

勇樹

「短くね!？」

だって読んでくれてる人少ないし・・・

勇樹

「なるほど・・・」

ご応募お待ちしております！

## 沙良完全版とケルベロスコンボとその他コンボ（前書き）

沙良（完全人間形態）とかの紹介です。

## 沙良完全版とケルベロスコンボとその他コンボ

名前 いぬがみ さら  
犬神沙良

### 備考

ユーズこと沙良が完全に人間になった状態。普通の人間と何も変わらず、心臓などの内蔵もあれば、子供も産める。その分独占欲や嫉妬心などが芽生え、勇樹は手を焼いている。

勇樹が好きから大好きにグレードアップしている。

普通に人前でキスとかもしちゃう子。

一応未だにヤミーやグリードの気配を察知することができる。

## テマリ・ケルベロスコンボ

ジャッカル・キツネ・オオカミで1セットになった【ジャッキオオメダル】を3枚使って変身する、テマリ最強フォーム。これを超えるテマリフォームは存在しない。本来は金色に輝く体と刺々しい身体なのだが、暴走すると漆黒の体になる。

あまりに強力すぎる為、1分以上使用すると暴走する恐れがある。武器は全身の棘とファングセイバー。

ファングセイバーはキツネソードの超強化版で、メダルを10枚入れてスキャンすることで真の力を発揮する。

必殺技は【ファングエクストリーム】というキックと、ファングセイバーによる【月下咆哮剣<sup>げっかほうこうけん</sup>】

## 番外編限定コンボ

テマリー・エターナルブレイズコンボ

頭：タヌキヘッド

体：シロネコアーム

脚：イヌレッグ

### 備考

はやて、なのは、フェイトの魔力をもらったメダルを使用した、テマリーの仮コンボ。

タヌキヘッドによる見た武器の複製が主な武器。

シロネコアームは本気出せばスターライトブレイカーを放てるが、それ使うと勇樹が両腕を大火傷するので使わない。

イヌレッグはオオカミレッグの劣化版。

必殺技は武器によって変わる。

尚、コンボになった際流れる歌が特殊。

テマリー・ハクチヨウコンボ

頭：ハクチヨウヘッド

体：チヨウチヨーム

脚：ウサギレッグ

#### 備考

勇樹曰く【真っ白コンボ】又は【くしゃみコンボ】

かつこ良いというよりは綺麗なコンボで、チヨウチヨの羽は着地すると光の粒となって辺りに散る。

武器は薙刀、ホワイトハルバード。

必殺技は薙刀の【白雪一閃<sup>しらゆきいつせん</sup>】と、キックの連打【スノーレイン】

テマリー・ボツコンボ

テマリー・ソストルコンボ

頭：シソチヨウヘッド

体：マンモスアーム

脚：ヴェロキラプトルレッグ

備考

恐竜系コンボ（？）

一時期これで行こうとか考えていたが、すぐネタ切れになりそうなので止めた。



テマリ・ドスゲコンボ

頭：ドラゴンヘッド

体：ペガサスアーム

脚：ケルベロスレッグ

備考

ぶっちゃけ幻獣コンボで行こうとか考えていた時期もあった。

でもいろんな人が思いつくと思って止めた。

つかオーズの最強フォームとして出るんじゃないかとびくびくしてた。

まあこれはガーディアンに受け継がれているが。

沙良完全版とケルベロスコンボとその他コンボ（後書き）

ボツコンボはお持ち帰り自由です（笑）

## 日野勇樹26の名言(迷言)集(前書き)

本編に勇樹君26の名言というのがでてきたので纏めました。

さあ、お前の罪<sup>ミヅミ</sup>を数えろ！

## 日野勇樹26の名言(迷言)集

・もっ、良くわかんねえな！

・お前の罪を清算しろ・・・

・空音、見てろよ・・・俺の、変身っ！

・みんなに笑顔でいて欲しいんです！

・この雨だって止むよ！そしたら青空になる。今だって、この雨を降らせてる雲の向こうには、どこまでも青い空が広がっているんだ！

・沙良を助ける為なら、それが俺のいるべき場所なんだ！

・戦いを止める・・・

・戦うことが罪なら、俺が背負って生きてやる！

・オンドウルルラギッタンディスカー！？（地球語訳：本当に裏切

ったんですか!?)

・ウゾダンドコードン! (地球語訳: 嘘だそんな事ー!)

・鍛えてます、シュッ

・おばあちゃんが言っていた、友情とは、友の心が青臭いと書くってな

・おばあちゃんが言っていた、食とは、人が良くなると書くってな

・おばあちゃんが言っていた、男がしてはいけないことは二つある。一つは女の子を泣かせること。もう一つは、食べ物で粗末にすることだ!

・俺、参上!

・お前、僕に釣られてみる?

・俺の強さにお前が泣いた!

・倒すけどいいよね？答えは聞いてない！

・降臨！満を持して

・最初に言っておく！俺はかーなり、強い！

・最初に言っておく！特に言うことはない・・・

・過去が希望をくれる・・・

・忘れていいはず無い・・・

・キバって、いくぜ！

・名護さんは最高です！

・僕が新しいキングだ！

・通りすがりの彗星だ！覚えておけ！

・人は旅を続ける。そして旅を恐れない！

・大体分かった

・さあ、お前の罪を数えろ！

・興味深い、ゾクゾクするね〜

・ハードボイルドに決めるぜ！

・ライダーは助け合いでしょ！

・行けますって！ちよつとのお金と、明日のパンツさえあれば！

・あちこち旅してきたけど、楽しんで助かる命が無いのは、どこも一緒だなあ！

・手が届くのに手を伸ばさなかったら、死ぬほど後悔する。それが嫌だから手を伸ばすんだ。

・俺が、変身っ！

・俺のビッグバンはあ、もう、止められないぜえ!!

・いつだってどこだって、こんなはずじゃないことばかりだ!

・友達に、なりたいんだ・・・

・全力全開!

・僕は、あの人を超える!

・返事が無い、ただの屍のようだ

・完璧?笑わせんじゃねえ!そんなもんつまんねんだよ!弱くて脆くて、欠点だらけだからこそ生きてるって言えんだよ!

・欲望を抑えることなんて誰にもできない。でも、欲望に打ち勝つことはできる!



日野勇樹26の名言(迷言)集(後書き)

いくつつツツコメましたか？

1ゝ5のあなたは普通レベルです。

6ゝ10のあなたは中々です。

11ゝ20のあなたはすごいです！

21ゝの人は良くそんなに見つけれましたね・・・

ちなみに一つだけ答えを・・・

これ45個あった・・・。

人気と結果と意外な人！？（前書き）

結果発表！

人気と結果と意外な人！？

人気投票！結果発表！

全

『ワ～！』

さっそく第4位から！

金太

「第4位！

カケル師匠！

漣さん！

先代テマリー！

皆さんどうぞ前へ！」

漣

「って僕だけじゃん！」

勇樹

「しょうがねえだろ？ 師匠はやられたし、先代テマリーなんて800年前の人物だぞ！？」

沙良

「そつだよね」

金太

「では一言どうぞ！」

漣

「ええ！？ えつと、こんな僕に票をくださってありがとうございます！」

勇樹

「漣には何か良い事あんのか？」

特に考えてない。

漣

「ひどくない！？」

安心しろ！

イズナと先代テマリーには見せ場あるから！

漣

「なおさらひどいよ！」

勇樹

「あ、そっか！ 後2話くらいやったら過去編か！」

沙良

「すごいネタバレだね」

金太

「ってな訳で第1位！

日野勇樹さん！

日野優花さん！

犬神沙良さん！

どうぞ前へ！

つて僕は無いんですか！？  
漣さんですらあったのに！？」

漣

「僕ですらって…」

勇樹

「んま、俺が1位は当然だわな」

沙良

「良かった〜！」

優花

「私も1位だ〜！」

金太

「皆さんには何か良い事あるんですか…？」

全

『（ちよつと泣いてる…）』

勇樹と沙良はセットで見せ場あるし、優花にも結構見せ場作る予定

だよ！

勇樹

「ま、俺らはセットだよな？」

沙良

「うん！」

優花

「わぁーい！」

金太

「…どうせぽつと出ですよ…。どうせ子供ですよ…どうせメダルが地味ですよ…」

だ、大丈夫！金太もちゃんと見せ場作るから！

金太

「…ほんとですか？」

うん！

多分



金太

「ちよっ!？」

勇樹

「皆さん、投票ありがとうございました!」

沙良

「これからも仮面ライダーテーマリーをよろしくお願いします!」

全

『ばいばい!』

勇樹

「ところで、コンボ人気投票はどうなったんだ？」

ジャッキオオとタンクに票があったからね。

ジャッキオオはケルベロスになったから、タンクに新必殺技を出すよ！

沙良

「平成ライダー人気投票は？」

…ダークライダーばかりきたから検討中。

勇樹

「ふん」

人気と結果と意外な人！？（後書き）

1位になった勇樹・沙良・優花を出してください方募集中！

## イラストとヘタクソと（笑）

沙良

「勇樹く！テマリーの絵え描いたよ〜！」

勇樹

「へえ〜、みして！」

沙良

「えへへ〜！じゃーん！！」

> i 2 0 7 8 5 — 2 7 7 1 <

勇樹

「おお〜……………」

沙良

「むう〜、何？その微妙なリアクション……………」

勇樹

「いや、顔が悪そうだな〜って……………」

沙良

「まあ色塗ってないし、赤い目だしね……………」

勇樹

「何で目だけ塗ったんだよ！？」

沙良

「だって金と銀と銅のペンなんてないもん！」

勇樹

「じゃあ描くなよ！」

沙良

「読者の皆様に分かりやすいように……」

勇樹

「じゃあ色塗れよ……」

沙良

「……………」

勇樹

「……………」

沙良

「でもでもっ！これを見て描いてくれるって人がいるかもよ！？」

勇樹

「いたらいいな」

沙良

「うん……………」

勇樹

「では皆さん！次回の更新でお会いしましょう！」

勇樹・沙良

「バイバイ！」

番外編 無欲と天然と守護者

どこかの場所……

とある見習い調教師がいた。

「全部従えたい……全部……」

その後ろに、銀髪の青年が立っていた。

「その欲望、開放しろ」

その調教師の頭に、メダルが投げ入れられた。

クスクシエ

今日も今日とて忙しく働く俺、日野勇樹。

普通の高校生として生活する傍ら、仮面ライダーテマリというのもやっています。

テマリって名前ダサイよね…………。

「勇樹、さっきから誰に言ってるの?」

今俺のことを可愛そうな子を見るような目で見てるのは犬神沙良。

人間じゃない。

…………ってことをしゅっちゅつ忘れる。



「うんにゃ、なんでもねえ。」

何でいきなりキャラ紹介なんて始めたのかなあゝ．．．．。

ま、いつか！

バイトを終え、家に帰る途中

「勇樹、ヤミーが出たよ！」

「場所は！？」

「こつち！」

沙良の後を追って走った。

そこにいたヤミーは、猫に鞭を持たせた様な姿だった。

「あの鞭なに？」

「さあ？」

俺と沙良でそろって首をかしげる。

すると、映司さんとアンコがやって来た。

めんどいから説明はカット！

「アンク、あの鞭は？」

「知るか！」

まあだろうな。

「沙良、メダル」

「うん」

沙良からメダルを受け取り、ドライバーにセットする。

「変身っ！」「」

【タカ！トラ！バッタ！タ！ト！バ！タトバタ！ト！バ！】

【ジャッカル！キツネ！オオカミ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャッキオオ！！】

オーズ、テマリーに変身し、ヤミーに向かっていった。

「おらぁ！」「」

「はっ！」「」

キツネソードとトラクローで切り裂こうとしたが、その前に鞭で叩かれる。

「あっ……………」

「えっ…………？」

その瞬間に、俺の意識は途切れた。

s i d e   o f f

オーズとテマリーの目が黒くなり、沙良とアंकに向かってゆっくりと歩いてきた。

「え！？ア、アंक、どうなってるの！？」

「やばいな・・・そして俺はアंकだ！」

そこに、バースこと伊達明がやって来る。

「お？なになに、なんで火野コンビあっちにいの？」

「なんか、あのヤミーの鞭を喰らったらああなっちゃって・・・」

「ほっ・・・ま、お仕事開始だ！」

メダルを弾き、顔の横で力強く握る。

「変身」

パカッという気持ちの良い音が響き、伊達がバースに変身する。

「沙良ちゃんにアンコ！仕事のじゃまだからどいてろ！」

バースバスターを構えて走っていった。

「アंकだ！」

「とにかくどいてよう？ナマコ！」

「アंकだ！一文字もあつてないだろそれ！」

ぎゃーぎゃー言いながらも下がるアンコ・・・もといアンク達。

「はっ！」

伊達はバースバスターを連射するが、テマリーがキツネソードで全て弾く。

「くっ！何か攻撃しづれーな・・・」

そんなことをぼやいていると、オーズがドライバーをスキャンする。

【スキヤニングチャージ！】

「はあっ！」

オーズが飛び上がる。

「ちょちょちょちょ！」

「せいやあああああー！」

タトバキックを決め、バースが大きく吹っ飛ばされる。

「ぐあああああ!!」

変身は解けなかったが、結構なダメージを追ってしまう。

「がはっ……」

伊達が苦しんでいると、どこからとも無く灰色のカーテンが現れ、中から一人の仮面ライダーが出てくる。

「あんたは？」

「通りすがりの守護者だ……覚えておけ……」

それだけ言うと、その仮面ライダーの体からオーズとテマリーの分身が現れる。

それぞれ本物に向かっていき、戦闘を始めた。

一方ヤミー本体には謎のライダーが向かっていった。

「にゃっ！」

ヤミーが鞭を振るうが、軽くそれを避けながら接近して行く。

そして

「はっ！」

一撃決め、ヤミーから親が分離する。

それで力を失ったヤミーは、腹を押さえてフラフラした。

その瞬間、オーズとテマリィの目がそれぞれ緑と赤に戻る。



勇樹 side

あれ？俺今何やってたんだ？

「勇樹！良かった．．．」

沙良？良かったって何が？

あ、伊達さんもいる。

って何か見知らぬライダーがいるう！？

「と、今はそんな場合じゃねえか！映司さん！」

「うん！」

「伊達さんも、いつまで寝てるんすか！？」

「寝かせたの誰だよっ！」

知りませんよんなこと……。

【「スキャニングチャージ！！！」】

俺と映司さんと謎のライダーがスキャニングチャージをする。

【セル・バースト】

伊達さんもバースバスターを構えてる。

「もういっちょ！」

【トリプル！スキヤニングチャージ！】

【ツインスキャン！！】

メダジャリバーとキツネソードにエネルギーがたまっていく。

「ツインフアングストラッシュ！」

まず俺の技でヤミーの鞭を切り裂く。

「おらああああ！！！」

「せいやああああ！！！」

次に伊達さんと映司さんでヤミーをぶっ飛ばし、止めに・・・

「でやああああ！！！」

オーズとテマリーの偽者が相手を凍らせ、そこにあのライダーがキックをぶちかました。

爆発し、メダルになるヤミィ。

・・・こういうのって、オーバーキルって言うんだよね・・・。

伊達さんとアッコがメダルを取り合ってる間、俺達は変身を解除してそのライダーと話した。

「あんだ、一体何者なんだ？」

俺の問いに、そのライダーは変身を解除した。

そこに立っていたのは、腰まで伸びた銀髪に、神秘的な光を放つ蒼銀の瞳を持った男性だった。

「八神龍也。龍也でも八神でも好きなほうで呼んでくれ。」

これが、俺と龍也さんの最初の会話だった。

**番外編 夢とほのぼのと午前中（前書き）**

番外編の？と？です。  
合体させました。

なのはの世界は少々お待ち下さい・・・。

番外編 夢とほのぼのと午前中

AM 8:00

学校もバイトもない俺の1日は、このちょっと遅めの時間から始まる。

「ふああゝあ・・・」

体を伸ばし、大きくあくびをしてリビングに向かう。

だが、そこには誰もいない。

そっか、優花は留学する友達のお別れパーティ。

沙良は・・・

「たっだいまゝ！・・・あ、勇樹、おっはよゝ！」

沙良はいつも天気の良い日はその辺をランニングしてくる。

「おはよう、沙良」

「うん！今日も良い天気で気持ちいいよー！」

毎日聞いている気がする。

「ほいほい・・・飯食った？」

「ううん。だからもうお腹ペコペコだよ」

腹をさすって訴えてくる沙良。

「んじゃ久々に俺が作るか・・・何食いたい？」

一応リクエストを聞いておく。

まあ答えは分かってるが・・・



「メロンパン！」

「1から俺に作れと！？材料無しで！」

「いつもこれだからな〜……………」

「むう〜、文句言っなら聞かないでよ〜」

「お前何様のつもりだこの野郎！」

「いや、野郎じゃねえけど……………」

朝食を取り終わり、絶賛暇もてあましタイムに入った俺ら。

「ヒマだな」

「うん。でもなんかこうして二人でゆっくりするのって久しぶりじゃない?」

「だな。最近ヤミーと戦ってばかりだったし」

「だよね……」

「うん、つってもやっぱりヒマだな……」

「なあ沙良?何かしようぜ?」

「……」

「返事がない。ただの屍のようだ……」

「じゃなくって!」

「沙良?」

「すうゝ・・・・・・・・すうゝ・・・・・・・・」

可愛い寝顔で寝ちまつた・・・・・・・・。

「おいおい・・・・・・・・」

余計暇になった。

何ていうかアルティメットライジングシャイニングサバイブプラス  
ターキングアームドハイパースーパークライマックスエンペラーコ  
ンプリートエクストリームタジャドルギガスキャン！ってぐらい暇。

・・・・・・・・何言っただ俺？

再び沙良を見る。

相変わらず可愛い寝顔で寝てる。

まったく、食ったら寝るって・・・太るぜ？

ってかその前に風邪引くな。

俺は沙良を抱えて沙良の部屋に入った。

ベッドに寝かせ、布団をかけてやる。

あゝ、この部屋良い香りがするな・・・。

沙良の香り？

それにグラツときながら、俺は沙良の寝顔を見つめた。

s  
i  
d  
e  
  
o  
f  
f

夢を見ていた。

ずっと昔、800年以上前のこと……。

テマリーは、裏のグリートを封印するために戦っていた。

『あの子』と共に。

「テルス！おとなしくしろ！」

『あの子』が叫ぶ。

「ゲゲッ！そう言われておとなしくする馬鹿がいるか！」

汚い声で吼える。

「仕方ない……」

適合者はドライバーにメダルをセットし、スキャンした。

「変身……」

【ジャッカル！キツネ！オオカミ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャッキオオ！！】

私のメダルのコンボ。

これが一番使いやすい。

慣れてるっていうのもあるけど……。

キツネソードを構え、テルスに突っ込んでいった……。

「う……うん……」

どうやら寝てしまったらしい。

左側を見ると、勇樹がだらしなく床で寝ている。

（もう、風邪引いちゃうよ……）

ちょっと重たい勇樹をがんばって担いで、布団に入れてあげた。

間近で改めてその顔を見る。

（普段はどっちかって言うとかっこいいって感じだけど、寝顔はか



わいいんだね)

思わず顔がにやける。

(ま、もうちょっと良いかな・・・？今起きてもきつと、ライジングアルティメットシャイニングサバイブラスターキングアームドハイパースーパークライマックスエンペラーコンプリートエクストリームタジャドルギガスキャン！ってぐらい暇だろうからね)

そんなくだらない事を考えながら、私は再び眉を閉じた。

s i d e o f f

「う．．．うん？」

嫌な夢を見ていたようだ。

変な寝汗をかいている。

10年以上前の、あの日の夢．．．．．。

あれ？

布団に入ってる？

横を向くと、すぐそこに沙良の顔があった。

あ、こいつが入れてくれたのか。

でも近すぎないか？

布団から出ようとするが、袖を掴まれているため出にくい。

（ま、もう少しくらいいいか・・・）

改めて俺は目を閉じた。

まだ、正午を迎えたばかりだ。



番外編 夢とほのぼのと午前中（後書き）

さて、沙良の夢は大分複線（？）がありました。が、いかがでしたでしょうか？

前テマリーは一体誰なのか？

では、感想等いただけると嬉しいです。

## 番外編 ツンデレとヤンデレともしも

もしも沙良がツンデレだったら・・・

勇樹

「ヤミーか・・・沙良、メダル！」

沙良

「はあ？何で私がメダルを貸さなきゃいけないの！？バツカじゃない！」

勇樹

「いや、メダル無いと変身できねーじゃん！」

沙良

「じゃあ生身で戦えば？その方がお似合いよ！」

勇樹

「あゝっもう！分かったよ！」

メダジャリバーを握って突っ込む勇樹。

勇樹

「くっ・・・！」

沙良

「うずうず」

ヤミーのパンチが勇樹の鳩尾にヒットする。

勇樹

「うわああああ!!」

沙良

「・・・もう!」

勇樹の方に駆け寄る。

そしてぶつきらばうにメダルを差し出す沙良。

勇樹

「沙良・・・?」

沙良

「かつ、勘違いしないでよね!別に勇樹が心配だからとかじゃなくて・・・その・・・テマリー!テマリーがいなくなったら私も困るからよ!分かった!?」

勇樹

「ああ。ありがとう。」

沙良

「~~~~ノノノノう、うつさいバカ!さっさと変身しなさい!」

勇樹

「おう、変身っ!」

戦闘勝利

勇樹

「ふう、沙良、メダルサンキュ！助かったぜ」

沙良

「ま、まあ私のメダル使ったんだから勝って当然よ！」

勇樹

「はは、だな。何か沙良と一緒に戦ってる気がして心があったかいんだよね」

沙良

「なっ！？／／／／」

戦闘敗北

沙良

「ちょっと！何やってんのよ！」



勇樹

「ごめん、すぐ取り返す・・・」

沙良

「メダルなんかどうでもいい！勇樹が無事が聞いているの！」

勇樹

「えっ！？沙良、お前・・・」

沙良

「何よ！？・・・／＼／＼」 言うてから恥ずかしくなった。

勇樹

「・・・サンキュ」

沙良

「／＼／＼次頑張んなさい」

なんだこれ？

もしも優花がヤンデレだったら・・・

勇樹

「ただいま」

沙良

「ふう、疲れた」

勇樹

「あれ？優花、いるだろう？」

台所で包丁を研いでいる優花。

優花

「お兄ちゃん、こんな遅くまで何してたの・・・？」

勇樹

「えっ？そりゃ、ヤミ倒したり・・・」

優花

「沙良お姉ちゃん？」

勇樹

「いや、沙良がメダル持ってるし・・・」

優花

「メダル預かって行けば良かったんじゃないの？答えて。こんな時間まで沙良お姉ちゃんとなにしてたの？」

勇樹

「い、いや、だから・・・」

沙良

「ガクガクブルブル」

ナンダコレ？

もしも勇樹が龍騎だったら・・

まだドラグレッダーと契約する前、最初の戦闘。

勇樹

「変身!」

龍騎に変身する。

勇樹

「おっしや!」

気合を入れて鏡の中に入る。

戦闘開始

【ソードベント】

勇樹

「おりゃあああ!」

ばきっ

勇樹

「ああ！？折れた！」

結論・多分あんま変わらない

もしも勇樹が剣<sup>ブレイド</sup>だったら・・・

例のあの戦闘。

勇樹

「はぁ・・・はぁ・・・」

追い詰められるブレイド。

それを遠くから見つめるギャレン。

勇樹

「映司さん！？・・・なぜ見てるんです！・・・本当に裏切ったんですか！」

結論・オンドウル語ではない。

おまけ

勇樹

「本当に裏切ったんですか！」

ギャレン（映司）

「・・・・・・・・」

勇樹

「あなたと俺は、仲間じゃなかつたあああ！」

映司

「（ごめん勇樹、今の俺には・・・・・・・・）

パンツが無いんだ・・・！  
」



番外編 もしもとバカ企画と実行（前書き）

エイプリルフールのバカ企画の奴です。

## 番外編 もしもとバカ企画と実行

もしもアंकが良い人だったら

サゴーズ初登場

オーズ

「アंक、これって、メダルのコンボ・・・？」

アंक

「え！？いやそうだけど・・・！ちょ！映司やめろって！ほんと、な！？コンボやばいから！お前死ぬから！ほんとやめろ！？なっ！？」

タジャドル初登場

比奈

「このメダルも、そのためなら返すから！」

オーズ

「比奈ちゃん！」

アंक

「最初からそのつもりだあああああ！！！」

ナニコレ？

もしもアंकがドジッ娘だったら

オーズ

「くっ……」

テマリ

「っ、強い……」

カザリ

「僕はまた進化した。今の君たちじゃ、僕には勝てない」

オーズ

「アंक！コンボで行くしか……！」

テマリ

「沙良、こっちもだ！」

沙良

「うん！」

アंक

「えっと……あ、あった！えーじ！こ「ひゃ！」コケツ、バラ」

沙良

「ア、アंकちゃん！？」

アंक

「ふええ、めだるおとしちゃった……」

沙良

「大丈夫……ひゃわあっ！？」コケツ、バラバラ」

アंक

「沙良ちゃきやああ！！」

沙良

「いたた、ごめん、アंकちゃん」

アंक

「うんだいじょーぶ……」

伊達

「沙良×アंकか……」

後藤

「伊達さん、そこはアंक×沙良かと……」

伊達

「はあ、後藤ちゃん分かってないな。いいか!？」

ウヴァ

「アंकたんはあ・・・はあ・・・」

てまりー

「なんだこれ？」

おーず

「勇樹、なんか変なんだ・・・?」

て

「はい？」

orz

「アंकを見てると、胸がときどきして、泣き出すまで虐めたくなくて・・・」

t

「映司さんそっち行っちゃダメ!」

カザリ

「ポン」

何かをテマリーの手に置く。

カザリ

「僕のメダル、預けとく」

どこかへ飛び去るカザリ。

T

「（俺、もうカザリ攻撃すんのやめようかな・・・）」

ウヴァ

「アंकちゃんと沙良さんは俺の嫁！」

【ライオン！トラ！チーター！ラッタラッタ！ラットラーター！！】

テマリー

「お前は消えろおおおお！！！！」

【スキヤニングチャージ！】

・グリードside

ガメル

「めずるゝ、メダル持ってきたゝ！」 計算済み

メズール

「健気なガメルたん萌えるわっ・・・」はあはあ

ウヴァ

「アंकちゃんと沙良たんもふもふしたいお」

カザリ

「・・・」スック

ガメル

「カザリ、どこ行くんだっ？」

カザリ

「ちよっと、テマリーのところ）ダメだこいつら」

もしも後藤さんが素手でヤミーと闘り合えたら

エイサイヤミー戦

伊達

「がはっ・・・」

後藤

「ふんっ！」

エイサイ

「ぐべらっ！」

伊達

「後藤ちゃんナイス！板についできたじゃない」

後藤

「伊達さん！ふんっキザなはあっ！話も、ふっ！いいですね、ど！」



今はっふん！ヤミーを、ふあっ！」

伊達

「あ、やっぱちょっとキザっぽかった？わり・・・（ピーン！）へんs・・・」

後藤

「うおおおおお！！！！」

エイサイ

「ぎえぴー！」「ドゴーン」

バース不要

もしもカンドロイドが強かったら

ライオンクラゲヤミー戦

オーズ

「悪い、ここ頼む！」

タコカンA

【おーっし、おめーら行くぞー！】

タコカン達

【【【【【おおー！！】】】】】

ドゴーン！ドガンー！チュドーン！！

タコカンA

【止めだ！】

ガシヤンガシヤン！

タコカン達

【超爆合体！誕生、タツコングー！】

タコカンA

【くうううらああああえええええー！！】

タコカン達

【オクトバニツシュー！！】

ライオンクラゲヤミー

「みがつはー！！！」

どーん

カザリ

「あれ？ヤミーは？」

いかがでしたか？

もしもシリーズ、お楽しみいただけただけでしょうか？

感想をくれた方先着一名にドジッ娘アंकをプレゼントします（笑）  
では、次回の更新でお会いしましょう！

おまけ

もしも勇樹と沙良がバツカプルだったら

沙良

「勇樹」

勇樹

「お、おい、朝からくつつくなよ」

沙良

「嬉しいくせに」

勇樹

「当たり前だろ？こんなに沙良が可愛いんだから」

沙良

「ふふっ、ありがとっ！勇樹もかっこいいよ」

勇樹

「沙良……」

沙良

「勇樹……」

勇樹・沙良

「んっ……ちゅっ……んっ……」

優花・金太

（気まずい……）

**番外編 もしもとバカ企画と実行・改（前書き）**

すみません。

今の自分ではこれが限界です……。

番外編 もしもバカ企画と実行・改

・もしもアंकがドジッ娘だったら 2

アंक・ロスト

「ボクは何処!？」

アंक

「ふええ!？ わ、私がいる!？」

アंक・ロスト

「あれ？ ボク？」

アंक

「え？ 私は私であってボクじゃないですよ？ そちらこそ私じゃないんですか？」

アंक・ロスト

「？ ボクはボクであって私じゃないよ？ アレレレ？」

アंक

「アレレレレ？」

Wアंक

「アレレレレレレレレ?？」

カザリ

「何だかあゝ……」

ウヴァ

「そんなアंकさんに萌え萌えキュン！」

オーズ・タジャドル

「セイヤアアアア！」

ウヴァ

「うヴあゝ！」

・メズール・ガメル復活

ウヴァ

「復活して、俺より強くなっても困るからな……これくらい抜いておくか……あ、でも後もう少し……もちよつと……良し！」

布セツト

ウヴァ

「ふつかちゅ……復活のときだあああ！」

メズガメふつかちゅ！

ウヴァ

「久しぶりだな、メズール、ガメル」



ガメル

「ううーん、良く寝たあー」

メズール

「おじさんだれ？」

ウヴア

「お、おじっ!？」

ガメル

「メズール、ここどこだあ？」

メズール

「わかんない。ねーねー、おやつないの?」

ウヴア

（まさか……

ガメルメズール

貴方が全部欲しいのよ!

合体!

せいやーされる

つまり合体したまま

内面も一緒に!？」

ということか……！)

がめる

「お腹すいたあゝ……」

めずーる

「おやつまだあゝ……？」 脚バタバタ

ウヴァ

「おっもちかえりいゝ」

・

1000回記念のときを思い出してください。

オーズ

「うあっ……ぐう……」

比奈

「映司君！……あっ！」

岩を持ち上げる。

比奈

「ふんにゆゝ………」

持ったまま走る。

比奈

「ウオオオオオオオオオ！！！！」

ヤミー

「ぎゃ〜〜！！？」

オーズ

「えっ！？ ちょおお！？ 巻き添え」

比奈

「あれ？ 映司君？」

・ 2

5103

「俺は石だ……石頭だああ！！」

比奈

「ふにゅ〜！」 5103の脚をもってバットにする

カザリ

「えっ！？ ま、マジで！？」

5103・比奈

「ウオオオオオオオオオオオ！！」

ごしゃっ めこっ ぶしゃあああああ

【以下18歳未満の方は閲覧できません】

・3

プティラ初登場  
オーズ変身解除

比奈

「映司君！」

後藤

「やめるんだ比奈ちゃん！」

比奈

「ふにゅー！」ドゴオ

5103

「やな感じー！」キラーン

バス

「後藤ちゃああああああん！」

5103は星になりました。

・4

比奈

「映司君！」

プテラヤミー

「この匂いは同属！」

プテラヤミー

「同属にして、敵！」

襲い掛かる

比奈

「ふにゅ〜！」

チュドーン！

アंक

「あ、メダル」

・ 5

比奈

「私が映司君の手を掴む！」

オーズの腰に抱きつく

ゴキゴキッ！

映司

「う……あ……」

比奈

「映司君！」

映司

「比奈ちゃん……加減、考え……て……」ドサッ（

比奈

「映司君！ 映司君！」

伊達

「さて、後藤ちゃん探しに行くか」

・ <このままでは済まさん

クワガタメダル

『このままではすまさん………』

カラス

「アホー！」パクッ

クワガタメダル

『うわ、ちよつ、ナニスルヤメ………アーツ』

ウヴァ、退場

・ グリード一家（ - の人）

ガメル

「もぐもぐ……」

アंक・ロスト

「じゅっ」

ガメル

「？ なんだあ？」

メズール

「食べたいんじゃない？ 分けてあげれば？」

ガメル

「そうなのかあ？」

アंक・ロスト

「こくこく」

ガメル

「じゃあ、やる！」

アंक・ロスト

「ぱあ」

メズール

「ガメル、優しいのね」ナデナデ

ガメル

「でへへへ……旨いか？」

アंक・ロスト



「こくこくつ」

ナニコレ和む

・もしも優奈ちゃんが……

優奈

「諸君、私は戦争が好きだ。  
諸君、私は戦争が好きだ。  
諸君、私は戦争が好きだ。  
血を見るのが好きだ。  
地面を這い蹲る姿が好きだ。  
命乞いをした人間を甚振るのが好きだ。  
間接ごとに切り裂くのが好きだ。  
痛めつけてから止めを刺すのが好きだ。  
人々の争いが好きだ。  
以下略」  
よろしい、ならば戦争だ」

現状ではこれが限界です……。

如何でしたか？

気に入ってただけならまたやるかも……？  
ではまた！

番外編 リリカルとマジカルと魔砲少女の序章（前書き）

出会ったのは偶然かもしれない。

でも、出会ってからのは運命かもしれない。

人と人との出会いは、何を生み、どう繋がっていくのか・・・？

というプロローグをやってみたかった作者でした！

番外編 リリカルとマジカルと魔砲少女〜序章〜

人と人との出会いは偶然でもあり、必然でもある。

どこかで聞いたことのある言葉だ。

もしもこの出会いが必然なら、それは俺達に何をもたらすのだろうか。  
・・・？

仮面ライダー〇〇〇外伝〜仮面ライダーテマリー〜  
番外編 リリカルとマジカルと魔砲少女

クスクシエでのバイトを終え、俺は沙良、優花と共に帰路を歩んでいた。

そのとき、俺らのすぐ傍にヤミーが現れた。

「蛇？」

その姿を見たとき、俺はそう呟いた。

体は人間と同じような二足歩行だが、腕や顔はまさに蛇のそれだった。

「うわ……」

優花が若干引いてる。

「まあいつか。沙良！」

「うん」

何も言わなくても、お互いに使おうとしてるメダルが分かる。

「変身っ！」

【フクロウ！コウモリ！ミミズク！フウウウクウウウコオオオズッ  
！！】

空音コンボに変身し、空へ飛び上がる。

もう高いところは怖くねえ！

「はっ！」

左手から電気を帯びた光弾を発射する。

「うつ……」

それを受けて数歩後ろに下がるヤミィ。

だが、腕を鞭のようにしてこっちに伸ばしてきた。

「うわっと!」

空中で旋回し、それを避ける。

「キモイな……。さっさと決めさせてもらっぜ!」

コウスピナーにコアメダルをセットする。

【フクロウ! コウモリ! ミミズク! ギン! ギン! ギン! ギン! ギガスキャン!】

コウモリの翼が大きくなり、左腕に紫のドラゴンが宿る。

「はああああああ……!!」

そのままヤミーに向かって急降下する。

「おつりやああああ!!!!」

左腕でパンチをかまし、爆発するヤミー。

それで散らばったメダルを3人がかりでせっせと集める。

しかしあの蛇は誰のヤミーなんだ？



そんなことを考えながらメダルを拾っていると、俺たちの足元に灰色のカーテンが現れた。

「えっ!?!」

「おっ!?!」

「きゃ!?!」

それに吸い込まれるように俺たちは落ちていった……。

どれぐらいたったか……。

ようやく出口に出れた。

隣で沙良と優花が気絶してるのを確認して、俺も意識を手放した。

意識を失う瞬間、誰かの足が視界に入った気がした……。

視界に入った人は誰？

？なのは

？フェイト

？はやて

？その他（名前を書いて下さい）

番外編 リリカルとマジカルと魔砲少女 序章 〔後書き〕

勇樹

「結局いつもまるなげじゃねえか！」

まあどのルートでもいけるんだけどさ。

勇樹

「たえその他が誰であつても？」

た、多分……。

勇樹

「ヴォルテールとかでも？」

……。

番外編 異世界とあれ？と限定コンボ（前書き）

【ヴォルテール！フリード！ハクテンオウ！ヴォオオオオルウドウ  
ッ！！】

（ゴオオオオオカイジャー！みたいな感じで）  
というのをやりかねないハナトです。

今回は説明台詞ばかりです！眠くならないでくださいね？

一応オーズを知らない人でも分かりやすくしたつもりです。

あのグリードとヤミーの説明、アंकはアイスでしたが、この人は・  
・・？

番外編 異世界とあれ？と限定コンボ

「にゅ・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

目が覚めると、どこかの病室・・・・・・・・いや、保健室のほうに近い所に寝ていた。

「じじは・・・・・・・・？」

「あ、気が付いた？」

栗色の髪を左側に纏めている女の子が俺の顔を覗き込んでいた。

見た目同じ年くらいかな？

「えっと、君が俺をここに・・・・・・・・？」

「うん。女の子二人と一緒に倒れてるんだもん。びっくりしたよ」

まさか一人で3人を持ってきたのか!?

ってことは比奈姉並みの怪力……?

「どうしたの?震えてるよ?」

「イヤ!?ナンデモナイデスヨ!?!」

やべー、恐怖が体を駆け抜ける……。

「そう?……あ、私なのは。高町<sup>たかまち</sup>なのはだよ!」

「俺は、日野<sup>ひの</sup>勇樹<sup>ゆうき</sup>。勇樹でいいよ」

「じゃ、私もなのはって呼んでね！」

「りょくかい。……で、俺と一緒にだった二人は？」

「もう先に起きて隊長の所行っちゃったよ？」

「起こしてけよ！って、隊長？ここはどっかの組織なのか？」

「それも含めて今から説明するって！」

そう言われ、俺はその隊長とやらがいる部屋に向かった。

「失礼します」

なのはが挨拶して入る。

こうやってちゃんと挨拶、それに敬礼をして入るあたりはやっぱり組織なのか……？

で、俺も後に続いて入ったのだが……

「あ、勇樹！」



「お兄ちゃん！」

沙良と優花がいた。

それはいい。

「あの、その沙良のそっくりさんは？」

滅茶苦茶似てるぞあの人！

「あ、私の友達、フェイト・テストロッサ・ハラウンちゃんだよ  
！」

名前長っ！！

まあ見りゃ分かるが名前聞く限り外国人か？

「よろしく」

そう言って手を差し出してくる。

「あ、よろしくお願いします……」

この人年上だよなどう見ても……。

「コホン」

奥の席に座っていた少女が咳払いをした。

「ちょっとお話ええか？」

訛りがある。

この子は日本人か。

「ああ。いいぞ」

とりあえずこの世界、そして組織についての話を聞いた。

今俺たちがいるのはミッドチルダと呼ばれる世界。

俺達が元々居た世界とは別の世界。

余談だが、なのは達がいた世界は俺達がいた世界の平行世界らしい。

そしてその世界を管理する目的で作られたのが時空管理局。

まあ世界を管理するなんてどうかと思うが、そこは突っ込まないでおく。

その時空管理局の中でも、機動六課と呼ばれる部隊に今俺達は居る。

「……という訳や。次はそっちのことやね」

「おい沙良、お前説明してなかったのか？」

「やっぱ本人が居た方が分かりやすいじゃん？」

「面倒なだけだろ……。まあいいや、始めるぜ」

俺はテマリーに付いて話した。

欲望から生まれた怪人グリード。

そいつらが作り出すヤミーと呼ばれる生物を倒したらここに来てしまった。

グリードと一口に言っても色々いる。狡猾な奴、好戦的な奴、母親らしい奴、純粹な奴、バカな奴、頼れる奴、優しい奴、キモイの。

「ねえ、順番的にバカな奴っていうのが私？」

「………続けるぞ」

「ちょっと！」

そいつらはコアメダルというものを中心に、セルメダルを回りにくつつけて生きている。

「コアメダルと、セルメダル？」

「そうだな………！」

トレットペーパーを想像してみたい。

あれの芯をコアメダル、紙の方をセルメダルとしよう。

コアを中心にセルがくっついている。

だがコアが抜けたら脆く崩れてしまう。

グリードはそういう存在。

そのコアの抜けた脆い部分はヤミー。

ヤミーはセルだけで構成されている分、グリードよりはるかに弱い。

だが奴らは人の欲望を食らうことで成長する。

それはグリードにも言える事だ（例外も居るが）。

そのヤミーやグリード（人間に害を加える奴）を倒すのが俺を含めた仮面ライダーと呼ばれる戦士。

俺はバイクの免許持ってないから、厳密にはライダーじゃないが・・・。

怪人達から人間を守るヒーローの事を、風都の人が仮面ライダーと呼ぶ様になり、それが発展して俺もそう呼ばれるようになった。

中でもテマリーである俺はグリードのコアメダルを3枚使って戦う。

状況によってメダルを変え、無限の戦い方ができる！

「と、こんなところかな？」

やべー自分でもビックリなぐらい良くしゃべった。

「うん、何となく分かったで」

「なら良かったぜ」

「ほんなら、次の問題や……」

まだなんかあんのか？

「勇樹君、やったよね？」

「ああ」

「……なんで、フェイトちゃんには敬語やのに私やなのはちゃんにはタメ口なん？」

「え？だってフェイトさん年上でしょ？なのはは同じくらいだろうし……はやては年下だろ？」

「・・・勇樹君いくつ？」

「  
17  
」

「・・・私達みんな19やで？」

「なんですとおおおおおお！？」

「やかましい！」

いつて！ハリセンで叩かれたの初めてだよ俺……。

その後、全員呼び捨てで良いと言っていたのでありがたくそうさせてもらった。

んで、なのはに案内されて他のメンバーを紹介してもらっている。

ぶっちゃけ人<sup>キャラ</sup>が多すぎてよお分からん！

あ、でもチビツコ二人は覚えたぞ！目立つし。  
エリオとキャラだったか？



あ、三人目がいた。

そんなことをしていると、何か警報が鳴った。

「アラート!？」

誰かが叫んだ。

そのモニターには白いグリードが映っていた。

尚、グリードと判断できたのは奴が完全形態、つまり3つの動物を模した姿をしているからだ。

「おい！何でこの世界にグリードが居るんだ!？」

「人の欲望があれば、私達グリードはどこにでも生まれるよ」

「お前は違つと思うが……まあいいや！優花！お前は残つてろよ！」

「うん。気をつけてね？」

「ああ！」

へりに乗せてもらい、現場へと急いだ。

なぜか隊長と呼ばれる方々も一緒だ。

「なぜ？」

「仕事だから」

なのは、短くて分かりやすい説明を有難う。

しばらくして、現場に着いた。

「沙良！」

「良くわかんないからイキルでいいっか！」

「だな」

ドライバーを付け、メダルをセットする。

「変身っ！！！」

それをスキャンする。

が

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

【・・・・・・・・】

「あれえ!?!」

俺と沙良の声が重なる。

「おい!何で変身できねーんだ!?!」

「わ、分かんないよお!スキャンミスじゃないの!?!」

「だとしたらっこ悪すぎんだろ・・・変身っ!」

【・・・・・・・・】

「おい!?!?!?!」

もつやだ。この空気耐えられない。

なんていうか後ろから来る『何やってんのこいつ?』的視線が俺のライフをすり減らしていく……。

「勇樹君、下がって!」

いつのまにか服装を変えたなのは達が持っていた杖(という名の凶器)から光線を発射した。

「何だただのドーパントか」

「勇樹、現実から目を背けちゃダメだよ」

デスヨネ……。。。

「おそらく鴻上さんが作ったものね」

「ハッピーバースデイツ!!!」

・・・もうダメかも知れん俺等・・・。

「うそっ!？」

「なんで!？」

なのはたちの声がした。

頑張つて現実に向き直ると、何とビックリ光線が効かないではないか!

「な、なんで魔法が通じないん!？」

「魔砲か・・・。」

「これは私の予想だけど、なのはちゃん達は魔法が体になじんでるんだよね?それで魔法を受け付ける体になつてるんだと思う。でも私達の世界から来たあいつにその体質は無い。魔法を受け付けられない体だから効かないんじゃないかな?」

おお、何か沙良が頭良く見える!

って！

「じゃあどうすんだよ！／＼どうすんねん！」

俺とはやての声が重なる。

「どうするって……そうだ！」

沙良が何か閃いた様だ。

「なのはちゃんフェイトちゃん、ちょっと集合！」

沙良が二人を呼び出す。

グリードのほうはピンクの髪的女性とオレンジっぽい赤毛の少女が戦ってる。

剣とハンマー？

「あれ魔法関係あるのか？」

どう考えても気合でどーん！の方が似合ってるだろ……。

「このメダルに魔力を注いで！」

セルメダルに、なのはたちの魔力（に見えるが良く分かん）が注がれる。

そしてセルメダルに色が付く。

「勇樹！とりあえずこれで代用して！」

メダルをキャッチする。

そっついや結局なんでメダルが使えなくなっただんだ？

まいっか！



「変身っ！！」

【タヌキ！シロネコ！イヌ！はるるるか空響いてるゝいのゝりはききせききに】

「ちょっとまてい！」

思わず突っ込みを入れてしまう。

「なんだよ今の！？普通に歌流れたじゃん！しかもコンボ名言ってねえし！」

「いいから早く戦って！」

「へいへい……」

ヤミーに向かって走り出し、ピンクの人と赤毛の子を下がらせる。

「はいちよつとごめんよう！」

「あんだてめー？」

「んまあ怪人退治の専門家？あ、でも光の国から来た訳じゃないよ！」

「「は？」」

Ohなんと冷たいリアクション……。

まあでも、ここは伊達さんのセリフを使わせてもらうか！

「仕事の邪魔だからどいてろ！」

そう叫んでグリードに向かっていった。

「おらっ！」

「うつ……。」

何か威力低いなこのコンボ……。

つてか武器がねえ！

トラクローの劣化版とかがあると思ったのに！

「おいおいマジか……しかも頭のタヌキどうすんだよ……」  
？」

すると、使い方が頭に流れてきた。

なるほどっ！

さっきのピンクの女性と赤毛の少女の武器を見る。

すると右手に剣、レヴァンティン左手に鉄鎚が握られる。  
グラーフアイゼン

「二刀流……ではねえな……」

それを使ってグリードを切手は叩き斬っては叩く……。

「おらああ!!」

「うああああ!!」

最後の一撃で吹き飛ばされたグリードからコアメダルがもれる。

それをキャッチし、一旦しまふ。

「止めだ!!」

【スキヤニングチャージ!】

鉄鎚が大きくなる。

そして剣を天高く放り投げ、その下の部分をハンマーで叩く。

「アステロイドスマッシュ!!」

先っぽに剣を付けた鉄槌を振り下ろす。

ドッガアアアアアアア！！！！

轟音があたりに響く。

土煙が晴れると、1枚もメダルが無かった。

「逃げられたか……」

変身を解除すると、両手に持っていた武器も消えた。

「勇樹！さっきのコアメダル？」

「ああ。つまりこと3種類ゲットした」

握ったメダルを沙良に見せる。

「……勇樹、それ勇樹が持ってた」

「え？何で？」

「ちょっと考えがあるんだ！」

それを信じつつ、俺達はへりに戻った。

この世界でのテマリー使用可能メダル！  
タヌキ×1

?	?	?	イ	シ
?	?	?	ヌ	ロ
?	?	?	×	ネ
?	?	?	1	コ
×				×
1				1
	×	×		
	1	1		

## 番外編 異世界とあれ？と限定コンボ（後書き）

次回、仮面ライダーテマリー番外編！

沙良

「メダルシステムを組み込めないかなあ？」

なのは

「勇樹君って声かっこいいね」

勇樹

「俺のビッグバンはあ、もう、止められないぜえ！ってか？」

沙良

「ヤミー！？」

勇樹

「変身っ！！」

次回、【組み込みと出現と真っ白コンボ】  
お楽しみに！

一応女の子ばかりの世界観なので、そんな感じのコンボです。



**番外編 組み込みと出現と真つ白コンボ（前書き）**

どうも、なのはシリーズトータルでは一番はやてが好きなハナトです！

異世界編第3話！

どうぞ！

## 番外編 組み込みと出現と真っ白コンボ

「んで、具体的にはお前は何をするんだ？」

機動六課に戻ってきたとき、俺は沙良にそう聞いた。

「なのはちゃん達のデバイスに、メダルシステムを組み込めないかなって！」

『メダルシステム？』

異世界、いや、俺達がイレギュラーだから現地組か。

あいつらの疑問を含んだ声が聞こえる。

「まあそこはできたら説明するね」

「ちょっと待て！もしかしてお前が作るのか・・・？」

いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや！！

無理に決まってんだろ！

すると沙良は人差し指を上に掲げ

「おばあちゃんが言っていた・・・。  
作るのが苦手なら、考えればいい

ってね」

「は？」

「まあ様は私は設計図を作るってこと！」

「ならー安心だ……」

んで、役割分担が決まった。

沙良はさっき言った様にデバイスルームと言う所でメダルシステムをデバイ스에組み込めないか研究。

優花はバックヤードと呼ばれる所の所属で、みんなの怪我等のフォローをする。

そして俺は……。

「という訳で、今日から勇樹君がしばらくの間、私と一緒に訓練を見るからね！」

なのはがご機嫌に言う。

「んまあそういうことだ。よろしくな」

「「「「「よろしく願います！」「」「」「」

おう、みんな元気いいな。

「なあなのは、俺人に教えるの苦手なんだけど……」

「テマリーも戦って慣れていったって感じだし……」。

「ん、でも対ヤミー戦に備えて専門家に教えてもらったほうがいい！っていうはやてちゃんの考えだし……」

「なるへそ……」

「つつてもなく、あのスバルとティアナって子は俺と少ししか違わないだろう……」。

「その俺がえらそうに教えるのは気が引けるな……」。

「大丈夫！勇樹君には対ガジェット戦の訓練にも参加してもらったから……教え子として」

「マジすか……」

「聞いてねえよ……」。

「あれ？でも対ヤミー戦なんて何教えりゃいいんだ？」

「それは私にお任せえ！！」

沙良のハイテンションな声がする。

「沙良うるせえ！」

『気にしない！それでね、なのはちゃん。データバンクの中にヤミーの情報を入れておいたから、ホログラムが出せると思うよ！』

「うん、有難う！」

そう言って何かのパネルを叩くのは。

すると、何もないステージの様な所に懐かしのカマキリヤミーが現れた。

「うわ！懐かしっ！」

『勇樹！感動はいいから変身！』

「へいへい・・・」

少し前に出る。

「変し【ピーッ！ピーッ！】なんだよいいところで・・・」

マジ空気読め！・・・！

『あ、ヤミー出たって……ってヤミー!?!』

ちっ！もう来たか……。

「まあいいや、なのは！俺だけに行くから、中継か何かで俺の活躍しっかり見てろよ！フォワードの連中もな！」

「え？私も行った方が……」

「平気平気！んじゃ、行つて来るわ！」

そう言つて、なのはにサムズアップした。

そうして俺が走り出した後、なのはが赤面したのに誰も気付かなかった……。

「変身っ！！」

【ハクチョウ！チョウチョ！ウサギ！ハッツクチョウッ！！】

「くしゃみか！？」

ドライバーにツツコミながら羽ばたいた。



お、発見！

ウサギのような形をしたヤミーだ。

恐らく管理局員と思われる人たちが攻撃しているが、効いていないので戸惑っている。

そこに上から声をかける。

「おーい！その現地住民の方々ー！危ないんで下がっててもらえると嬉しいでーす！」

すると、隊長と思われる厳つい顔したおっさんが出てきた。

「お前さんが、あのチビダヌキの言ってた仮面ライダーとやらかい？」

「チビダヌキ・・・あー、はやてか」

あいつの魔力の籠ったメダルタヌキだし。

「はい！仮面ライダーテマリ、ここに参上す！」

「わぁーった、任せるぞ」

「ういっす！」

局員の人たちに「お疲れ様でした〜！」と一声かけた後、ヤミーに  
向き直った。

地面に着地すると、チヨウチヨの翼が弾け、真っ白い光の粒が辺りに  
舞った。

「なんか豪華だなだな・・・」

武器が無いか考えていると、どこからとも無く白い薙刀ファミのソードベントが出てきた。

「おっしゃ！」

それを構え、ヤミーに向かって走った。

「ふあっ！」

ジャギンジャギンというスツキリする音が鳴り、快調にヤミーを切り裂く。

「うゝん、切れ味バツグン！」

刃の横を一撫でした後、再び振り下ろした。

「でりゃああ！」

「みぎやす！」

間拔けな声を上げてヤミーが吹き飛ぶ。

「食らえ！」

【スキヤニングチャージ！】

ウサギの足で上空高く飛び上がった後、チヨウチヨの羽から鱗粉の様な光弾を無数に放つ。

最後に急降下して行いつて……

「白雪一閃！」

若干乙女チックな必殺技名を叫び、ヤミィを切り裂いた。

「ふいゝ……」

六課に戻ると、スバルとエリオが歓迎してくれた。

「かつこよかったです!」

「尊敬します!!」

など色々言っていた。

その後、俺等が加わったことによるパーティが開かれた。

「いいのか？こんなまで開いてもらって・・・？」

「大丈夫や！お金はみんなのお給料からとつとるから！」

「いや、そんな良い笑顔でサムズアップされても・・・」

そこからとても楽しく時が過ぎていった。

「勇樹君、これ！」

短い金髪の女性が俺に何かを渡してきた。

「あれ？えっと、優花がいるとこの・・・」

「シャルですっ！よろしくね！」

「あ、どうも・・・んで、これは？」

「クッキーだよ？」

見た目は星型のクッキー。

どこにも異常は無いんだが……。

（あかん！勇樹君それ食ったらアカン！）

（日野！悪いことは言わない、逃げろ！）

（死にたくなかったら食うな！）

（勇樹君、お願いやめて！）

（勇樹、無茶しないで！）

（勇樹さん、危険すぎます！）

（マズイわよ！……いろんな意味で）

（僕はまだ勇樹さんに何も教わってません！）

（早まっちゃダメです！）

(くきゅー！)

何かみんなの様々な思いが伝わってくる。

いや、最後のは分かんが……。

「?どうしたの?」

でもいかにも『家事得意です!』って顔の人がな……?」

「いや、頂きます」

俺はそれを

『あああああゝ!?!』





その後は、良く覚えていない。

とりあえず俺はこの日、人は見た目で判断しちゃダメだと実感した・  
・・・。

## 番外編 組み込みと出現と真っ白コンボ（後書き）

皆さんのキャラが一番好きですか？教えてくださいとそのキャラの出番が増えるかも・・・？

後、他の六課メンバーを例えた動物も募集します！

## 序章と戦士と適合者（前書き）

始めましての方もそうでない方も、どうも、ハナトです。

えゝ、前3作品が仕上がってもいないのに書いてしまいました。

更新ペースも遅く、つまらないものですがそれでも読んでくれると  
いう心優しい方はどうぞ！

## 序章と戦士と適合者

はるか昔、800年ほど前のこと

メダルの怪人グリードと、2人の戦士による戦いが行われていた

片方は頭は赤、胴体は黄、脚は緑という上下三色の体

もう片方は頭は銅、胴体は金、脚は銀というこちらも上下三色の体

それぞれをオーズ(000)テマリーと呼んだ。

対するは4人の怪人

クワガタの様な怪人

ライオンの様な怪人

シャチの様な怪人

サイの様な怪人

それぞれをウヴァ、カザリ、メズール、ガメルと呼んだ

この他にも戦いに参加していない怪人もいる

中でもオーズたちに協力していたのが犬のような体をした輝く怪人名をユーズといった

この3対4の戦いは、オーズたちの勝利で終わった

だが戦士達は二度とグリードが目覚めないよう、自らと共に封印した  
ユーズはもしも他のグリードが復活した際に真っ先に目覚められる  
よう、浅く封印された

こうして、太古の戦争は幕を閉じた

そして月日は流れ、2010年

グリードは目覚めた

時を同じくして目覚めたオーズと、激しい戦いを繰り広げていた

その頃

先に目覚めたはずのユーズは、人間の体を模写し、人間として行動していた

理由はもちろんテマリーの適合者を探すためである

そして今日、運命の日が訪れる

「何だこれ？」

一枚のメダルを拾った青年を巻き込んで

## 序章と戦士と適合者（後書き）

いかがでしたか？

一応オリジナルグリードが1、2体出る予定です。

まあ一体は出てますけど。

設定ではテマリーはオーズと同じメダルでも変身できます。

というわけで、次回から本編をがんばって書きますので、気長にお待ちください。

では、ハナトでした！

誤字や意見などでもいいので、感想よろしく願います。

## 第1話 適合者とヒーローと無欲のゲリード（前書き）

どうも、ハナトです。

今回は原作で言っているの13話の少し前からです。

では、どうぞ！



## 第1話 適合者とヒーローと無欲のグリード

原作で言うところの13話のとき。

学校帰りの青年、日野<sup>ひの</sup>勇樹<sup>ゆうき</sup>は、いつもどおりの道をいつもどおり歩いていた。

変わらない風景、いつもと同じ生活、友達がいる学校、バイト先の知り合い。

何の不自由のない生活だが、どこかさびしさを感じさせた。

そんなときだった。

「なんだこれ？」

金色のメダルを拾った。

そこにはキツネのようなものが描かれていた。

しばらく何か考えていた勇樹だが、知り合いにこれの専門家がいるのを思い出し、歩き始めた。

たどり着いたのはバイト先の店「クスクシエ」

「こんにちは！」

と言つて中に入る。

「あら勇樹君、いらっしやい」

まず出迎えてくれたのは白石知世子。

この店の店長だ。

「あ、勇樹君」

その次に出てきたのは泉比奈。

勇樹と同じマンションの住人だ。

「比奈姉、アंकが映司さんいない？」

「映司君ならすぐ来ると思うけど……」

そう言っ後ろを見る。

すると奥から一人の青年が姿を現す。

「あ、映司さん！」

「あれ、勇樹。どうしたの？」

この青年は火野映司。

勇樹と苗字が一字違いなため、「ひの！」と呼ばれるとややこしい。

「えっと、ちょっといいですか？」

「いいけど……？」

そう言っ店の外に出る。

「実は、こんなの拾ったんですけど」

そう言ってさっきのメダルを見せる。

「コアメダル!？」

突然出されたコアメダルに驚きを隠せない。

「……あれ? でもキツネって……?」

一応全グリードのメダルは知っているが、キツネというのはいなかった。

「カザリの……でもないしなあ」

「ですよ〜……」

ちなみに、勇樹は映司がオーズに変身して戦うところを見たことがあるため、グリードのこともある程度知っている。

「それで、アंकに聞こうと思ったんですけど……」

アंकとは、比奈の兄、泉信吾にくっついて腕だけのグリードである。

メダルは彼が持っているのだが……。

「あゝ、でも今アंक機嫌悪いんだよね。自分のコアが見つからなくて」

「あちゃ〜……」

「まあいいや、俺が持つとくよ」

「お願いします」

そう言つてメダルを渡そうとしたときだった。

「あ、待つて！」

後ろから声がした。

そちらを向くと、サラサラとした長い金髪にの少女が立っていた。

「それ、私のなんです」

「「はい?」?」

勇樹と映司の声がハモる。

「ですからっ、それは私のコアなんですっ!」

どこかあせつた様子で訴える少女。

「えっと、これ?」

メダルを見せる。

「はい！ それです！」

「君のつて事は……？」

「あ、はい！ 私グリードです」

何とビックリ自分で正体をばらした。

「ええ~~~~~~~~！！？」

またも勇樹と映司の声が重なる。

「え、えっと、とりあえず場所を変えませんか？」

耳を押さえながら涙目に言う少女。

「はあ……」

勇樹 side

欲望の怪人グリード。

人の欲望を使い、怪人を生み出していく。

ってだけでもなかったんだな。

今、俺の目の前にはメロンパンをほおばっている少女がいる。

名はユーズ。グリードだ。

人間としての名は犬神沙良<sup>いぬがみさら</sup>というらしい。

なんでも、他のグリードが目覚めるちょっと前に目覚めて、テマリ  
ーという仮面ライダーの適合者を探していたらしい。

だが目覚めたときに自分のコアメダルが減っており、動くのも怪人  
の姿では不便と言うことで人間の姿を借りてるらしい。

で、話をするために場所を変えたわけだが、映司さんは変なバツタに呼ばれてどこかへ行ってしまった。

「んゝ、おゝいしゝ！」

はもはも、という効果音が似合いそうな様子でメロンパンをほおばる自称グリード。

「なあ、お前本当に人を襲わないのか？」

「ふえ？ あ、うん。だって私人間好きだもん」

「あゝ、そう……」

何でこいつがため口になってるか？

自己紹介をしたときに突然「じゃあ勇樹でいいね！」と言って呼び捨てになった。

あげく俺にメロンパンをおごらせている。まあ割と人懐っこい性格らしい。

「んじゃあほい、お前のコア」

メダルを前に差し出す。

「え？ いいの？」



口の周りに食べかすをつけながら首をかしげる。

かわいいな。

「いいよ。お前が人を襲わないって分かったし」

「ありがとう勇樹！」

そう言っていきなり抱きついてくる。

「うわわわわわ、い、iiiiiiiiiiから離れて！」

「あ、ごめん」

んな悪気もなく謝られても。

「そっぴやその……テマリ、だっけ？ の適合者とやらは見つかったのか？」

「ん、そこなんだけどね？勇樹って割と体質合ってるみたいなんだ」

「え？ 俺が？」

「うん」

ふうむ、世界を守るために戦うのか……。あの人との約束もあるし、何よりも……誰かに支えてもらってばか

りなのは、嫌だからな。

おっし！

「いいぜ！ 俺でよかったら変身するぞ！」

「ほんと！？」

「おうよ！」

ぱあっと顔を明るくする。

が、すぐにどこかを睨みつける。

「ど、どうした？」

突然の表情の変化に驚く俺。

「ヤミーがいる。それもすぐ近くに」

「なに！？」

すると沙良が睨んでいた方向から、カマキリの様な緑の怪物が現れる。

「欲しい……欲しい……」

なにかつぶやいてる。

「ウヴァのヤミーね……。勇樹！ 頼んでいい？」

「任せろ！」

胸を張って答える。

「それじゃ……」

どこからか四角い道具を取り出した。

丸い穴が3つ空いたメカ(?)

「これって、オーズの？」

にしては少し赤っぽい。

「これはテマリードライバー。まあ基本的にはオーズドライバーと同じね」

そう言いながら俺の腰にドライバーをつける。

「今もってるのと、このメダルを3枚、穴に入れて」

銅と銀のメダルを取り出す。

「分かった」

銅、金、銀の順で入れる。

すると四角い部分が傾く。

沙良が俺の右腰から丸い道具を渡す。

「これでスキャンして」

言われたとおりに斜めに下ろしてスキャンする。

「変身……」

【ジャッカル！ キツネ！ オオカミ！】

俺の周りに丸いものが回ってる。

【ジャ！ ジャ！ ジャ！ ジャッキオオ！！】

歌が流れると同時にメダルが俺のみについて、体に変化する。

銅の頭。赤い目に、犬のような耳が付いている。

金の体。胸のサークルにジャッカル、キツネ、オオカミの絵が描かれている。

銀の脚。オオカミのような強靭さを感じさせる。

「これが……俺？」

「そう、それがテマリー」

自分の体をしばらく眺める。

「な、なぜそれを！」

カマキリみたいなのが驚く。

「お前が知ったこつちゃねーんだよ！」

「メダル、大事に扱ってね」

「はいよ！」

そう言つてヤミーと対峙する。

「はっ！」

鎌を振ってくるが、軽くよける。

「おい！ こっちはなんか武器ねえの！？」

そう叫ぶと、背中に合った金の十字架が光り、剣となって俺の背中に付いた。

「何でキツネで剣？」

「本当は穴掘り用なんだけどね……」

まあいいや！

「でりゃああ！」

ヤミーを切りつけていく。

「ぐおっ！」

声と同時にメダルが飛び出る。

なるほど、メダルでできてんのか。

しばらく切り続けていると、急に体が重くなる。

「あ、あれ？」

力なく膝をついてしまう。

「あちゃー、いきなりコンボはきつかったかな？」

向こうで沙良が頭を抑えてる。

コンボってなに？

「勇樹！ 早く決めちゃって！」

「よくわかんねーけどその方が良いみたいだな」

ふらつきながらも立ち上がる。

フラフラなのは相手も同じか。

「メダルをもう一回スキャンして！」

変身したときと同じようにメダルをスキャンする。

【スキヤニングチャージ！】

おお、なんか力がみなぎってくるう！

剣にサークルからエネルギーが集まる。

「はあああああああ……！」

オオカミの脚で高速で走り、一気にヤミーの目の前に行く。

「おりやあああああ！ー！」

剣で切り裂く。

汚い断末魔をあげ、ヤミィが爆発する。

そして大量のメダルが散らばる。

「お疲れ様〜」

メダルを拾いながら沙良がやってくる。

「ほんとだぜ……」

変身を解除すると、一気に疲れが襲ってきた。

「はぁ……はぁ……ほい、メダル」

コアメダルを沙良に返す。

「ん。やっぱりコンボはきつかった？」

メダルを受け取りながら聞いてくる。

「さっきのそのコンボって奴なんだったら、相当きついな」

「うーん、そこは対策を考えないとね〜」

そう言いつつもメダルを拾う手を休めない沙良。

その手伝いをして、俺のテマリーとしての初戦闘は終わった。





## 第1話 適合者とヒーローと無欲のグリード（後書き）

いかがでしたでしょうか？

質問などがあつたら感想の一言からお願いします。

次回はキャラ紹介ですかね。

ではまた〜。

## 第2話 妹とパンダとダブル変身（前書き）

第2話です！3つも出来事が起こってないけど気にしない！

## 第2話 妹とパンダとダブル変身

仮面ライダーテマリ、前回の3つの出来事！

一つ、普通の青年、日野勇樹が一枚のメダルを拾う！

二つ、無欲のグリード、ユーズと出会う！

三つ、勇樹は、仮面ライダーテマリに変身した！

勇樹 side

つてな訳で、今、沙良を連れて俺の家に向かっている。

この時間だったらあいつも帰ってきてるだろう。

「本当にいいの？妹さんがいるんでしょ？」

さっきからそればかりだな。

「大丈夫だって！ あいつ犬好きだから」

「そついつことじゃないと思うんだけど……」

気にすんな！

あ、着いた。

鍵を開け、中に入る。

「ただいま〜！」

中から一人の少女が出てくる。

「あ、お兄ちゃん遅い……よ？」

「お邪魔します」

沙良を見て固まってる。

「お兄ちゃん！」

突然掴みかかってくる。

「優花つてものがありながら他の女の手に手を出すなんて！ 浮気者！ 薄情者！……」

ポカポカ叩いてくる。

「ちよつ待て優花！ ドア開いてるから！ お客さんいるから！  
誤解されるようなこと言うなー！！」

結局、優花が納得するまで2時間掛かった。

「そつか、お兄ちゃんまた危ないことに首突っ込んだんだ……」

やべっ、優花の目からハイライトが消えてる。

「ゆ、優花ちゃん、それは私のせいっていうか……」

「大丈夫、ちょっとお話するだけだから」

そう言つて優花に首根っこを掴まれる。

「いゝやゝだー！！」

やだやだやだやだやだやだー！

お説教はー！優花のお説教はー！！

再び2時間たった。

「優花がいつもどれだけ心配してるか分かってんの!？」

「さーせん……」

「優花ちゃん、もうそのへんで……」

沙良ナイス！

「むうゝしょうがないな……。でもね、一つだけ約束してね」

一瞬不満そうな顔をしたが、すぐに真剣な顔で俺に向かい合った。

「絶対に帰ってきてね。怪我もしてていい。骨折だっしててもいい。ただ生きて帰ってきてくれれば……」

親のいない俺と優花からしたら、お互いは大事な存在だからな。

「んなこと言われるまでもねえっつよ!」

優花の頭をなでてやる。

「うん! じゃあそんなお兄ちゃんにプレゼントっ!」

ポケットから何かを取り出した。

「これは!」

「コアメダル!？」

パンダが描いてあるメダルだった。

「たまたま見つけてね。珍しかったから拾ってきたんだ!」

「サンキュー優花!」

「これでいちいちコンボになる必要もないね!」

いやゝ、良かった良かった。

喜んでいると、窓の外に変なタカとバツタが来た。

「なにあれ?」



『勇樹！ ちよつとお願いしていい？』

映司さんの声がした。

「映司さん！？ どうしたんですか？」

『アंकが、比奈ちゃんのお兄さんの体から出ちゃったんだ！ それで！』

「分かりました！ すぐ探しに行きます！」

そう言つて準備をする。

アंकが離れると、信吾兄の体は長くは持たないらしいから急がないと！

「行くぞ！ 沙良！」

「オッケー！」

「お兄ちゃん、気をつけてね！」

「おう！」

所変わってside off

オーズとして戦っていた映司は、ヤミーとグリッドであるカザリの攻撃を受け変身が解けてしまった。

メダルも2枚取られて絶体絶命の状況、カザリが映司に迫る・・・。

そのとき、カザリの足元の地面が膨らむ。

そして中から

「でりゃあああああ!!」

テマリーが現れ、カザリとヤミーを吹き飛ばした。

「映司さん！ 大丈夫ですか!？」

変身を解除しながら映司に近づく勇樹。

「勇樹？ 今のって……?」

「詳しい話は後で！ 今は……」

カザリを睨む、するとそこへ、ライドベンダーに乗ったアंकがやって来る。

「映司！ 何やってる！」

「アंक！ お前間に合ったんだろうな！？」

「は！ 当然だ！」

遅れて沙良もやって来る。

「おーい、勇樹！ ……ってアंक！ 800年ぶりー！」

アंकに手を振る沙良。

「ユーズか……。ってことは、そっちのガキはテマリーか」

「ああ」

アंकにそっけなく返す勇樹。

「あ！ あっちにいるのはカザリン！ 久しぶりー！」

カザリにも手を振る沙良。

「久しぶり、ユーズ。どうせなら君のコアももらおうか」

「いいよ！ 私の相棒に勝てたらね！」

そう言つて勇樹の肩をたたく。

「いつの間に相棒になったんだよ……。ま、いつか！」

カザリと対峙する勇樹。

「アंक！」

「さつさと取り返せ！」

映司にトラとバツタのコアを渡すアंक。

それをベルトに入れる映司。

オースキャナーを構える映司と、テマリースキャナーを構える勇樹。

そして同時にメダルをスキャンする。

「変身っ！！！」

映司が人差し指と親指を立てるのに対し、勇樹は中指も入れた3本を立てる。

【タカ！　トラ！　バツタ！　タ・ト・バ！　タトバツトバ！】

【ジャツカル！　キツネ！　オオカミ！　ジャ！　ジャ！　ジャ！　ジャッキオオ！！】

それぞれオーズ、タトバコンボと、テマリー、ジャッキオオコンボ

に変身し、カザリとヤミーに向かっていく。

勇樹 side

くっそ！このシャムネコヤミー結構すばしっこいな。

剣が全然あたらねえ。

そう思っていると、メスみたいなもので切りつけられた。

「フニャー！！」

「うわああ！」

いってー……。

「このっ！」

剣を振るうがかわされる。

「あゝもう！ イライラする！」

イライラしていると、沙良の声がする。

「勇樹！ これ！」

さっきのパンダメダルを投げる。

それを受け取り、キツネの代わりにドライバーに入れる。

それをスキャンする。

【ジャッカル！ パンダ！ オオカミ！】

胴体がパンダのような白い腕になる。

そっぴい、歌が流れなかったな……。

あれ結構好きだったのに……。

そう思いながらヤミーを殴りつける。

「はっ！」

「フギヤ！」

おお、効いてる効いてる！

何度が殴りつけていると、いつの間にか映司さんと合流していた。

「勇樹、決めるよ！」

「はい！ 沙良！」

沙良にパンダメダルを返す。

そしてキツネを入れる。

【ジャッカル！ キツネ！ オオカミ！ ジャー！ ジャー！ ジャー！  
ジャッキオオー！！】

うゝん、やっぱこれだねゝ！

キツネソード（命名沙良）を手に握る。

映司さんは青い剣にメダルを三枚入れて、それをスキャンした。

【トリプル！ スキャンングチャージ！】

【スキャンングチャージ！】

俺もスキャンングチャージをする。

「「はああああああ……せいやあああああ！」「」

二人で斬るが、カザリにはよけられてしまう。

「僕のメダル、預けとくよ」

捨て台詞を残して去っていった。

変身を解除すると、一気に疲れが襲ってきた。

そのまま俺の意識は途切れた。



## 第2話 妹とパンダとダブル変身（後書き）

と言うわけで、パンダメダルの登場でした！

パンダを使うグリードは出すかどうか悩んでいます。

感想や、新グリード、お待ちしております。

### 第3話 金と囃とソニックプリンガー（前書き）

原作の15話の所です！

今回は混沌の魔法使い様の考えてくださったヤミィが出ます！

楽しみに！

### 第3話 金と囃とソニックプリンガー

仮面ライダーテマリ、前回の3つの出来事！

一つ、自宅に帰り妹に事情を話す勇樹！

二つ、パンダメダルを持って、アंकを探しに行く！

三つ、オーズと共闘し、ヤミーを倒した勇樹が倒れた！

現在、オーズとテマリーの使えるメダルは！

オーズ                      テマリ

タカ×2                      ジャッカル×2

トラ×1                      キツネ×2

バッタ×1                      オオカミ×2

パンダ×1

クワガタ×1

カマキリ×1

ライオン×1

サイ×1

ゴリラ×1

ゾウ×1

ウナギ×2

「う．．．ん、ここは？」

「あ、お兄ちゃん気がついた？」

俺はおきると自分の部屋で寝ていた。

横から優花が顔を出し、沙良が俺の手を握りながら寝ていた。

「びつくりしたよ。いきなり映司さんがお兄ちゃん背負って家に来るんだもん。」

「あゝ、悪い．．．。結構迷惑かけちゃったな．．．。」

「ちゃんと沙良お姉ちゃんにも謝ってね。自分がテマリーにしたせいでこんなことに！ってすごい心配してたんだから！」

「おお、わあーった。」

優花が部屋を出てしばらくすると、沙良が起きてきた。

「むにや．．．。あゝ！勇樹！大丈夫！？どつか痛まない！？」

「安心しろ、全然平気だ。」

「そっか、良かった．．．。」

ほっとして肩を落とす沙良。

「悪いな、心配かけて。」

「そんな、むしろ私こそ謝らないと・・・。」

少しくらい表情になる沙良。

「そこに関しては気にすんな。俺がなれていけばいいだけのことだからな。」

そう言って頭を撫でてやる。

「うん・・・。」

気持ちよさそうに目を細めた。

やっぱ犬だな・・・。

ちよつとドキッとしたのは内緒だ。

勇樹の家から離れた場所。

一人の男性が公園でうなだれていた。

「畜生、なんだよあの野郎……。金だ金だって……。俺だ  
って金さえあれば……………」

そこに、クワガタの様な頭をした怪物が迫り、

「その欲望、開放しろ。」

そう言って男性の頭にできた穴にメダルを入れた。

そこから白いヤミーが誕生した……………」

「えゝ！？映司さんいないんですか！？」

「そうなのよ。比奈ちゃんもアंकちゃんもいないし……。みんなどこ行ったのかしら……。？」

映司さんにお礼を言おうとしたらこれだ。

っていつかもうすぐ開店時間なのに知世子さんだけじゃまずくね！？

そう思っていると

「勇樹、ヤミーが出たよ。」

俺の耳元で沙良が囁く。

でも店番もしたほうがいいよな……。。

「いいよ、店番は私がするから、お兄ちゃんが行って。」

優花がありがたいことを言ってくれる。

「悪い、頼むぜ！」

そう言い残して沙良と一緒にヤミーの元へ走った。

あいつ足早っ！ぜんぜんおいつかねー！

ぜえはぁいいながらようやく追いついた。

「勇樹、遅いよ。」

沙良に文句を言われる。

「う・・・うつせー・・・はぁ・・・はぁ・・・お前が・・・ぜえ・・・早いんだよ・・・。」



「まあグリードだからね！それより大丈夫？昨日倒れたばっかだし、無理しないでいいよ？」

ここまで来てそれかよ。

「いんや、大丈夫だ！さっさと片付けてさっさと帰ろうぜ！！」

「うん！」

そう言つて俺にメダルを渡す沙良。

ドライバーを腰につけ、メダルをセットする。

左手でドライバーを傾け、右手にテマリースキャナーを握る。

そしてスキャンしながら左手を右上に上げる。

「変身っ！」

【ジャッカル！キツネ！オオカミ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャッキオオ！！】

「っしや！」

変身してヤミーのいる銀行に突っ込んだ。

中では手に鎌をつけたギラファノコギリクワガタ？見たいな奴が銀行員を襲っていた。

「おらぁ！」

ヤミーを後ろから押さえ、無理やり外に出す。

十分人気のないところへ離れた後、改めてヤミーと対峙した。

この間のカマキリヤミーと違ってこいつは暗褐色をしている。

十分強そうなんだよなぁ……。

「あゝもう！考えるのはやめだ！」

キツネソードを持ってヤミーに突っ込む。

「でりゃぁぁ！」

ソードを振るうが鎌で受け止められる。

「なっ！？」

「ふん！」

もう片方の鎌で吹き飛ばされる。

「ぐぁぁぁぁ！」

ち！滅茶苦茶いてーなこれ・・・。

「このやるー！」

再び突っ込むが、今度はよけられる。

「くそ！ちょこまかと！逃げんじゃ！ねえ！」

くあー！こつも軽々しくよけられるとイライラするなー！

「沙良！パンダ！」

「うん！」

パンダメダルをキャッチし、キツネの変わりにセットしてスキャンする。

【ジャッカル！パンダ！オオカミ！】

胴体がパンダになり、腕が太くなる。

「うおらああ！」

全力のパンチを出すがまたもよけられる。

「だあららららららららああああ！ー！」

両手で連打するが、全てよけられる。

おかしい。

何で反撃しないんだ？

さっきの攻撃からすると、何発か喰らわせれば俺を倒せたはずだ  
けど……。

まるで、俺たちの注意をひきつけるかのように続け続ける……。

まさか！

「てめえ！俺を映司さん達に近づけさせないことが目的か！？」

「あ！なるほど！」

向こうで沙良が納得している。

ヤミーのほうは無言だ。

「沈黙は肯定の証ってか！だったら急がせてもらいっぜ！」

そう言ってドライバーを再びスキャンする。

【スキヤニングチャージ！】

右腕に風が集まる。

「はああああああ・・・。。。」

オオカミの足で一気に近づき、風で加速した右の拳を振り上げる。

「おりゃあああああああー！！」

これは避けきれず、もろに俺のアップーをくらい爆発した。

「はぁ、はぁ・・・いそがねーと！」

そう言っただけで走ろうとするが、ひざがカクンと落ちてしまう。

「あ、あれ？」

そのまま強制的に変身が解除される。

「勇樹、今は一旦戻ろう？その体じゃ無理だよ！」

沙良が悲痛な声を出す。

「ちくしょう・・・。」

悔しい思いをしながら俺は沙良の肩を借りてクスクシエに戻った。

テマリーの所持メダル  
ジャッカル×2  
キツネ×2  
オオカミ×2  
パンダ×1

### 第3話 金と囃とソニックプリンガー（後書き）

次回、仮面ライダーオーズ外伝〜仮面ライダーテマリ〜

勇樹「君、大丈夫？」

沙良「何で屑ヤミーがこんなにたくさん!？」

映司「グリードって・・・。」

真木「見られますよ。メダルを一つの器に集中させたその力を。」

アंक「絶対に取られんなよ!」

勇樹・映司「「変身っ!」!」

第4話 終焉とコンボと新ライダー



#### 第4話 終焉とコンボと新ライダー

仮面ライダーテマリ、前回の3つの出来事！

一つ、勇樹は傷つき、自宅で気絶していた！

二つ、金が欲しいという男の欲望から、ヤミーが出現！

三つ、現れたヤミーは、勇樹を映司の元に行かせないための罠だった！

しばらくして

どうやら映司さんも手酷くやられたらしかった。

比奈姉まで巻き込んでたから大変だったらしい。

映司さんは鴻上？さんのところに行ったアノコを追いかけて行ってしまった。

俺は夜、バイト帰りに沙良と歩いていた。

「なあ沙良。グリードって何なんだ？」

ずっと気になってた。

グリードって何者？

「ああ、言ってなかったっけ？」

俺がうなずくと、沙良は話し始めた。

グリードはもともと、人工的に作られた命だった。

様々な動物の力をメダルに封印に、その力で動く生命体。

でも、最初は何日ともたなかった。

ある日、それぞれ持っていた10枚のメダルから、1枚抜き取り9という欠けた数字にしたとたん、それを満たしたいという欲望が生まれた。

それを原動力にしているのがグリード。

「とまあ、こんなところかな？」

「満たしたいという欲望……じゃあお前はどっなんだ？」

「うーん、最初はあったのかも知れないけど……覚えてないや。だって800年も前のことだからね！」

あっけらかんと言ったな。

まあ、そんな感じのことを話していたとき

「きゃあー！」

青い服を着た少女が、変な弱そうなヤミーに襲われていた。

俺と沙良は駆けつけて、その子に近づいたヤミーを吹っ飛ばした。

「君、大丈夫？」

「う、うん、ありがとう。」

「早く逃げて！」

少女を逃がし、ドライバーを腰につける。

「なんで屑ヤミーがこんなにたくさん！？」

「沙良！いいからメダル！」

「う、うん！」

【ジャッカル！キツネ！オオカミ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャッキオオ！！】

変身し、キツネソードを握ってヤミーを切り裂いた。

「おりゃあああああ！！！」

一撃で碎け散った。

そこには、半分のメダルだけが残っていた。

「なんだっ たんだ・・・？」

クスクシエ

クリスマスパーティー当日

中はとても賑わっていた。

俺も忙しかった。

そんな中、一人の青年がやってきた。

今、映司さんが相手している。

しばらく急がしていると

「うおおおおおおおおおおお！……！」

その青年が叫びだした。

その衝撃で、食器などが割れる。

「メズールウウウウウウ!!」

そう叫んで出て行った。

メズール!?

映司さんと顔を見合わせ、沙良も一緒にその青年を追った。

ある公園に着いたとき、アンコが言った。

「アंकだ!・・・あいつは、ガメルだ。どうやらメダルの器にされたらしいなあ。」

雄たけびを上げて完全形態になるガメル。

その衝撃で、吹っ飛ばされそうになる。

俺は沙良をかばい、その衝撃が止むのを待った。

衝撃が止むと、一人の少女がフラフラとやって来た。

「あ！昨日の！」

なんか話してる。

「いらつしゃい、ガメル。貴方が全部欲しいのよ！」

メダルとなり、少女と一体化するガメル。

少女がメズールの姿になり、苦しみだした。

すると、どこからか大量のメダルが来て、メズールに集まっていく。

それはみるみるでなくなり、亀みtainな姿をした化け物になった。

「何だよあれ！？」

「アレはただのメダルの化け物だ。」

俺の質問に、アンコが平然と答える。

そいつは暴れ周り、地面に大穴が開く。

「ただのってレベルじゃないでしょ！」

「同感。」

映司さんに沙良も同感のようだ。

沙良にメダルを借りて、ドライバーに入れた。

「変身っ！！」

【タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ・タ・ト・バ！】

【ジャッカル！キツネ！オオカミ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャッキオオ！！】

それぞれ変身し、映司さんの運転するライドベンダーの後ろに乗って化け物の背中に乗る。

キツネソードで斬りつけるが、歯が立たない。

「勇樹、そっちはどう！？」

「こっちもダメです！」

くそっとうすりゃいいんだ！？

「うわっ！」

映司さんがくわえられて振り回されてる。



「映司さん！」

俺が行こうとすると、変な触手に掴まれて思いっきり地面に叩きつけられる。

「がはっ！」

その衝撃で変身が解けてしまう。

「勇樹！！」

沙良が泣きそうな顔になってる。

やべーな…………。

そう思っていたとき、どこからか金の光弾がとんできた。

それのおかげで映司さんが開放される。

そっちを見ると、銀のライダーがなんか武器を構えてた。

胴体に

そこから赤い光線が出て、ヤミーに大ダメージを与える。

「映司！メダルだ！」

コアメダルが散らばり、それを映司さんに取らせようとするアンコ。

だがそれより先に、俺がメダルをキャッチした。

「映司さん……俺にやらせて。」

「勇樹……。」

「おい！お前何勝手に「分かった。頼むよ。」映司！」

映司さんが変身を解除し、バッタのコアを貸してくれる。

「すぐ返します。」

それとクワガタ、カマキリのコアをセットし、スキャンする。

【クワガタ！カマキリ！バッタ！ガ〜タガタガタガッタキリッバ！  
ガタキリバッ！！】

緑の姿をした、ガタキリバになる。

「おおおおおおおおおおお！！！！！！」

俺の雄たけびに答えるかのように、俺の分身ができる。

【スキヤニングチャージ！】

【【【【スキヤニングチャージ！】】】】

分身全員でジャンプし、キックを構える。

「「「「「おりやあああああああ！！！！」「」「」「」

キックが次々と炸裂し、ヤミーが爆発する。

それにより出たコアメダルを、アンコ、沙良、カザリ、ウヴァが掠め取った。

「沙良、どうだった？」

フラフラと沙良に何が取れたか聞く。

見せられたメダルは  
ジャッカル、サンショウウオ、カエルの3枚だった。

「何でお前のまで？」

「分からない……。」

そしてアンコにメダルを返し、4人で帰ろうとすると、さっきのライダーが現れた。

「もしかして、さっきの？」

映司さんが尋ねると、おもむろにマニュアルを見せてくる。

「仮面ライダー、バース？」

映司さん、よくこの距離で見えますね。

そして変身を解除した。

「よろしく！」

気よさそうなおっさんが挨拶してきた。

テマリーのメダル  
ジャッカル×3  
キツネ×2  
オオカミ×2  
パンダ×1  
サンショウウオ×1  
カエル×1

## 第4話 終焉とコンボと新ライダー（後書き）

新メダル登場！

両生類タイプのグリードが出ます！

名前募集中！

## 第5話 学校とサメと真の力？（前書き）

今まで一回もなかった勇気の学校での回です！

まあほとんど学校関係ないですが。

ではでは、どうぞ！

## 第5話 学校とサメと真の力？

テマリーのメダル

ジャッカル×3

キツネ×2

オオカミ×2

パンダ×1

サンショウウオ×1

カエル×1

仮面ライダーバース

その変身者「伊達明」

どうやらマニュアルとか嫌いらしいが、その代わりにメダルをくれた。

まあ悪い人ではないな。



そして今は学校。

昼休みなのだが、妙な感覚が体に走った。

（なんだ？今の？）

さっぱりだ。

すると、

「おい日野！あいつお前の彼女？」

「ふえ？」

そこには、沙良がぶんぶん手を振ってる姿が映った。

「勇樹くー！」

「沙良あ！」

つまんで体育館裏に連れ出した。

「何で学校来てんだよ！」

「ヤミーだよ。」

マジか！

「場所は！？」

「この学校の中。．．．すぐ、高いところ．．．．．屋上？」

「分かった！」

屋上に走っていく。

「お兄ちゃん！どうしたの？」

「あ、優花！みんなをいつでも非難させられるようにしといてくれ！」

「え？う、うん。」

物分りが良くて助かるぜ！

屋上の扉は閉まっていたので、蹴り破った。

そこには、青い球体を持ったクラスメートが立っていた。

「おい！そいつをこっちに渡せ！」

こっちを振り向くが、その目の下にはひどい隈があった。

「殺す……みんな、殺す……。」

何かに取り付かれたように言葉を発する。

「沙良、あれってどうなってるんだ？」

「多分、カザリンとメズルンのヤミーが混ざって、親の欲望を増幅させてさらに増殖するタイプになっちゃったんじゃないかな？」

「どうすれば戻る？」

「まあヤミーを全部倒すっきゃないね。」

そりゃ単純で分かりやすいな。

「変身っ！」

【ジャッカル！キツネ！オオカミ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャッキオオ！！】

キツネソードを持って青い球体をわろうとするが、中からサメみたいなヤミィが大量に出てくる。

「全部人型かよ！」

うわ厄介！

「でもその分、数に限りがあるみたいだね。ほら。」

沙良が指した方向を見ると、7体で増殖が止まっている。

「多分、親がもうこんなことしたくない！って思ったんだと思う。」

「7体ならいけっかな？」

そう思って突っ込んでみたものの

「はっ！」

思ったより硬く、数が多いからいろんなところから攻撃される。

手首の剣で攻撃してくる。

「うわ！」

今度は反対側から攻撃される。

「く・・・っそ！」

一旦距離をとる。

「沙良！広範囲に攻撃できるメダルは！？」

「ない！」

即答かよ！

「じゃあなんかこの状況を逆転できそうなの！」

「ない！」

くっそ！なんだってんだよ！

そうしてる間にも、ヤミーは下に降り様としてる。

「させるかあああああ！！」

俺の叫びに答えるように、それぞれのメダルが吼える。

【ワオオオオオオオオン！！】

なんか力がみなぎってくる。

【スキヤニングチャージ！】

キツネソードを投げ捨て、オオカミの足で加速してジャンプする。

「フッキングインパクト！」

両足でのキックが炸裂し、7体とも爆発する。

ヤミーの親は気絶し、俺も変身を解除する。

「なんだっただ？さっきの力は・・・？」

「わかんない・・・。」

沙良もわかんないか・・・。

まあ、被害が出なくて良かった良かった。

その後クラス全員に沙良のことではからかわれたが。

## 第5話 学校とサメと真の力？（後書き）

最近、面白かったと言って下さる方が増えて嬉しい限りなのですが、できればどこらへんが良かった、など、具体的な所を指摘してくださいとありがたいです。

自惚れている様な発言ですが、次回からの執筆に活かしたいと思うのでよろしくお願いいたします。

以上、ハナトでした。次回もお楽しみに！



## 第6話 鈍感とヤミの親と他人の手（前書き）

む、前回のあとがきで自惚れたことを言ったので感想が来ない・・。

具体的なのはできればいいので、感想はいただけると嬉しいです。

では、第6話です！

## 第6話 鈍感とヤミーの親と他人の手

仮面ライダーテマリ、前回の3つの出来事！

一つ、勇樹の学校に、沙良がやって来る！

二つ、勇樹のクラスメイトに、ヤミーが寄生！

三つ、勇樹の変身したテマリが、真の力を発揮した！

ふうむ・・・。

結局アレはなんだったんだ？

急にキックなんて打てるようになって・・・。

ああー！わっかんねえ！

「勇樹、どうかした？」

「いや、何でもないです。」

今は映司さんと道場に来ている。

目の前にいる子がヤミーの親らしい。

さつきから映司さんがその子の欲望を聞こうとしてるが、中々話さない。

するとそこに

「よう。」

伊達さんが来た。

「俺はこのお兄さん達みたいに鈍感じゃないからさあ。はっきり言っちゃうけど、ごめんな。」

なんのこと？

「女の子があんなに必死になって止めようと言やあ、そりゃ一つっきゃないよなあ。」

「???

「は！なるほどなあ。欲望の定番だなあ。」

「アンコも分かったみたい。」

「乙女だね。」

「え！？沙良も！？」

「勇樹、どういうこと？」

「俺が聞きたいです。」

「俺と映司さん置いてけぼり。」

「お前、マジか？」

「勇樹、それはないよ……。」

「なにになに！？みんな分かってんの？」

「うん……！！」

「「そっか！恋愛だ！！」」

俺と映司さんの声が重なる。

そして伊達さんが肩にポンと手を置く。

「デリカシーのない奴は黙ってよう、ね。」

はい……………。

んなことやってたら、屑ヤミーが4体出てきた。

「沙良！その子を頼む！」

「うん！」

ヤミーの親を非難させる。

すると、戦いながら伊達さんがその子に何か言ってる。

「俺さ、こんだけ稼ぐために働いてんの！」

指を1本立てる。

「1億！」

はあ！？

「もうドロドロの欲望まみれよ！でもね、一つ決めてんだ！」

なんだろ……。

「絶対他人の手は借りない。」

その言葉に、ビクッと反応してしまった。

「それともう一つ、絶対に自分を泣かせるようなことはしない。」

言い終わると、それぞれ屑ヤミを退治した。

映司さんと伊達さんが話してるが、俺は違うことを考えていた。

絶対に他人の手は借りない。

俺は、沙良に頼ってばかりだ……。

s  
i  
d  
e  
  
o  
f  
f

バースがクワガタヤミーと戦っているとき、間に1台のバイクと、1台の自転車が止まった。

そこから降りてきたのは映司と勇樹と沙良だった。

「伊達さん！大丈夫！？」

「お前らどうして！？」

映司がタコカンドロイドを見せる。

「あのときに付けたんです。」

「ほっ、なかなか食えないねえ。」

そして映司はアंकに、勇樹は沙良にメダルを借りる。

「変身っ！！」

それぞれタトバコンボとジャッキオオコンボに変身した。



勇樹 side

「はっ！」

ガギイ！

くそ！このヤミー硬いな。

いつもヤミーって硬いけど、なんかそれ以上。

剣にひびが入ってる。

まずいな……。

そう思って蹴り技に変えるが、足が痛くなる一方だ。

「映司さん、なんでこいつこんな硬いんですか………?」

「俺に聞かないでよ!」

ですよね……。

うわ! ウヴァも来た!

「火野!」

「はい!?!」

俺と映司さんが伊達さんに返事する。

「ああ! どつちでもいい!とにかく時間稼ぎ頼むわ!」

ええ!?!?

んなむちゃくちゃな……。

【タカ！ウナギ！チーター！】

あ、映司さんがコンボチェンジした。

ヒュオン、ヒュオン！

あぶねっ！

「え、映司さん！もっと丁寧に振ってくださいよ！」

「う、ごめん！」

っーか伊達さんまだ！？

いい加減足限界なんだけど！

「おっしや！火野！じゃまだからどいてろ！」

手伝ってやったのにそれはないっしょ！

まあどくけどね。

【セル・バースト】

ドガアアアアア！！

うわ太っ！

これがあんときの技の強化版か・・・。

あ、ウヴァ逃げた。

まいっか。

変身を解除し、伊達さんと話す。

「伊達さん、俺たち、やっぱり協力して闘えませんか？」  
「無理！」

「即答ですね……。」

見事な。

「あんたは自分を泣かせるタイプだし。」

映司さんを見て言う。

そしてこっちを見る。

「お前は他人の手を借りすぎだ。」

「えっ!？」

なぜだか、その言葉が胸に刺さった・・・。

テマリーのメダル  
ジャッカル×3  
キツネ×2  
オオカミ×2  
パンダ×1  
サンショウウオ×1  
カエル×1

第6話 鈍感とヤミーの親と他人の手（後書き）

次回、仮面ライダーテマリー

伊達「お前は他人の手を借りすぎだ。」

沙良「修行なら付き合っよ。」

???「俺が勝ったら沙良はもらっ。」

勇樹「ちよつと黙ってろ。」

沙良「勇樹！勇樹い！！」

第7話 熊と修行と譲れない思い

第7話 熊と修行と譲れない思い（前書き）

結構熱い話に・・・なっ たかな？

熊系グリード登場です！



## 第7話 熊と修行と譲れない思い

『お前は他人の手を借りすぎだ。』

この言葉が、ずっと胸に突き刺さっていた。

テマリーになれたのも、沙良のおかげ……。

誰かに頼ってないと、何もできない。

そう考えた俺は、誰にも言わず山に行った。

ここで修行を行うためだ。

とりあえず、深いところまできたとき、後ろから声がした。

「何してるの？」

振り返ると、あきれた様子の沙良が立っていた。

「沙良・・・・・・・・。」

「修行なら言ってくればいいのに!」

ちよつと怒ってる・・・?

「いや・・・・・・・・でも・・・・・・・・。」

「他人の手を借りすぎだつて言葉が気になってるなら、それは間違  
いだよ。」

見抜かれた?

「テマリーに変身できるのは勇樹だけだもん。」

「え!? そうなの!?」

初耳。

「だから自分の力で戦ってるようなもんなの。・・・・まあ、どう  
してもって言うなら協力するけど?」

「ああ! 頼む!」

こうしてグリード形態（はじめて見たな・・・・）になった沙良と

特訓を始めた。

「変身！」

【サンシヨウウオ！パンダ！カエル！】

「ほらほら、そんな大振りじゃあ、当たるもんも当たらないよ！」

「くっそ！」

ことごとく避けられる。

だいぶたった頃、森の置くから何者かがやってきた。

「ほう、俺のコアか……。」

頭はイタチ、胴体はパンダの怪人が現れた。

「てめえ、ナニモンだ？」

沙良をかばうように前に出る。

が

「師匠！」

は？

「おおユーズ！久しぶりだなあ！」

はい？どゆこと？

「あ、紹介するね、この方はイズナさん！私の800年前からの  
お師匠様！で、こっちが日野勇樹です！今のテマリーですよ！」

あのイズナとかいうやつが来てから随分饒舌になったな……。

なんかイライラする。なんだろこれ？

そして沙良（人間形態）が説明をしてる。

「よし、んじゃあ俺と闘るか。」

突然言い出した。

「ちよっ！師匠相手じゃ「分かった。」勇樹！？」

「面白い。じゃあ俺が負けたら俺のイタチとクマのコアをやる。それでコンボができるだろう。でも俺が勝ったら、そのパンダと・・・」

沙良を見る。

「沙良をもらっ。」

「なっ！？」

何言い出すんだいきなり！

「だってそうだろ？こいつと俺は師弟関係、一緒にいて当然だ。むしろお前とユーズと一緒にいるほうがおかしくね？」

「……………こいつは……………俺の、家族だから……………」

「ふっ、まあいいや。始めるぜ。」

お互いどちらからともなく飛び掛る。

「ふんっ！」

「がはっ！」

イズナのパンチがもろ鳩尾に来る。

「なんだ？この程度か、よ！」

さらに顔にももう一発喰らう。

「ぐっ……………」

「だらだらだらだらだらだらっ！！」

連打をくらい、最後の一発で吹き飛ばされる。

「げぼっ！」

木にぶつかってようやく止まる。

「勇樹！もういいよ！師匠も！もう終わりでもいいでしょ！？」

沙良が泣き叫んでる。

でもな

「悪い沙良。ちょっと黙っててくれ……。」

沙良を下がらせる。

「勇樹！何でいつもそうなの！？何で私が心配してるのにそれを無視するの！？」

「……ごめん。帰ったらいくらでも言っこと聞くから。」

それを言つと、沙良は黙り込んだ。

「さあ、第2ラウンドだ。」

「いいだろう。」

再び構える。

あいつの弱点・・・・・・・・。

『そんな大振りじゃあ、当たるもんも当たらないよ!』

それだ!

あいつが拳に風を集めてる。

多分、最強の技・・・・・・・・。

それを狙うつきゃねえ!

「喰らえ! 爆裂暴風拳!」  
ばくれつほうふうけん



すごい勢いでこっちに突っ込んでくる。

「待ってたぜその技あ！」

頭のサンショウウオが光る。

パシャン、と体に何かがかかる。

そしてあいつの拳があたろうとしたとき

ぬるん

「なに！？」

体がぬるっとして回避する。

【スキヤニングチャージ！】

カエルの足でジャンプする。

「はああああああ．．．．．」

右手に風が集まる。

「ブリンガアアア．．．スマアアアアッシュー！」

上から振り下ろす。

「ぐおおおおおお！？」

イズナが吹っ飛び、木にぶつかる。

そのせいでメダルが返り血みたいに散らばる。

「はあ．．．はあ．．．さすがにこれで倒れないとか．．．．ない  
よな．．．．？」

土煙が晴れると、なんとまだイズナは立っていた。

「なん．．．でだ．．．よ．．．」

変身が解除され、俺は気を失った。

s i d e   o f f

倒れた勇樹に、沙良が駆け寄った。

「勇樹！しっかりしてよ！勇樹い！」

涙をボロボロこぼしながら勇樹をゆるする沙良。

「けほっ……ああ、こいついいパンチ持ってんじゃねえか。」

メダルを拾いながら勇樹の下に来るイイズナ。

勇樹をしばらく見つめる。

そして自身の体から2枚のメダルを取り出した。

「師匠？」

若干鼻声の沙良が聞く。

「こいつがおきたら言っておけ。『後は任せる』ってな。」

じゃあな、と言って森へ戻ろうとするイイズナ。

「師匠はどこへ？」

「しばらく冬眠する。起きるまでに残りのグリード潰しとけよ。」

そう言い残して森に帰っていく師匠の姿に、沙良は深く頭を下げた。

勇樹 side

「う．．．ん？」

なんか俺って気絶多いな．．．。

「勇樹！」

「うわっ！」

沙良が抱きつく。

「勇樹！勇樹！！勇樹！！！」

泣きながら笑ってる。

どっちかにしろよ。

「沙良、いいから離れてくれ。」

「やだ。」

即答！？

「私がどれだけ心配したか分かってるの？いいって言ったのに無理して戦って、こんな怪我までして、あげくカウンターを狙うなんて・・・。ほんと信じられないよ！」

「でも最後のはうまくいったろ？」

「そうだけど・・・。」

言葉に詰まる沙良。

「まあ負けちまったけどな？」

「え？でも師匠はメダルくれたよ？」

マジで？

あ、ホントだ。

「後ね、後は任せる、だって。何のこと？」

あいつ、そんなこと。

なんか、師匠って呼びたくなってきた。

「気にすんな。帰ろうぜ！」

「ねえ、教えてよー！ねえー！」

追っかけてくる沙良から逃げつつ、山を降りた。

まあ逃げ切れなかったが……。



## 第7話 熊と修行と譲れない思い（後書き）

一応勇樹と沙良の関係は、

翔太郎とフィリップが（第1話からは）ある程度完成されたコンビ。映司とアंकがこれから（？）のコンビ。

なのに対して恋人と親友の間、仲の良い兄妹のようなコンビです。

まあ少しは恋愛感情はあるかも？なので、これからも二人を応援してあげてください（笑）

第8話 やきもちと影とお師匠コンボ（前書き）

挿入歌 Time judged all

## 第8話 やきもちと影とお師匠コンボ

仮面ライダーテマリー前回の3つの出来事！

一つ、他人の手を借りすぎという伊達の言葉から、山で修行を行う  
勇樹！

二つ、そこに現れた熊系グリード、イイズナと沙良を賭けて勝負を  
する！

三つ、イイズナに認められた勇樹は、メダルを譲り受けた！

沙良side

今、勇樹の手当てを優花ちゃんがしてる。

なのになんかイライラする。

なんでだろ？

む、いくら顔の傷を手当するからって、そんなベタベタ触んなくてもいいんじゃない？

あ、手まで握ってる！

っていうか何で勇樹も握り返してんの！？

あ、なんかよくわかんないけどムカムカする……。

そのとき、私の耳にメダルの音が聞こえた。

「勇樹！ヤミーだよ！」

「分かった！」

すぐに支度をする勇樹。

「お兄ちゃん、気をつけてね。」

「おうよ！」

「早くする！」

「ういっす・・・。」

なんでこんなにイラつくんだろう？

勇樹 side

なんか今日は沙良の機嫌が悪い。

なんだ、さっき無茶したからか？

今はお互い無言で走っている。

あ！ヤミーいた！

ライオンにクラゲをつけたような奴と、クラゲにライオンをつけたような奴、そしてオレンジの小さなクラゲたち。

映司さんと伊達さんが戦ってる。

あ！映司さん足をかばってる！怪我したのかな？

「ま、なんでもいつか！沙良！」

「うん！」

メダルをもらっ。

「変身！」

【ジャッカル！キツネ！オオカミ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャッキオオ！！】

キツネソードを握って突っ込む。

「は！」

クラゲが多い方を切り裂く。

が、体からクラゲが生まれた。

「はあ！？」

なんだこれ！？

「勇樹、気をつけろ！」

「映司さんこそ、足怪我してんでしょ！」

斬りながら話す。

くあゝ！切ったそばから増える。

うっぜー！

「おい！他力本願ボーイ！仕事の邪魔だからどいてろ！」

伊達さんに言われる。

「テマリーの力は、俺しか使えません。確かにメダルは沙良のですが……そのメダルに見合う分だけ沙良には恩返しをします！それまでは、借ります！」

俺の思いをぶつける。

「ほっ！若いね……。だけど、嫌いじゃねえぜそいつの！」

「あざっす！」

つってもこの状況はなあ……。

そのとき、ライドベンダーから女の人が降りてきた。

誰？

「火野さん！」



「「はい!？」」

「オーズのほうです。お預かりしていたメダル、使ってくれて會長が!」

なんだ映司さんか。

下の名前で呼んでくれよ。

なんか映司さんとアンコがもめてる。

まあ日常風景。

そのとき、映司さんにメダルが2枚投げられた。

俺も!

「沙良!お師匠コンボ行こうぜ!」

「オッケー!」

一旦ヤミーから離れ、メダルを受け取る。

【タカ！クジャク！コンドル！】

【イタチ！パンダ！クマ！】

【タアアアゝジャアアアゝドルウゝゝ！！】

【タンタンタタ！ン！ク！】

なにこの温度差！？

映司さんは真つ赤なフォームに。

俺は上からグレー、黒、茶色になった。

微妙な色だなゝ．．．。

「はっ！」

映司さんの後ろにクジャクの羽のようなものができる。

それが炎の光弾となってヤミーを攻撃する。

「映司さん、ライオンの割合が多い方お願いしていいですか？俺はクラゲが多い方をやります。」

「うん、頼むよ勇樹！」

「はい！」

クラゲが多い方に向かい合う。

「おら！」

パンチを食らわせる。

一撃でだいぶ吹っ飛んだな……。

「でりゃあ！」

今度はキックをかます。

あゝ、飛びすぎ飛びすぎ！

面倒くせー、とっとと終わらせるか。

【スキヤニングチャージ!!】

両手に風が集まっていく。

「ハアアアアアア………」

クマの足で大地を揺らしながら走る。

これで相手はろくに立ってられない。

「二連！爆裂暴風拳！！」

両手でパンチをぶちかまし、ヤミーが爆発する。

「ほほっ、大量だな。」

【クレーンアーム】

うわ！全っ部持ってかれた！

「お、おお！？」

フラっとして変身が解除される。

倒れそうなとき、間一髪沙良が抱きとめてくれた。

「大丈夫？」

「あ、ああ、サンキュー……。」

思ったより顔が近く、思わず赤くなってしまう。

どうしちゃったんだろ俺？

まあその後は何事もなく家に帰った。

s i d e   o f f

映司達を遠くから見つめる影。

足元は濡れているのか光っている。

「ふ、精々楽しんでるんだな。」

テマリーのメダル  
ジャッカル×3

キツネ×2  
オオカミ×2  
イタチ×1  
パンダ×1  
クマ×1  
サンショウウオ×1  
カエル×1

第8話 やきもちと影とお師匠コンビ（後書き）

いかがでしたか？

ちょっと短いですがいろいろ動き始めた回でした。

これからも勇沙良コンビを見守って下さいね！



## 第9話 一人とクラスと修学旅行（前書き）

本格的な前後編ははじめてかも？

修学旅行編です！

## 第9話 一人とクラスと修学旅行

テマリーのメダル

ジャッカル×3

キツネ×2

オオカミ×2

イタチ×1

パンダ×1

クマ×1

サンショウウオ×1

カエル×1

「うっし、準備完了だな。」

いつもよりでかいバッグを準備する。

「あれ、勇樹？バッグがいつもと違くない？」

沙良が首をかしげる。

「ああ、今日から修学旅行だからな。それでだ。」

「しゅーがくりよこー？」

「そ。しばらく家空けるから。」

「ええ〜!？」

んな驚かれても。

「お兄ちゃん、清らかな体で戻ってきてね？」

「お前は俺が何をしでかすと思ってるんだ？」

「勇樹、これ。」

沙良から犬系以外のメダルをもらっつ。

「サンキュ!んじゃ、行ってきます。シュッ」

「「行つてらっしや〜い!!」「」

新幹線内

「日野。」

後ろから呼ばれる。

振り向くと、こないだのサメヤミの親、佐藤漣だった。

「ん？どうした漣？」

「えっと、こないだは、どうもね。」

ああ、そのことか。

「いって。むしろ心の中のことを利用したグリードが悪いって。」

連の意識が戻った後、グリードや、テマリーのことを一通り話した。

「そう・・・かな・・・？」

「そうそう。それにせつかくの修学旅行だ！楽しもうぜ！」

「・・・うん、そうだね！」

このときは、まだ知らなかった。

この会話を聞いていた人間がいることに。

九州

班ごとに自由に見回った後、お待ちかねの入浴タイムだ。

何人かの男子は覗こうぜ！とか言ってるが、俺は全く思わない。

むしろ拒否！

だって優花や沙良が無理やりはいつて来るんだもん。

優花はペッタ・ゲフンゲフン！幼いからまだいいとして、問題は沙良だ。

その、ねえ。いろいろあるわけですよ。こちら男ですし。ええ。

そんなことを考えていると、あの妙な気配がした。

ヤミー！？

あわてて外に走っていった。

外はだいぶ夜になっていて、人気はなかった。

そこに一体のペルシャネコ？みたいなヤミーと、あの猫みたいなグリードがいた。

「お前！たしかウヴァー！」

「カザリね。久しぶり、テマリー。僕のヤミ、結構楽しめると思うよ。」

「ごたごた言っでんじゃねえよ。」

ドライバーを腰につける。

そしてメダルを3枚セットする。

「変身っ！」

【イタチ！パンダ！カエル！】

テマリーに変身する。

ここでクマを使わなかったのには2つ理由がある。

1つはカザリに手の内を知られたくない。

もう1つは相手は早いからクマじゃ相性が悪いってこと。

そこらへんもちゃんと考えてるんですよ。

「行くぜ！」

そう言っでカザリに突っ込む。

が、片手で受け止められる。

嘘だろ！？パンダのパンチだぞ！？

「この程度？なんかがつかりだ、な！」

「がはっ！」

ヤミーと同時に蹴りを入れてくる。

いつてゝ・・・・・・・・。

「まだ、まだあ！」

再び突っ込む。

「おりゃあああ！」

全力を込めたパンチを繰り出すが

「なに！？」

ヤミーの長い尻尾に捕まってしまふ。



そしてカザリの黄色い風を纏った攻撃を受け、大きく吹っ飛ばされてしまう。

「げほっ、げほっ……。」

やべー……。

体が重い……。

「そろそろ終わりにしようか。」

カザリがゆっくり近づいてくる。

ざっけんなよ。俺はまだ……。

「こんなところで、終わるわけねーだろおおおお！」

カザリの腹に拳を叩き込む。

「なっ！……くっ！」

カザリが俺から離れる。

俺の手には2枚のメダルが握られていた。

1枚はパンダ。

なるほどね、これのおかげでさっきの攻撃を防いだのか。

もう1枚はなんかトカゲみたいなの。

翠っぱいからたぶんカエルやサンショウウオと同じ部類だと思う。

「……覚えときなよ。」

捨て台詞を残し、ヤミーとどこかへ行ってしまった。

とにかく、ヤミーの親を探した方がいいかな？

変身を解除し、旅館に戻った。

それを見ていた影があるとも知らずに。

テマリーのメダル  
ジャッカル×3  
キツネ×2  
オオカミ×2  
イタチ×1  
パンダ×2  
クマ×1  
サンショウウオ×1  
サラマンダー×1  
カエル×1

第10話 寂しさと火トカゲと謎の少女（前書き）

どうも、学校が臨時休校になったハナトです。

学校が休みなのに嬉しくない……。。

被災地の方々は大丈夫でしょうか……。？

そんな前書きですが、第10話です。どうぞ！

## 第10話 寂しさと火トカゲと謎の少女

仮面ライダーテマリ、前回の3つの出来事！

一つ、沙良からメダルをもらった勇樹が、修学旅行に行った！

二つ、修学旅行先で、ヤミーとカザリに遭遇！

三つ、勇樹がヤミーを取り逃がし、その光景を見ている影があった！

一旦旅館に戻り、漣に事情を話して一緒にヤミーの親を探していた。  
だが

「どうだった？」

「だめだ、全くわかんねえ・・・。」

「こつちもだよ……。」

ヤミーの親は見つからなかった。

まあ生徒と決まったわけじゃねえからな。

「とりあえず、今日はもう寝ようぜ。」

「うん、お休み、日野。」

俺と連は部屋が別なので、違う道を歩いていた。

そのとき、一人の少女とすれ違った。

「ヤミーの親は鈴木鈴すずきりんですよ。」

突然俺にそう言ってきた。

あわててそいつの方を向く。

あの顔、どっかで見たような……。

ああ！よくピアノかなんかで表彰されてる！

「えっと、牛若うしわか 空音そらね……だっけ？」

牛若って珍しい苗字だよな。

「正解です。・・・ヤミーはまた夜に動き出すと思います。それでは。」

そう言つて角を曲がつてしまった。

「ちょ、ちよつと!」

そう言つて俺も追いかけたが、そこにはもう誰もいなかった。

あいつの言葉が本当だとして、ヤミーの親は鈴木鈴。

あれ?でもあいつ体弱いからって今日休みじゃなかったっけ?

・・・それが!

謎が解けた俺は、明日になるのを待った。

次の日、再び入浴時

さて、そろそろか……。

「とは言っても、どこに出るかだなあ……。」

俺は風呂の前にある広間でヤミーが出るのを待ってる。

そのとき

『きゃあ!』

女湯の方から悲鳴が聞こえてきた。

「よりもよって女湯かよ!……行っただろうがいいのかなあ……でもまずいよなあ……でもヤミーをほっといたらもつとまずいよなあ……。」

ぐるぐる回って試行錯誤していたところ、一台の自動販売機が目



入った。

「いいここにあんじゃねえかライドベンドーさんよお！」

カザリのどてつばらにぶちかましたときについでに取れたメダルを投入する。

【タカ・カン】

【ウナギ・カン】

【タコ・カン】

総勢10体近いカンドロイドを向かわせる。

「頼むぜみんな！」

ほんの少し待つと、タカカンドロイドが来た。

「外に出せたんだな？」

コクンと頷くタカちゃん。

かわいい奴じゃねえか。

「よっしゃー！」

ドライバーを腰につけ、外に走った。

そこには、ヤミーのように顔に包帯っぱいものがある少女、鈴木鈴がいた。

「・・・日野君・・・。」

前の漣の様に、目の下にすごい隈がある。

「お前、ただ修学旅行に来たかっただけなんだよな。」

俺の推測を話し始める。

「ずっとこういうイベントには参加できなくて、みんなの感想を聞くだけで、ずっとずっと、寂しかったんだよね？」

「そうよ！だから今回だけはどうしても来たかった！高校生の一大イベントのときくらいは、無理してでも来たかった！なのにお母さ

んや先生はっ！絶対に行くなって、私悔しかった！」

泣きながら内に秘めていた思いをぶちまける。

「…………俺には、体が弱いつてことがどういうことかわかんねえけど…………でも、寂しいって気持ち分かる。」

少し驚いた表情をする鈴。

「俺さ、ずっと妹と二人暮らしで…………寂しくて、悲しかった。それで暗い表情になってる俺を、妹はずっと励ましてくれた。本当は自分も辛いはずなのに…………寂しいときはさ、全部出しちゃえばいいんだと思うんだ。」

俺が昔、優花から教わったことを話す。

「別に欲望を開放したっていい。誰かがそれを受け止めてくれるから…………。今は…………。」

鈴を見る。

「俺がお前の欲望、全部受け止めてやる！」

親指で自分を指差す。

「日野君……………うっ！」

鈴の体がだんだんヤミーに取り込まれていく。

「なっ!？」

ペルシャネコヤミーになってしまった。

ドライバーにメダルをセットする。

「待つてろ、今助けてやるから……。」

テマリースキャナーを構える。

「変身……。」

【イタチ！パンダ！クマ！タンタンタタ！ン！ク！】

お師匠コンボ発動だ。

「……………」

ゆつくりとヤミーに向かって歩いていく。

「フニャー！」

ヤミーが引つ掻いてくるが、全く効かない。

【スキヤニングチャージ！】

「二連！爆裂暴風拳！！」

ヤミーの胴体に攻撃をかます。

そこに鈴の姿が見える。

「はっ！」

ヤミーから鈴を分離させる。

そして安全な場所に寝かせる。

親を失ったヤミーは、狂ったように暴れだした。

「フギヤー！」

滅茶苦茶に爪を振り回す。

ガギン！

それをパンダの腕で受け止める。

「これを使ってみるか。」

真ん中をトカゲみたいなのに変える。

【イタチ！サラマンドー！クマ！】

腕がトカゲの鱗のようになる。

「おりゃ！」

キックでヤミーを吹き飛ばし、腕を前に向ける。

「はっ!!」

腕から炎が出る。

翠の炎だ。

「ほお、こいつはかけえな!」

【スキヤニングチャージ!】

ドスンドスンいいながら走る。

「はあああああ! せいやあああああ!」

炎を纏った拳を叩き込む。

断末魔をあげて爆発するヤミー。

「ふい」。

変身を解除し、鈴を運んだ。

後日

クスクシエでバレンタインフェスが行われた。

んまあ俺も大忙しなわけだが。

映司さんたちが誰かと話してる間、沙良と優花が俺のところに来た。

「お兄ちゃん、はい、これ！」

優花からチョコを渡される。

相変わらずハート型なのか…………。

「サンキュ、優花。」

「私も、はい。」

沙良からは星型のチョコをもらった。

「サンキュー！」

「うん！」

お互いニッコリ笑う。

誰だ今リア充爆発しろって言ったの？

そんなことを考えていると

「あの〜・・・。」

一人の少女が入ってきた。

「あ！牛若！」

「「え？」」

俺が名前を呼ぶと、沙良と優花が驚いた声を上げた。



「今日からここでバイトすることになりました、牛若空音です。よろしく願います。」

なんですと・・・！

第10話 寂しさと火トカゲと謎の少女（後書き）

次回、仮面ライダーテマリー！

勇樹「お前、何者だ？」

空音「知り合いですよ？」

カザリ「僕はまた進化した。」

沙良「なんでカザリンが師匠のコアを！？」

映司「始めて見た・・・あんな素敵な人・・・。」

勇樹「映司さん！」

次回、「友人とキレイと一目ぼれ!？」

第11話 友人とキレイと一目惚れ！？（前書き）

あんまり空音の出番がなかった・・・。

第11話 友人とキレイと一目惚れ!?

テマリーのメダル

ジャッカル×3

キツネ×2

オオカミ×2

イタチ×1

パンダ×2

クマ×1

サンショウウオ×1

サラマンダー×1

カエル×1

知世子さんと比奈姉がどこかへ行った後、牛若・・・言いくいか  
ら空音!を手招きした。

「お前、何者だ?」

唐突にそんなことを聞く。

「えっと……グリードです。」

1  
 2  
 3  
 4  
 5  
 6  
 7  
 8  
 9  
 10  
 11  
 12  
 13  
 14  
 15  
 16  
 17  
 18  
 19  
 20  
 21  
 22  
 23  
 24  
 25  
 26  
 27  
 28  
 29  
 30  
 31  
 32  
 33  
 34  
 35  
 36  
 37  
 38  
 39  
 40  
 41  
 42  
 43  
 44  
 45  
 46  
 47  
 48  
 49  
 50  
 51  
 52  
 53  
 54  
 55  
 56  
 57  
 58  
 59  
 60  
 61  
 62  
 63  
 64  
 65  
 66  
 67  
 68  
 69  
 70  
 71  
 72  
 73  
 74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80  
 81  
 82  
 83  
 84  
 85  
 86  
 87  
 88  
 89  
 90  
 91  
 92  
 93  
 94  
 95  
 96  
 97  
 98  
 99  
 100  
 101  
 102  
 103  
 104  
 105  
 106  
 107  
 108  
 109  
 110  
 111  
 112  
 113  
 114  
 115  
 116  
 117  
 118  
 119  
 120  
 121  
 122  
 123  
 124  
 125  
 126  
 127  
 128  
 129  
 130  
 131  
 132  
 133  
 134  
 135  
 136  
 137  
 138  
 139  
 140  
 141  
 142  
 143  
 144  
 145  
 146  
 147  
 148  
 149  
 150  
 151  
 152  
 153  
 154  
 155  
 156  
 157  
 158  
 159  
 160  
 161  
 162  
 163  
 164  
 165  
 166  
 167  
 168  
 169  
 170  
 171  
 172  
 173  
 174  
 175  
 176  
 177  
 178  
 179  
 180  
 181  
 182  
 183  
 184  
 185  
 186  
 187  
 188  
 189  
 190  
 191  
 192  
 193  
 194  
 195  
 196  
 197  
 198  
 199  
 200  
 201  
 202  
 203  
 204  
 205  
 206  
 207  
 208  
 209  
 210  
 211  
 212  
 213  
 214  
 215  
 216  
 217  
 218  
 219  
 220  
 221  
 222  
 223  
 224  
 225  
 226  
 227  
 228  
 229  
 230  
 231  
 232  
 233  
 234  
 235  
 236  
 237  
 238  
 239  
 240  
 241  
 242  
 243  
 244  
 245  
 246  
 247  
 248  
 249  
 250  
 251  
 252  
 253  
 254  
 255  
 256  
 257  
 258  
 259  
 260  
 261  
 262  
 263  
 264  
 265  
 266  
 267  
 268  
 269  
 270  
 271  
 272  
 273  
 274  
 275  
 276  
 277  
 278  
 279  
 280  
 281  
 282  
 283  
 284  
 285  
 286  
 287  
 288  
 289  
 290  
 291  
 292  
 293  
 294  
 295  
 296  
 297  
 298  
 299  
 300  
 301  
 302  
 303  
 304  
 305  
 306  
 307  
 308  
 309  
 310  
 311  
 312  
 313  
 314  
 315  
 316  
 317  
 318  
 319  
 320  
 321  
 322  
 323  
 324  
 325  
 326  
 327  
 328  
 329  
 330  
 331  
 332  
 333  
 334  
 335  
 336  
 337  
 338  
 339  
 340  
 341  
 342  
 343  
 344  
 345  
 346  
 347  
 348  
 349  
 350  
 351  
 352  
 353  
 354  
 355  
 356  
 357  
 358  
 359  
 360  
 361  
 362  
 363  
 364  
 365  
 366  
 367  
 368  
 369  
 370  
 371  
 372  
 373  
 374  
 375  
 376  
 377  
 378  
 379  
 380  
 381  
 382  
 383  
 384  
 385  
 386  
 387  
 388  
 389  
 390  
 391  
 392  
 393  
 394  
 395  
 396  
 397  
 398  
 399  
 400  
 401  
 402  
 403  
 404  
 405  
 406  
 407  
 408  
 409  
 410  
 411  
 412  
 413  
 414  
 415  
 416  
 417  
 418  
 419  
 420  
 421  
 422  
 423  
 424  
 425  
 426  
 427  
 428  
 429  
 430  
 431  
 432  
 433  
 434  
 435  
 436  
 437  
 438  
 439  
 440  
 441  
 442  
 443  
 444  
 445  
 446  
 447  
 448  
 449  
 450  
 451  
 452  
 453  
 454  
 455  
 456  
 457  
 458  
 459  
 460  
 461  
 462  
 463  
 464  
 465  
 466  
 467  
 468  
 469  
 470  
 471  
 472  
 473  
 474  
 475  
 476  
 477  
 478  
 479  
 480  
 481  
 482  
 483  
 484  
 485  
 486  
 487  
 488  
 489  
 490  
 491  
 492  
 493  
 494  
 495  
 496  
 497  
 498  
 499  
 500  
 501  
 502  
 503  
 504  
 505  
 506  
 507  
 508  
 509  
 510  
 511  
 512  
 513  
 514  
 515  
 516  
 517  
 518  
 519  
 520  
 521  
 522  
 523  
 524  
 525

俺と映司さんが固まる。

[illegible]

そしてハモる。

沙良は分かっていたようで耳を塞いでいた。

「この子はカナ。雷を扱うのがうまい、私の友達だよ。」

沙良、そういうことはもっと早く言ってくれ。

「まあよろしく、空音。」

「はい……よろしく……お願いします。」

おずおずと俺の差し出した手を握る。

「いででででで！！」

沙良、痛いから足踏むな！

「むゝ・・・。」

なにになになに！？俺なんか悪いことした！？

クスクシエデザートフェア

空音も含めてみんな大忙しだ。

そのとき、伊達さんが来た。

甘いものは苦手らしいので、また後日来ると言う。

去り際に

「ちょっと火野君借りていい？」

「「俺？」」

「ああ〜！どっちも来い！」

沙良に目配せをして、一緒に伊達さんについて行った。

どこかのおでん屋台。

「悪いね。別に場所帰るようなことでもねーんだけどさ。甘いもん苦手で。」

「全然！俺もおでん大好きですし！」

「俺も！特に卵がいいんですよ〜！」

上から伊達さん、映司さん、俺である。

誰だ今子供つつったの？

その後、ゴリラ君が持ってきたおでんを食べながら映司さんと伊達さんが話してた。

なんかどつかですれ違ってる何か何とか・・・・・・・・？

ハブられた・・・・・・・・。

何となく居心地の悪さを感じていると、アंकと沙良が来た。

「勇樹、カザリンが近くにいる・・・・。ウヴァもいっしょかな？」

「分かった！伊達さん、ご馳走様でした！」

「え！？俺のゴリラ君反応しねえんだけど！？」



そんな伊達さんを放つという映司さんたちと走った。

別の場所、ウヴァとカザリが戦っていた。

「あれ？わざわざメダル持ってきてくれたの？」

カザリがこちらに気付く。

その隙にウヴァはどこかへ行ってしまった。

「ついでに、ユーズのももらおうか。」

沙良を指す。

「何度も言わせないでよ、私の相棒を倒せたらね！」

俺に肩に手を置く。

映司さんもアंकからメダルをもらい、俺も沙良からメダルをもら

う。

「あれ？ジャツキオオとかじゃねえの！？」

3枚とも種類がバラバラだ。

「いいからそれで変身して！」

「お、おう……。」

ドライバーにメダルをセットする。

「変身っ！！」

【タカ！ゴリラ！タコ！】

【イタチ！キツネ！カエル！イ！キール！イキルイ！キール！】

カザリが水流を放つが、カエルの足で耐え切り、水を跳ね飛ばす。

「おい！なんでコンボでもないのに歌が流れるんだ！？」

「まあ簡単に言うとオーズで言うところのタトバだから。」

なるほど、だから曲調もタトバにそっくりだったのか。

しかしイキルコンボって名前がなあ……。

そんな雑念を捨て、戦闘に集中した。

ぐっ！カザリってこんなに強かったっけ？

「僕はまた進化した。今の君達じゃ、僕には勝てない。」

言ってくれんじゃねえか。

後ろの方で伊達さんが変身した。

パカッという気持ちのいい音が響く。

3体1だったらすかに……………。

と思っていた時期が僕にもありました。

「はっ！」

「ぐうううう．．．．」

映司さんと伊達さんが吹っ飛ばされ、俺は一人でカザリの攻撃を耐えてる。

「これはユーズのメダルももらったかな？」

勝ち誇ってんじゃねえぞ．．．．

「映司！」

「勇樹！」

俺と映司さんがメダルを受け取る。

【タカ！クジャク！コンドル！タアアアジャアアアドルウウウウー！！】

【サンショウオ！サラマダー！カエル！サンゝマルゝ！サンマルッ！】

上から深緑、翠、エメラルドグリーンになる。

「はあっ！」「」

俺と映司さんで同時に炎を出す。

これには耐え切れず、カザリは逃げて行った。

後日

アंकがヤミーの反応をキャッチしたので、今度は空音も加えて走り出した。

白い服を着た女の人が蒼い卵を持っていた。

「おい！そいつを渡せ！」

アंकが言うと、卵から小さいエイ型のヤミーが大量に出てきた。

「くそ！」

メダルを受け取る。

「変身っ！！」

【タカ！トラ！バッタ！タ！ト！バ！タトバタ！ト！バ！】

【サンショウオオ！サラマンダー！カエル！サン！マル！サンマルッ！】

5人がかりでヤミーを潰すが、中々減らない。

その間にもあの人は行ってしまう。

「だああああもう！」

【スキヤニングチャージ！】

両足に炎が集まり、大きくジャンプする。

俺高いところ苦手なんだけどなあ………。

いまだ！

「おおおおりやあああああ！！！」

下に向かって蹴りを放つ。

地面に当たったとき、足回りから炎が噴出し、ヤミーを一掃した。

バーニングドライバーと名づけよう。

それを行ったのは日が落ちてからだった。

手分けしてあの人を探した。

俺と映司さんが合流すると、そこにいる人がおかしいことになっていた。

「素敵……。」

「早まった！結婚なんかするんじゃないかった……！」

「俺、彼女と別れる！」

町の人が何かに見とれている。

「どうなってるんだ……？」

「分かりません……。」

その視線の先には、あのヤミーの親の人がいた。

俺と映司さんは目を見合わせ、その人を追った。

「火野！」

伊達さんも合流する。

「あ、伊達さん！」

「ヤミーの卵です！」

「なに！？」

すると、その人が振り返った。

その瞬間

「・・・・映司さん？」

映司さんが顔を赤らめてフラツとした。

「ちよちよちよちよ〜！」

俺と伊達さんで支えようとするが、むなしく映司さんは落っこちていき、噴水の所にドボンした。

「始めて見た。あんな素敵な人・・・・。キレイだなあ・・・・。」

「火野！おい火野！」



「映司さん！映司さん！！」

沙良や空音も合流するが、映司さんは全く戻る気配はない……。

第11話 友人とキレイと一目惚れ！？（後書き）

次回、仮面ライダーテマリー！

勇樹「なんだお前？」

沙良「なんであいつがここに……！？」

空音「まずいですね……。」

？「ゲゲッ！俺のメダルを使ったあいい度胸じゃねえか。」

勇樹「うわあああああ！！」

次回、「敗北と両生類と奪われたメダル」

## 第12話 敗北と両生類と奪われたメダル（前書き）

何気にクラスメートの出番が多いです。

そして今回はタイトルどおり……！

ちょっと予告と変わってます。

ご了承下さい。

## 第12話 敗北と両生類と奪われたメダル

仮面ライダーテマリ、前回の3つの出来事！

一つ、クスクシエにやって来た空音は、沙良の知り合いだった！

二つ、カザリと遭遇した勇樹たちは、ギリギリの所で追い払うことに成功！

三つ、ヤミーに寄生された女に、映司が一目惚れしてしまった！

「ちょっと！映司さん！しっかりして下さい！」

「ほわ……。」

だめだこりゃ！

「桜……。」

伊達さんが見上げると、あのヤミの親が何か言ってる。

「伊達君、どうして貴方は他のみんなみたいににならないの？・・・  
そっちの子も。」

俺の方を見る。

そっぴやなんでだ？

テマリードライバーのおかげなんだったら映司さんの方が説明できない。

「はて？なんでだ？」

考えていると、卵からエイヤミが大量に出てきた。

「くっ！」

「おい映司なにをぼーっとしてる・・・！」

アンコも合流した。

「日野さん！」

空音が何かを投げてくる。

「鴻上って人からの誕生日プレゼントだそうです！」

「さんきゅ！」

中には映司さんが使ってるのの青い所が赤くなったメダジャリバーが入っていた。

「おりゃああ！」

うゝん、剣じゃ一体一体しか倒せないのがなあゝ……。

まあ大半は伊達さんが打ち落とし、俺は映司さんを引きずって帰った。

学校

「そつか、僕の時みたいなのが……。」

俺は昨日のことを漣や鈴に話している。

もちろん他のクラスメートには聞かれないように。

「でも牛若さんがグリードだったなんてね。ビックリ……。」

「うん、学校でもすごい人気だしね。」

鈴と漣が言う。

「そついや、空音どこ行つた？今日来てたよな？」

さつきから姿が見えない。

「ああ、何か音楽室に行つてたよ？」

「音楽室？なんでまた？」

「知らないわよそんなこと……。」

「っていうか勇樹はいつの間に牛若のことを空音って呼ぶようになったの？」

漣が詰め寄ってくる。

「じゃあお前はいつの間に俺や鈴のことを下の名前で呼ぶようになったんだ？」

「鈴は幼馴染だし……、勇樹は勇樹が僕の事を漣って呼ぶから……。」

初耳だ。

「まあとりあえず音楽室行くか。」

俺たちは音楽室に向かった。

「あれ？僕の質問無視？」



## 音楽室

ピアノの音色が聞こえる。

「うまいな……。」

「キレイ……。」

「すごい……。」

俺、鈴、漣が絶賛する。

「この曲って……？」

「Double - Actionって曲だよ。」

鈴の質問に漣が答える。

そして空音がピアノを弾き終える。

俺たちは思わず拍手した。

それでようやく空音がこっちに気付く。

「い、いつから聞いてたんですか……………」

顔を赤くして縮こまる。

「さっきのサビの部分からだ。」

俺が答える。

「す、すみません、お聞き苦しいものを……………」

「いやいや、すっごく上手よ!」

「うん、かつこ良かった!」

「つーか鑑賞料払ってもいいな。」

みんな大絶賛だ。

そのとき

「!…………佐藤さん、鈴木さん、みなさんを非難させてください……………」

「「えっ!?!」」

「ヤミーか。」

空音が頷く。

「二人とも、避難誘導頼むぜ！」

「了解！」

「勇樹も気をつけてね！」

「おう！」

二人が出た後、すぐに沙良が来た。

「勇樹！カナちゃん！」

「沙良！」

「この姿では空音ですよ？」

「あ、ごめん空音ちゃん……。で、大丈夫？」

「ああ。まだ何も来てねえ。」

って言ってたら来たよ。

クモみたいなのとハエみたいなの。

「うわゝ気持ち悪っ！」

「言っな沙良。俺も思ってたんだから。」

「ううゝ……。あ、はいメダル。」

メダルを受け取り、ドライバーにセットする。

「はっ！」

「きゃ！」

「あぶねっ！」

クモヤミーが白いねばねばした弾を撃ってきた。

俺たちは避けれたが、ピアノに当たってしまう。

それに、空音がぶちギレた。

「……貴方達……今何をしたか分かってるんですか……」

静かに怒る。

超怖い……。

沙良もガクガクブルブルしてる。

「楽器を汚したことを後悔させてあげます……。」

体をメダルが覆い、グリード形態になる。

頭は蒼いフクロウのような姿、体は紫のコウモリのような、そして金のベルトに青紫のミミズクのような脚。

って

「完全形態!?!」

俺と沙良の声が重なる。

「ええ。……日野さんはハエヤミを、あのクモは私がお仕置きします。」

何か黒いオーラが出てる……。

「お、おう……。程々にな……。」

「はい。善処します。」

そう言うと一気にクモヤミの懷に飛び込み、天井を破って空に上がった。

「天井は壊していいんだね……。」

「らしいな……。っと、変身！」

【イタチ！キツネ！カエル！イ！キ！ル！イキルイ！キ！ル！】  
思い出したかのように変身する俺。

「はっ！」

キツネソードを構えて突っ込む。

「おりゃ！」

剣を振り下ろすが……。

「ふん！」

高速で移動され避けられる。

「くそっ！ちょこまかと……。」

イライラしながら剣を振るうが、ブウンというキモイ音を立てて避けられる。

「ああ！もう！沙良！」

「焼いちゃえ！」

投げられたメダルをセットする。

何気に物騒なこと言ってたよねあの子……。

【サンショウウオ！サラマンドー！カエル！サン〜マル〜！サンマルッ！】

翠のサンマルコンボになる。

「おりゃああああ！」

炎を纏った拳を叩き込む。

「ぐおっ！」

効果はバツグン！ってか！

そしてドライバーをもう1度スキャンする。

【スキヤニングチャージ！】

昨日は垂直に行っただけ、今は下学校だからね。

「はあああああ！バーニングドライバー！！！」

真横に蹴りを入れる。

窓を割って空中で爆発する。

「よつと！」

カエルの脚のおかげで壁に張り付く。

下では沙良と空音がメダルを集めてる。

たけゝ・・・。

そのとき

「勇樹後ろ！」

沙良が叫ぶ。

「後ろ？」

振り返ると、何者かの蹴りが鳩尾に決まる。

「がはっ！」

結構な高さから落下してしまう。

その衝撃で変身が解ける。

「勇樹！大丈夫！？」



沙良が駆け寄ってくる。

「まずいですね……。」

空音が上を見ながら呟く。

「ゲゲゲッ！その程度で俺のメダルを使ったぁいい度胸じゃねえか！」

蹴りをかましてきた本人の姿が見える。

ヌルヌルした体に、暗い翠の色。

そして手にはさっきまでドライバーに付いていたサンショウオとサラマンダーのメダルがあった。

「そんなんっ！なんであいつがここに……！！」

沙良が驚く。

「知り合いなのか？」

ゆっくり体を起こしながら聞く。

「恐らく、最悪のグリッド……。」

空音が解説を始める。

「両生類タイプの……テルス！」

そして再びそいつを睨んだ。

「ゲゲゲッ！ 久しいなあユーズ、カナア！」

汚い声でそう吼えた。

テマリーのメダル  
ジャッカル×3  
キツネ×2  
オオカミ×2  
イタチ×1  
パンダ×2  
クマ×1

カ  
エ  
ル  
×  
1

第12話 敗北と両生類と奪われたメダル（後書き）

次回、仮面ライダーテマリ！  
テルス「ゲゲッ！そんなもんか。」

勇樹「くっそ！」

沙良「だったら次は・・・！」

空音「パートナー失格ですよ・・・。」

沙良「さよなら・・・。」

次回、「実力と全力と失格」

第13話 実力と全力と失格（前書き）

今回、沙良がなんと・・・！

### 第13話 実力と全力と失格

仮面ライダーテマリ、前回の3つの出来事！

一つ、役に立たなくなった映司を引きずって帰る勇樹！

二つ、勇樹の通う学校に、ヤミーが2体出現！

三つ、何とかヤミーを倒した勇樹だが、グリードにやられてしまった！

「ゲゲゲッ！久しいなあユーズ、カナア！」

汚い声で吼える。

「きたねえ声で……沙良達の名前を呼んでんじゃねーよ！」

フラつきながらも、何とか立ち上がる。

「ゲゲッ！ザコはすっこんでろ！」

「ザコかどうか、試してみるか！？沙良あ！」

「うん！」

沙良からメダルをもらう。

「変身っ！」

【イタチ！パンダ！クマ！タンタンタタ！ン！ク！】

お師匠コンボになる。

「でええりゃああ！！！」

全力で拳を打ち出す。

だが

「ゲゲッ！」

ぬるん

「なっ！？」

パンチが避けられてしまう。

いや、正確には受け流された。

「そついやサンショウオオもあいつの能力か……………」

迂闊だったぜ…………。

「ゲゲツ！くらえ！」

右手から炎を出してくる。

「くっ！」

右手に風を纏わせ、拳で対抗する。

「ぐううううう……………」

結構きつい…………。

「ゲゲエ！」

威力を強めてくる。

そして



「うあああああああ！」

右手に炎を喰らってしまう。

「ぐっ……あっ！」

右手が動かない……。

「そおら！」

「ぐあっ！」

あいつの蹴りで変身が解けてしまう。

その手にはパンダとクマのコアがあった。

「ぐ……あっ……。」

くそ！体が重い……。

「ゲゲツ！そんなもんか。」

テルスが鼻で笑う。

「まだまだよ！勇樹！」

沙良が自分のメダルを渡してくる。

「おお。」

メダルを受け取り、ドライバーにセットする。

「変身……。」

【ジャッカル！パンダ！オオカミ！】

右手が使えないため左手でスキャンした。

「えっ！？どうしてパンダなんですか！？」

空音が驚いてる。

「右手が使えない状況じゃ、パンダは半分の力しか出せませんよ！？」

「……大丈夫。」

沙良が相当焦ってるように見える。

「安心しろ空音、もう負けねえ……。」

左手だけ構え、テルスに突っ込む。

「おりゃああー！！」

「ゲゲッ！」

またかわされそうになるが、その前に足払いをかける。

「はっ！」

「ゲゲッ!？」

バランスが崩れたところに拳を叩き込んだ。

「おら！」

ゴスツといい音がする。

だがコアメダルまでは届かなかった。

「ゲゲ・・・いい加減遊びはやめるか。」

なに!？

「くられ！」

頭上に巨大な翠の火球を用意してる。

「ポイズンフレア!!」

その火球が迫ってくる。

「くっ！」

避けようとするが間に合わず

「ぐあああああ！」

もろに喰らってまた変身が解除される。

「げほっ！がはっ……。」

口から血が吹き出る。

「日野さん！」

空音が駆け寄ってくる。

「だったら次は……。！」

沙良は手元のメダルを見る。

その沙良を、空音が引つ叩いた。

「なにやってんですか！」

沙良に怒鳴る。

「今の日野さんの状態を分かってるんですか！？日野さんは沙良の道具じゃないんですよ！？」

その言葉にはつと目を見開く沙良。

「ゲゲッ！しゃべってる暇があるのか！？」

テルスがこっちにじり寄ってくる。

「くっ！」

空音が1枚のメダルを放り投げる。

「なっ！？」

そのメダルを追ってテルスがどこかへ行く。

「今だ！」

空音が怪人形態になり、俺たちを掴んで飛び去った。

よく見ると、脚のミミズクみたいなのが無くなってる。

「空音、お前……！」

「私のコアを投げましたからね。あのまま全滅するよりマシです。」

そう言いながら公園に着いた。

「すみません、ここまでが限界です……。」

「いって。サンキュ……。」

まあこいつのメダルは夜行性の動物だからな。昼間はロクに動けないだろう。

「とりあえず、優花に連絡しとくか……。」

俺は優花に電話をかけた。

s i d e   o f f

「勇樹！大丈夫！？」

しばらくして、映司が勇樹たちのいる公園に走ってきた。

「映司さん……。元に戻ったんですね……。良かった……。」

少し目が虚ろになっている勇樹。

「うん。それより、今家に連れて行くから。」

「すみません……………」

映司に肩を借りて起き上がる。

ゆっくり歩く勇樹の後ろを、心配そうな顔をした沙良と空音が歩いた。

家に着くと、勇樹はすぐに眠った。

「じゃあ、俺はこれで。」

「すみません映司さん、またご迷惑おかけして……。」

出て行くこうとする映司に、優花はお礼を言った。

「いって。それよりも、勇樹についてて上げて。大事な人が傍にいと、すぐに良くなるから。これ結構ホント！」

明るく優花に言う映司。

「映司さん……。はい！ありがとうございます！」

「うん。」

しばらく勇樹の手を握っていた優花だが、すぐにそのまま眠った。

残った沙良は、一人で考え事をしていた。

沙良 side

ずっと考えていた。

空音ちゃんに言われた言葉。

『自分の相方の状態も分からないようじゃ、パートナー失格ですよ・  
・・。』

ずっとそれが心に突き刺さっていた。



あ那时的の私は、勇樹のこととも考えずに、テルスを倒すことばかりを考えていた。

勇樹が傷ついているのも、見ていたはずなのに……。

ゆっくり勇樹の部屋に入る。

ベッドでぐっすり眠っている勇樹と、その手を握って眠っている優花ちゃん。

そつと勇樹の頬に触れ、起きないように小さな声で言葉を発する。

「じゅめんね、勇樹……………」

それだけ言つて、部屋から出る。

そのまま家の扉も開ける。

「さよなら……………」

家から出て、マンションを降りた。

テマリーのメダル  
ジャッカル×2  
キツネ×2  
オオカミ×1  
イタチ×1  
カエル×1

### 第13話 実力と全力と失格（後書き）

次回、仮面ライダーテマリー

沙良「私は、どうすれば・・・。」

カケル「お前が本当に守りたいものはなんだ？」

勇樹「見せてやろうぜ！俺たちの！」

【ジャッカル！キツネ！オオカミ！】

「変身っ！！」

次回、「本心と絆とDouble-Action」

第14話 本心と絆とDoble - Action (前書き)

挿入歌 Doble - Action strike form

## 第14話 本心と絆とDoble-Action

仮面ライダーテマリ、前回の3つの出来事！

一つ、突然現れたグリード、テルスにやられてしまうテマリ！

二つ、何とか空音の機転のおかげで全滅を避ける！

三つ、自分の行いを悔やんだ沙良が、勇樹の下を去ってしまった！

「はぁ．．．．はぁ．．．．。」

勇樹の下を去った沙良は、山の奥深くまできていた。

「．．．．。」

そして近くにあった木に座り込む。

「私は、どうすれば……。」

そのまま泣き出してしまふ。

「つたく、おちおち冬眠もできねーなあ……。」

沙良の近くに、イズナことカケルが降りてくる。

「師匠……。」

涙を目一杯にためてカケルを見る。

「なにがあつた？話してみろよ。」

沙良が座っている木の反対側に腰をかける。

そして沙良は自分のことを話し始めた。

「……と言っ訳です……。」「

若干声が沈んでいる。

その話に、カケルはふむとだけ言った。

「……それだけか？」

「えっ？」

突然言われた言葉に困惑する沙良。

「その程度のことかって聞いてるんだ。」

「その程度って！私にとっては重要なことなんですよ！？」

思わず立ち上がって怒鳴る沙良。

それをカケルは宥める。

「まあ落ち着け。俺が言いたいののはな？別に前があのがきに嫌われた訳じゃねーだろっつーことだ。

あのがきはお前のことを拒絶したか？」

そのことに、沙良は言葉が詰まる。

「ですけど、やっぱり私のしたことは……。」

俯きながらぼそつと話す沙良。

カケルは一つため息をついて話し始めた。

「いいか良く聞け？」

あのガキはどんなことがあってもお前を拒絶したりしない。絶対にだ。

そしてお前も本当はあいつの所にいたい、そう思ってるだろう？  
ただあいつに会わせる顔がねえからここまで着ただけだ。そうだろう？

図星のようで、黙り込んでしまう沙良。

「たまには、自分の欲望に素直になっていいんじゃないか？」

その言葉に、少し顔を上げる。

「お前が本当に守りたいものはなんだ？本当に一緒にいたい相手は誰だ？」

その答えは、同じ人物なはずだぜ？」

「……勇……樹……。」

ポツリと言葉を漏らす。

「んでもって、お前の自慢の耳を使って回りの音を聞いてみ？方角



は南南西だ。」

言われた方角に耳を澄ます沙良。

『……あ！……良あ！……沙良あ！』

「っ！勇樹！」

聞こえてきた声に、ぱつと顔を上げる。

「あいつはお前を探してるぜ。無我夢中で。それこそ、ヤミーに気付かないくらい、な？」

カケルの言葉に、沙良はもう1度耳を澄ました。

「ヤミー！？それも10体！」

驚くべき数の音を聞く。

「おそらくテルスだろうな。あいつのヤミーは1回で複数体出せるからな……。」

ちつと舌打ちをするカケル。

沙良は心配そうな顔で南南西を見つめている。

「行つてやれ。」

カケルが沙良の背中を押す。

「このままじゃあいつ、死んじまうぞ？」

「っ！」

その言葉を聞いたとたん、弾ける様に走り出した。

「やれやれ、手の掛かる弟子だぜ……。」

走っていく沙良を見送りながら、カケルは森の奥に消えていった。

「沙良あ！沙良ああ！！」

だめだ、全然いねー。

どこ行っただよあいつ！

「ググッ！」

背後から声がした。

振り向くと、カエルの様なヤミーが10体ほどいた。

「メダジャリバー持って来て良かったぜ。」

背中に背負ったメダジャリバーを左手で構える。

右手はまだ使えないからな。

「おりゃ！」

「ゲッ！」

さすがに変身してないと力が弱いか……。

でもメダルは沙良が持つてるしな……。

そのとき

「勇樹！」

再び後ろから声がする。

顔だけ振り返ると、沙良がこちらに走ってきていた。

「勇樹！勇樹い！」

「沙良あ！」

どんどん近づいてくるが、途中でカエルヤミーが立ちふさがる。

「きゃあ！」

メダルが減って弱ってる沙良に、ヤミーの手が伸びる。

「汚い手で・・・沙良に触ってんじゃねえええ！」

メダジャリバーをヤミーに投げつける。

「ググッ！」

痛みに少し後ずさりするヤミー。

そこに俺は蹴りをぶちかまし、ヤミーとの間に距離をとった。

「勇樹！」

「沙良！」

「大丈夫！？」

俺と沙良の声が重なる。

それにお互い少し微笑む。

「・・・ごめんね、勇樹。私、勇樹の体のこと考えてなかった・・・」

「気にすんな。この借りは、いつかあいつに10倍にして返してやるからよぉ！」

沈んだ調子で話す沙良に、強気で答える。

「勇樹・・・。」

「それに、この程度で俺はお前のことを嫌いになんかなんねーよ。だからもうそんな顔すんな。な？」

「・・・うん！」

そこまで言うと、泣きつつも笑顔で答えてくれた。

そしてドライバーをつけ、ヤミィに向き直る。

「さあて、見せてやろうぜ！俺たちの絆！」

「うん！」

沙良にメダルを受け取り、ドライバーにセットする。

すると、右腰についたテマリースキャナーを沙良が握った。

「沙良？」

「・・・右手、まだ使えないでしょ？さ、一緒に。」

「ああ。せーの・・・！」

その合図で、沙良は俺の後ろからメダルをスキャンし、俺は左手だけ構える。

「「変身っ！っ！」」

【ジャッカル！キツネ！オオカミ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャッキオオ！】

久々にジャッキオオコンボになる。

「おっ！？右手が動く。」

右手を握ったり開いたりして確かめる。

「ジャッキオオは回復力高いから。」

なるほど。

「よっしゃー！沙良、下がってる！」

「うん、お願いね！」

「任せろ！」

キツネソードとメダジャリバーを握って、ヤミー共に向かっていく。

「だああありやああ！」

粘膜があるから余裕、と思ってるバカなヤミー共を問答無用で切り裂いていく。

「ゲグツ！？」

「はっ！その程度で俺の！いや、俺たちの刃が止められるかよお！」

ヤミーに反撃をさせずに切り裂いていく。

足元には大量のセルメダルが散らばっている。

そのメダルの内3枚をメダジャリバーに入れる。

「っしやあ！止めだ！」

【スキヤニングチャージ！】

【トリプル！スキヤニングチャージ！】

【ツインスキャンー！】

メダジャリバーとキツネソードにエネルギーが流れる。

それをクロスするように構える。

「はあああああああ……！」

そして一気に振り下ろす。

「ツインファンングストラッシュー！！」

「ググッ！？」

汚い悲鳴を上げ、ヤミーが爆発する。

地面には山ができるほどのセルメダルが散らばっている。

沙良にメダルを返し、二人でメダルを拾い集めた後、沙良がこう言った。



「勇樹、あのさ……。」

そこで言葉に詰まる。

「どうした？」

「あのさ……その……勇樹が良かったらんだけど……。これからも……私と一緒にいてくれる？」

今にも泣きそうな顔でそう聞いてくる。

何を言い出すかと思えば。

「当たり前だろ？俺たちはコンビなんだから。」

ごく自然に返すと。沙良は笑顔になり

「ありがとう！」

そう言うと、沙良の顔が目の前に広がった。

何か言う前に、俺の唇が何か柔らかいもので塞がれた。

これって・・・・・・・・・・！？

「さ、沙良っ！？いいいい、今のはいいいいイッタイ！？」

いやもうテンパるところじゃねえよ！

舌が仕事してねー！

「えへへ・・・・・・・・。さ、帰ろっ？」

ほんのり顔を明るくしながら、いたずらの成功した子供のような顔をした沙良が、先に歩き出した。

「ちょっ！待てよ！」

「へへ、またな〜い！」

追いかけてこをしながら家に帰った。

まあ追いつけるはずもなかったが。

テマリーのメダル  
ジャッカル×2  
キツネ×2  
オオカミ×1  
イタチ×1  
カエル×1

第14話 本心と絆とDouble-Action（後書き）

いかがでしたか？

結構熱い話にできたと思うのですが・・・。

今回は次回予告話です。ご了承下さい。

## 第15話 機械と苦手と新システム？（前書き）

前回までの空気から一転、バカ話です。

なお、沙良がかなりぶっ壊れてます。お気をつけください。

## 第15話 機械と苦手と新システム？

800年の眠りから覚めたメダルの怪人グリード。

人の欲望を使い、世界を喰らう。

それを止めるべく立ち上がったのは、オーズこと火野映司。

腕のみ復活したグリード、アंकと共に戦い続ける。

そしてその戦いに、バースこと伊達明が参戦。

さらにテマリーこと日野勇樹が加わり、戦いは激しさを増す。

果たして、その戦いの勝者は、オーズたち仮面ライダーか、グリードか、人の欲望か……！

カチャカチャ

「え〜つと、ここがこうなってこうなって……はもはも……ふ  
えつふお〜……。」

ナニコレ？

え、今俺の目の前に広がっている光景を説明しよう。

沙良が床にセルメダルを広げ、メロンパン片手に機械をいじってる。

もう1度言おう。

ナニコレ!?

「なあ沙良、なにやってんだ？」

「ふえ？ふあ、ふーひー！ふいふふあね、ふおーふあひはんふあふあ  
ふいふおんふあひはふいふおふおふあつふえふいふあふあんふあほ。」

なんかメロンパン食いながらふあふおふあふお言ってる。

「えーっと、『え？あ、勇樹！実はね、鴻上さんからいろんな機械  
をもらってきたんだよ。』で、いいのか？」

「・・・ごっくん。うん、合ってるよ。すごいね勇樹。」

「我ながらびっくりだ。」

良くあの謎の言語を解読できたもんだ。

「で、なんでまた急に？」

本題はそれだ。

「いやね、この間カエルヤミーと戦ったとき、二人で変身！！てしたじゃん？」

あのとときか……。

あの、キキキキキ、キsゲフンゲフンをしたとき……。

「あ、ああああ、うん、したな。で、そんそそれがどしたんだ？」

あゝ、なんでこんなにテンパるんだ……。

「あのとときに、思ったんだ……。」

沙良の表情が暗くなる。

そっか、こいつ、俺だけしか闘ってないのが嫌なのかな。

コアメダル減ってんだから無理しなくていいのに。

「あのなあ、お前は自分のコア減って「私も変身したいな」って！  
ってそっちかよ！」



なんだよおい！

俺めっちゃいいこと言う構えしてたのに！

しかも変身したいって！

「別に怪人形態になるときに『変身！』って言えばいいだろ。」

「やだよかつこ悪い。ちゃんと変身！って言っ

【犬！美少女！メロンパン！】とかドライバーに言われてから変身したいの〜！」

腕をぶんぶん振って講義してくる。

「いや、なんだよ【犬！美少女！メロンパン！】ってよお！自分で美少女とか言うなよ！しかも脚メロンパンで！動けねーわ！しかももういわ！」

なんだよ今の発言、ツツコミどころありすぎだろ！

「まあ冗談だけどさあ。」

「冗談かよ！」

あれ？でも目がガチなんだが……。

「純粹に興味があつてね。何でセルメダル1枚でバースはあんなに強力な力があるんだろう？って。」

「ふうむ、たしかになあ……。」

「で、鴻上さんに聞きに行ったら『すばらしいっ！』って言われて、材料くれたの。」

あそこの会長は大丈夫なんだろうか？

「でもよ、お前ドライバーなんか作れんのか？」

「そこなんだよー！さっきから組み立て方説明書を読んでもなかなかできないんだよ……。」

説明書くれたのか。

……。じゃあなんで組み立てらんねーんだ？

「もしかして、お前機械苦手？」

「グサツ！」

そんな露骨に「凶星！」って反応しなくても……。

「は！でもでも、私800年も寝てたんだからしょうがないんだよ！？」

「お前今自分がグリードって忘れてたろ。」

いや、俺も忘れてたけども……。

「う……。。。。勇樹も手伝ってよ！」

「いいだろう。この俺がバース以上の物を作ってやるぜ！」

1時間後

「え……と、これがこうなって、ここがこうで……。」

「勇樹……、もしかして勇樹も機械苦手？」

沙良が疑いのまなざしを向けてくる。

「い、いや、そんなことないぞ！？ちょっと遊びで冷蔵庫壊したことがある程度だ。」

「いや、それで十分だから！」

うつ！まさか沙良に突っ込まれるとは……。

「優花ちゃんはどうなの？」

「あいつは駄目だ。あいつのせいでパソコン8台はぶっ壊れたからな。」

「大丈夫なのこの兄妹……。」

「うつせー！ここまで料理とかはちゃんとできてるから問題ねーよ！」

怒鳴りながらも機械をいじり続ける。

ここにこう……あれ？はまんない。

じゃあここに……いつて！バチツつた！

「くそー！どうなってんだよ！」

「あ、もしもし空音ちゃん？うん、今家来れる？あのね、勇樹がダメダメでね……。」

「おい！お前もだろ！」

なにさりげなく人のせいにしてるんだこの子は！

あ、でも空音だったらなんとかなるかも・・・。

「うん、空音ちゃんすぐ来てくれるって。」

「そいつぁ心強『ピンポン』はい！」

『空音です。』

「「はやつー！」」

俺と沙良の声が重なる。

『飛んできましたから！』

「なんという能力の無駄遣い！」

「さすが空音ちゃん！私達にできないことを平然とやってのける！」

「そこに痺れる！」

「憧れるうー！」

なんでこいつは800年寝てたのにこういつどうでもいいこと知ってるんだ？

『あの、はやく開けてください……。周りの視線が……。』

「「あ、すみません……。」「」

さらに1時間後

「・・・これで・・・っと。後はメダルを組み込めば完成です。」

「マジですか!?!」

すげーな。俺と沙良が合計2時間近く使ってもできなかったものを半分の時間で・・・。

いや、俺らが機械弱いだけか・・・。

「ありがとー!空音ちゃん!」

「いえ・・・と言いますか、この説明書とても丁寧に書かれています。が・・・。」

いやいや、めっちゃわかりづれーよこれ！

「それより、メダル何枚必要なの？これ使うの。」

「125枚です。」

・・・・・・は？

「空音さん、今何と仰った？」

「このシステムを使用するにはセルメダルが125枚必要です。と言いました。」

「・・・・・・。」

「・・・・・・。」

「「ええ~~~~~！？」」

俺と沙良の声が再び重なった。

だって消費量多いんだもん・・・・・・。

つづく！

「マジで！？」

テマリーのメダル

ジャッカル×2

キツネ×2

オオカミ×1

イタチ×1

カエル×1



**第15話 機械と苦手と新システム？（後書き）**

続きます！

## 第16話 バカとテストと新装備（前書き）

どうも、白いクウガや龍騎ブランク体、電王プラットフォームが好きなハナトです。

今回は前半バカです！

どうぞ！

## 第16話 バカとテストと新装備

仮面ライダーテマリ、前回の3つの出来事！  
一つ、沙良が鴻上から何かいろいろもらう！  
二つ、沙良も勇樹も機械が苦手だった！ぷっ！  
三つ、空音さんマジパネエっす！

「おいナレーション！」

思わず立ち上がって空に向かって叫ぶ。

「どうした日野？授業中だぞ？」

「あ、さーせん……。」

『あははははははー！』



今の発言は鈴だ。

「ああ。でも使うのにセルメダル125枚必要なんだよ・・・。」

「多っ！！」

うん、そろそくなるわな。

「てな訳で、一応実験もかねて今日テストしてみるんだ。」

持ってきた簡易型ドライバーを見せる。

イメージとしては、常にベルトの状態で、スキャナーその他諸々が逆になったテマリードライバーだと思ってくれ。

別にオーズドライバーでもいいけどさ。

「うわゝ、銀と黒だけとかダサッ！」

鈴、散々見つめた末に感想がそれか！

「俺に言つな俺に！持ってきたのは沙良だ！」

「うわゝ！ねえ、僕も使ってみていい？」

漣が食いついてくる。

こいつこんなキャラだったっけ？

「いいけど？」

「やった！」

両手を挙げて喜ぶ。

「ちょっと待って下さい！今日日野さんと佐藤さんがテストするとして、一気に250枚のセルメダルを消費するんですよ！？」

空音、声がでかい。

「分かってるけど声がでかい。」

「あ、すみません……。」

あっという間に縮こまる。

「んまあ今日は漣だけテストすればいいだろ。」

そのためにセルメダル125枚をカバンに詰め込んできたんだからな。

重いなのって！

沙良には怒られるし……。

『一気に赤字だよ！分かってんのそこんどこ！？』

『すみません、ほんとすみません！』

と、何回土下座したとか……。

……あれ？

元はといえばあいつが作りたいって言ったんじゃないかってっけ？

じゃあ何で俺怒られたんだ？

放課後

屋上

「うーん！天気もいいし！絶好の変身日和だね！」

「何だ変身日和ってよぉ！」

さつきから漣のテンションが異様に高い。

「なあ鈴、あいつどうしちゃったの？」

こっそり鈴に聞く。

「んー？どうせ空音ちゃんにいいとこ見せられる！って張り切ってるんじゃない？」

こっちは逆にテンション低いな……。

何がどうなってるんだ？

「まあいいか。メダルセットと……。」

ベルトの端っこからメダルを入れていく。

ベルトの中にメダルを入れないといけなから面倒だ。



・・・よし、122枚入れたぞ！

最後はかつこよく・・・。

「漣！この3枚をここにはめて、かつこよく変身！って叫ぶんだ。いいか、かつこよくだぞ！？」

かつこよくを強調する。これ大事。

「う、うん！やって見るよ・・・。」

メダルを3枚慎重にセットする。

初々しいなあ。

そしてテマリードライバーと逆に傾け、テマリードライバーと逆にスキヤナーを握る。

いや、オーストライバーでもいいけどさ・・・。

「へ、へんしん・・・！」

左手でスキャンし、右手は胸の前で握る。

何かウィーンウィーンという音がして、真っ黒い姿になった。

なんて言うんだろ……。

オーズから鎧を取ったらかうなりました……

って感じ。

超弱そう。

「うわー！見て見て！僕変身したよっ！」

ハイテンションで飛び跳ねる。

それを少し顔を赤らめながら鈴が見てる。

「どうだ鈴、感想は？」

マイクを握るまねをして鈴の前に持ってくる。

「……は！べ、別にアレぐらい誰だってできるわよー！」

「ツンデレおもグボウワァ！」

ツンデレ乙って言おうとしたら鳩尾にいいパンチが……。

あれ？空音どこいった？

## 音楽室

ここからまたあの曲が聞こえてくる。

何で実験してんのにピアノ弾いてるんだこの子は？

こっそり中に入る。

そこでは、真剣な眼差しでピアノを弾く空音の姿があった。

弾き終わった後、また俺は拍手していた。

「！ま、また聞いてたんですか・・・？」

顔を赤くして縮こまる。

「まあな・・・つか、何で実験中にピアノ弾いてるんだよ！」

それだよ聞きたかったのは！

「あれにそこまで興味ないので。」

そっけなく言い放つ空音。

「ふーん、でも漣はお前に見て欲しいらしいぞ？」

「え！？」

鈴がそう言ってたしな。

「えっ、えと・・・！！！」

赤くなってあたふたした後、突然上を睨む。

「ヤミーか！」

「ええ。しかもまた屋上です！」

「忙しいなあもう！」

俺達は屋上に走った。

屋上

屋上に着くと、へっぴり腰で漣（変身状態）が蛾の様なヤミーと戦ってる。

「日野君！漣が！」

鈴が悲痛な声を漏らす。

「分かつてる！空音、鈴と、俺が隙を作ったら漣も頼む！」

「分かりました！」

ヤミーに走っていく。

「おらぁ！」

「ぬっ！」

俺の蹴りで少し後退する。

「漣！下がってる！」

「う、うん……。」「

漣が下がったのを確認し、再びヤミーと対峙した。

「おら！」

「ふん！」

蹴ろうとするが、ヤミーにガードされる。

「はっ！」

そのままヤミーの拳をまともに受けてしまふ。

「がはっ！」

吹っ飛ばされてフェンスにぶつかる。

「げほっげほっ・・・。」

「日野さん！」

空音の声が聞こえる。

「勇樹！くそ！」

漣が走っていく。

「なっ！？」

驚いて止める間もなく

【スキヤニングチャージ】

テマリードライバーよりも機械的な音が響く。

・・・まあオーズドライバーでもいいけどさあ・・・。

「はああああああ！」

スキヤナーでヤミーをぶっ飛ばす。

すげーな。

「さすがメダル125枚！あんぐらいの威力は出せるんだな。」

「あれ？僕は？」

漣を無視していると、鈴が漣の頭を叩いて説教してる。

「バカ！なんで無茶したの！？」

「え、え〜つと・・・。」

漣に同情していると、沙良が遅れてやってきた。

「勇樹！・・・ってどういう状況？」

うん、そら混乱するわな。

「・・・まあ、とりあえずメダル。」

「あ、うん・・・。」

ドライバーをセットして、メダルを入れる。

「変身っ！」

【イタチ！キツネ！カエル！イ！キール！イキルイ！キール！】

変身し、構えをとる。

「悪いけどさっさと決めるぜ！」



【スキヤニングチャージ！】

カエルの足で大ジャンプする。

あゝこえっ！

そこからヤミーに向かって3つの丸いゲートができる。

それをくぐっていくたびにエネルギーがたまり・・・

「はああああああ！おおおりやああああああ！」

両足でキックを放ち、爆発した。

うん、結構な量あるな。

「まあ125枚には届かないけどね。」

沙良、希望をぶち壊すな・・・。

帰り道

「すっかり遅くなっちまったな。」

辺りはもう暗い。

「そうだね。」

「私は夜行性なので夜のほうがいいですが。」

そっぴやそっぴったな。

すると、空音が住んでいるマンションに着いた。

「では、私はこれで。」

ぺこりとお辞儀してくる。

「うん！またね〜！」

「今度家来たら、好きなもの作ってやるよ。何がいい？」

まあ、ベルト作ってもらった御礼はしなとな。

「そうですね〜・・・考えておきます！」

楽しそうな笑顔でそう言う。

「そっか。」

「じゃあね〜！」

俺と沙良はまた歩き出した。

俺達からは見えなかったが、そのときの空音の顔は少し寂しそうだっらしい。

テマリーのメダル  
ジャッカル×2  
キツネ×2  
オオカミ×1  
イタチ×1  
カエル×1

## 第16話 バカとテストと新装備（後書き）

今回も次回予告はなしです。

オーズが放送されないところも困る・・・。

## 長編と予告とディケイド編（前書き）

ディケイド編の予告です。

## 長編と予告とディケイド編

勇樹

「なんだこいつら!？」

沙良

「倒しても倒してもきりがない!」

アंक

「メダルが出ないだと!？」

映司

「どうなってるんだ・・・?」

突如現れる不死の生命体、アンデッド。

さらに

沙良

「優花ちゃんが2人!？」

優花

「「優花は私だよ!」」

増え続けるワーム。

??

「ギ、ギギガ、ゲゲジジル。」

勇樹

「あんた何言つてんだ?」

グロンギの出現。

さらに

【ティーレックス!】

映司

「人間が怪物に!？」

出回るガイアメモリ。

映司

「この世界はどうなってしまったんだ……?」



そのとき終結するライダー達。

アंक

「何者だ！お前……。」

???

「通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！」

【カメンライド……ディケイド！】

???

「変身！」

???

「アンデッドは俺が封印する！」

勇樹

「あんたは？」

???

「剣崎、一真……ヘシン！」

????

「さあ、行くよ！相棒。」

????

「ああ。ハードボイルドに決めるぜ！」

????.???.

「「変身！」」

集う、15人のライダー。

勇樹

「俺達は最初から最後までクライマックスだぜえ！」

そして登場する、謎のライダー。

「こつちだ……。」

仮面ライダー〇〇〇外伝「仮面ライダーテマリ」  
ディケイド編、随時スタート！



## 長編と予告とディケイド編（後書き）

うわカオス。

一応平成主役ライダーだけ出す予定ですが、こいつ出して〜！というのであれば言うてください。（橘さん出して〜！とか）善処します。

ですが昭和ライダーは無しで。RXとか来たらそこでゲーム終わるんで。

第17話 ボクサーと左手と鳥ヤミ（前書き）

沙良

「あれ？」

勇樹

「どうした沙良？」

沙良

「こないだ作ったドライバーが無いんだよ。」

勇樹

「あゝ、あのセル125枚の奴が。別に無くても良いんじゃないの？」

沙良

「だめだよ！あれないと私が変身できないんだから！」

勇樹

「それも含めてもう1度言う。べっつに無くてもいいじゃないか！」

誰か持って行きました？（笑）

さて、しばらくは空音ファン（いるのか？  
お待ちかねの空音編に入ります。

まあ今回は出番少ないですが。

## 第17話 ボクサーと左手と鳥やミィ

今日のクスクシエはスペインフェスだ。

なんでも、怪我で引退するボクサーを励ますため、貸切になっているらしい。

で、俺、沙良、空音、優花、映司さん、比奈姉、後藤さんで忙しくしているわけだが……。

ガチャン！

立てていた焼き物が壊れた。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああゝすいません……。」「

「いえ、怪我とかありませんか？」

「あ、はい……。」「

映司さんと比奈姉、こういうときの対応手馴れてるなあゝ。

その後は、片付けまでなにもなかったのだが。

「惜しいわね。岡村さん。怪我が治ったら復帰すれば良いのに・・・」。

知世子さんのその発言に

「怪我だけじゃないですよ彼。多分パンチドランカーです。」

後藤さんが答える。

「パンツドロボー？」

「なんだってえ!？」

俺の聞き間違いに映司さんが大きくリアクションする。

「パンチドランカーだ!強い衝撃を受けて、脳に障害が残る病気だ。手先に震えが出たり・・・さつきみたいにふらついたり。」

なるほどなあ・・・。



「聞いたことあります。酷いと一生治らないって……。」

空音が知ってるとは驚きだ。

その後しばらく片づけをしていると

「はい後藤です。」

後藤さんが電話に出た。

そして

「ヤミーだ。」

小声で俺達に言った。

沙良と目配せをして、ヤミーの出た場所へと走った。

「あれ？映司さん、アニコは？」

「それがないんだ！どこいったんだよ……。」

このクソ大事なときに……。

伊達さんも合流したところで、まだ白ヤミのヤミを見つけた。

そして上のほうにアニコがいた。

「アंक！お前1人で行くなよ！」

映司さんのその言葉にもどこか遠くを見つめるだけだった。

あいつなにやってんだ？

「っと、今はそんな場合じゃねーか！沙良！」

「うん！」

沙良からメダルを借りる。

「アंकメダル！」

映司さんもアankoが投げたのをキャッチする。

「変身っ！……」

【タカ！トラ！バッタ！タ！ト！バ！タトバタ！ト！バ！】

【イタチ！キツネ！カエル！イ！キール！イキルイ！キール！】

パカッ

3人同時変身をした後、ヤミーが成長した。

その姿は、青いオウムのようなだった。

オウム！？

「な！？」

「うそ・・・！」

俺と沙良は驚きを隠せない。

「ほっ！随分派手になったねえ〜！」

伊達さんある意味すげ〜・・・。

「鳥の・・・ヤミー！？」

「まさか・・・あいつの！？」

映司さんと後藤さんがアンコを見る。

アソコ本人はただヤミーを睨むだけ。

「なになに？みんな鳥苦手？ぼーっとしない！」

伊達さんの言葉で我に返る。

「来るぞ！」

ヤミーの火炎を避け、キツネソードを構える。

「くっそ、あちーんだ、よ！」

快調に俺と映司さんで斬り付けていく。

「キエア！」

「ぐっ！」

くそ、威力は高いな……。

だけど！

「おっしゃあ！ブレストキャノン！」

さっきから溜めてたブレストキャノンを伊達さんが放とうとする。

が、ヤミーは親を連れてどこかに飛び去ってしまった。

「おおっと！」

危うく人を打つ所だった伊達さんは、無理やり打つ方向を変えた。

俺達は変身を解除し、襲われた人に事情を聞いた。

「う、腕が……！」

よくみると、腕がさびたように動かなくなっている。

「なんだよこれ……!?!」

「多分、あのヤミーの能力。」

沙良、そんなぐらゐ俺だって分かるぜ。

向こうでは映司さんとアンコと後藤さんでもめてる。

まずはこの人を安全なところまで運ぶのが先でしょ！

俺はその被害者に肩を貸し、病院へと運んだ。

別の日

再び沙良がヤミの気配をキャッチし、  
今度は空音も加えてヤミ  
の元に向かった。

飛べる奴がいたほうが良いからな。

現場では、すでに伊達さんが戦っていた。



「変身っ！」

【イタチ！キツネ！カエル！イ！キ！ル！イキルイ！キ！ル！】

「おりゃああ！」

ヤミーを斬り付ける。

「クエア！？」

空音もグリッド形態になって戦う。

すると、ヤミーが顔に手をやり

「はぁ！」

火炎を放ってきた。

「やべっ！」

沙良の方に向けってる。

「ぐあああああ！」

俺と伊達さんは沙良と後藤さんを庇って全部受けてしまう。

「がはっ……！」

「勇樹！しっかりして！」

バカ！近づいたらあぶねーだろ……。

「大丈夫だ……。下がってる。」

沙良を無理やり下がらせる。

すると

「変身っ！」

【タカ！クジャク！コンドル！タアアアジャアアドルウウウ  
！！】

タジャドルコンボになった映司さんが走ってきた。

「はああ！」

火炎を連射しながら走っていく。

あれ？

「映司さん！炎と炎って、効果はいまひとつじゃないんですか！？」

「あ！確かに！」

今きづいたんかい！

「でも、アंकがこれでっ！」

おいポケアンコ！なんでタジャドルなんだよ！

「は！」

ヤミーと映司さんが飛ぶ。

「私も行きます！」

空音も飛び上がる。

しばらく空中戦が続くが、ヤミーの火炎弾が映司さんと空音に直撃する。

「うわぁ！」

「きゃぁぁ！」

二人が落下する。

「くそ！」

カエルレッグの力で飛び上がり、二人を抱えて着地する。

てか落下？

「クエア！」

ヤミーが火炎を放射してくる。

「「うあああああ！！」」

空音をかばったからかなりのダメージが……。

「勇樹！」

「野朗！」

伊達さんがバースバスターでセルバーストの構えをするが、直前でアンコが邪魔をする。

「アンコ！お前！」

そのままどこかへ飛び去るアンコ。

「後藤ちゃん！煙幕！撤収だ撤収！」

後藤さんがバースバスターで煙幕を放った隙に、伊達さんが映司さんを、沙良と空音が俺に肩を貸す。

そして物陰に来たとき、アンコがどこかへ行ってしまった。

「アンク！？アンクー！！！」

映司さんが必死に叫ぶ。

「アンクーーーー！！！！！」

その声はかなり長く長く響き渡った。

テマリーのメダル  
ジャッカル×2  
キツネ×2  
オオカミ×1  
イタチ×1  
カエル×1

## 第17話 ボクサーと左手と鳥ヤミ（後書き）

次回、仮面ライダーテマリー！

伊達

「奴だってグリードの1人なんだ。戦うことになってもいいのか？」

映司

「あいつとは、最初からそういうことになってます。」

空音

「貴方も、私達を斬れますか？」

勇樹

「お前らがこの星を泣かせるなら、俺はお前らを切る！」

空音

「裏のグリードの掟、忘れたんですか？」

テルス

「ゲゲッ！そんなもん最初から覚えてねーよ！」

次回、【約束と決意と再戦】

いよいよこの小説の裏テーマが出ました。

「大切な人を、貴方は斬れますか？」



## 第18話 約束と決意と再戦

仮面ライダーテマリ、前回の3つの出来事！

一つ、沙良達の作ったドライバーが行方不明になる！

二つ、突然現れたヤミーは、アंकと同じ鳥属性だった！

三つ、アंकは、ヤミーを庇いどこかへ行ってしまった！

「いででででででで！」

「我慢する！」

沙良と空音の二人を庇ったせいで、俺の体はボロボロだ！

そんな訳で、優花に手当してもらってる。

沙良は申し訳なさそうにこっちを見て、空音は何かを考えている様だった。

「日野さん。」

空音が口を開く。

「さっきのアंकもそうでしたが、私達は一応グリッドです。いつ貴方を殺そうとしてもおかしくはありません。人を襲わないとも限りません。映司さんの方も、オーズに副作用が無いとも言いきれません。そんなとき、貴方は私達を斬れますか？」

いきなり物騒なことを言ってきた。

「何言っただか……。」

俺があきれながら言うと

「これは真剣な質問です。」

確かに目は真剣だ。

「お前らがもし誰かを殺そうとするなら、俺はお前らを斬るよ。」

俺も真剣に返す。

しばらく目を見つめられる。

何か恥ずかしいんだが……。

「それが聞けて何よりです。」

空音の表情が少し緩む。

「沙良、痛いんだが……。」

さっきからメリメリって音がするまで腕をつねってくる。

「ふんっ！」

もう良くわかんねえな！

学校

昼食中

「えー！？あのドライバー無くなっちゃったの！？」

漣、少し落ち着け。

「でも、何で無くなっちゃったの？」

「知らねーよ。沙良の管理能力は信用できねーからな。」

あいつすぐ物なくすんだよな。

んで、例によって空音は音楽室か。

## 音楽室

）

また例によってダブルアクを弾いてるよ。

しばらく黙って聴いてると、ようやく弾き終わった。

だが、その顔は少し辛そうだった。

「空音？大丈夫か？」

心配になって声をかける。

その俺に一瞬驚いた後、

「いえ……大丈夫です……。」

全然大丈夫そうじゃなんだが……。



別の日

学校もバイトも休みだったので、久々にゴロゴロしていると・・・

「勇樹！あのヤミーが出たよ！」

この布団でぬくぬくしてる至福の時間をよくもー！

「行くぞ沙良あ！あの駝鳥！ボロクソにしてやらあ！」

「う、うん……。後、あいつはオウムだよ？」

「どっちでもいい！待ってる鶏やろ！」

「だからオウムだって！」

途中で空音も合流し、3人で走った。

どこかのボクシングジムに着くと、すでに伊達さんと後藤さんがいた。

「伊達さん！ヤミィは！？」

「だめだ、逃げられた。」

くそ！どこ行きやがったんだよ！

奥の方を探しに行くが、全く気配が無い。

さっぱりだなあ。

戻ると、映司さんがふらつきながら伊達さんと話してる。

「止めとけ！ヤミィは俺達で当たるから、お前は休んでろ！」

伊達さんが映司さんを止めようとする。

「嫌です！俺の場合、じっとしてる方が体に悪いんで。」

それでも出ようとする。

その肩を伊達さんが掴む。

「奴だってグリードの1人なんだ。戦うことになってもいいのか？」

その言葉に、映司さんは不適に笑って

「あいつとは、最初からそういうことになってます。」

そう言って出て行ったので、慌てて俺も映司さんを追った。

外でもうライドベンドー用意してるよあの人！

走り出す前に、ライドベンドーの後ろに飛び乗った。

「え！？ちょ勇樹！？」

「私達も追いましょー！」

そう言ってグリッド形態になる空音。

「っ！空音ちゃん！？その姿・・・・・・・・？」

顔と翼しか復活していない。

「今は気にしないで下さい。」

そのまま飛び去った。

あ！アニコが押されてる！

ヤミーをメダジャリバーで斬りつけ、アニコから遠ざける。

「貴様！邪魔をするな！」

「うっせー！アヒルがごちゃごちゃしゃべってんじゃねーよ！」

しばらく変身しないで戦っていると

「変身っ！」

【タカ！トラ！バッタ！タ！ト！バ！タトバタ！ト！バ！】

映司さんが変身した。

「アンコ！俺にもメダル貸して！」

「は！誰が貸すか！」

くあゝ！ムカツクゝ！

「んゝ！じゃあセル60枚！」

「100だ！」

「60！」

「100！」

「60！」

「100！」

ギャーギャー言い合った結果、セル85枚で落ち着かせた。

「変身っ！」

【シャ、シャ、シャウタ！シャ、シャ、シャウタ！！】

真っ青なコンボになる。

「おっしゃ！・・・ってヤミーどこ！？」

やべー見失った！

「おいアンコ！ヤミーどこやっていねーし！」

完っ全に置いてかれた！

「置いてくなよバカヤロー！」

そう吼えて、ヤミーを探して走った。



あ、いた！

もう伊達さんやら沙良やら集合しちゃってるよ。

「あ、勇樹！どこ行ってたの！？」

「聞くな・・・・・・・・。」

鞭を振り回し、ヤミーを攻撃していく。

「映司さん！少し休んでて！」

疲れきってる映司さんを一旦下がらせる。

「はっ！」

「ぐおっ！」

ヤミーを順調に痛めつけていく。

「くられ！」

【スキヤニングチャージ！】

大きく飛び上がり、鞭をヤミーに絡み付ける。

そして足が8本に増え、それらが纏って回転する。

「はああああ！おおりやああああ！！」

ヤミーの体を貫き、着地する。

「お、おおお！？」

フラっとして変身が解かれる。

反動もでかいんだな・・・。

「勇樹！大丈夫！？」

「ああ。アンコ！サンキュー。」

アンコにメダルを投げ返す。

無事ヤミーを倒し、家に帰ろうとしたが、空音がない。

「沙良、空音の奴どこ行つた？」

「うん、何かこの辺に用があるって言ってたけど・・・？」

沙良も詳しくは知らないようだ。

なんだろう？何か嫌な予感がする。

「沙良、空音を探して帰ろつ。」

「うん！」

s i d e  
o f f

どこかの人気の無い所。

「やっと見つけましたよ。テルス！」

空音がテルスを睨みつける。

「ゲゲッ！自分のメダルを落とすバカの登場じゃねえか！」

テルスは空音のコアメダルを6枚見せる。

「私のコアを取り込んでくれたほうが、場所は分りやすいですからね。」

まあ体はだるかったですけど、と続ける空音。

「貴方の・・・裏のグリードの掟、忘れたんですか？表には鑑賞することはできないはずですよ？」

「ゲゲッ！そんなもん、最初っから覚えてねーよ！」

その言葉に、空音は一つため息をつき

「では、制裁を下します。」

「ゲゲッ！できるもんならやってみろ！」

二人の戦いが始まろうとしていた。

テマリーのメダル  
ジャッカル×2  
キツネ×2  
オオカミ×1  
イタチ×1  
カエル×1

第18話 約束と決意と再戦（後書き）

次回、仮面ライダーテマリー！

勇樹

「お前には、絶対に負けねー！」

テルス

「ゲゲッ！笑わせるな！」

空音

「どっちのコアが多いか、分りますよね？」

沙良

「空音ちゃん・・・？」

勇樹

「うあああああああ！！！」

次回、【空音とテルスとドラゴン】  
お楽しみに！



第19話 空音とテルスとドラゴン（前書き）

重っ 苦しい・・・。

今回はついに・・・！

## 第19話 空音とテルスとドラゴン

仮面ライダーテマリ、前回の3つの出来事！

一つ、怪我の手当てを受けている勇樹は、空音からの問いに自身の決意を告げる！

二つ、アंकからメダルを借り、ヤミーを撃破！

三つ、空音は一人、テルスと対峙していた！

「はぁ．．．．はぁ．．．．。」

さすがにコアの枚数の差が出てきますね．．．。

相手は8枚＋、此方は3枚．．．。

「ゲゲッ！どうした〜！？もう終わりか！」

「そうですね。私はもう終わりかもしれません。でも．．．．。」

まだ、日野さんがいますから・・・！

勇樹 side

「裏の、グリード？」

走りながら沙良が教えてくれた。

「そう、空音ちゃんや、師匠、テルス達のことをそう呼ぶの。」

「なんで裏なんだ？」

「テルスがね、昔一人の人間を封印したの。自分の目的の妨げにな

るからって。

それで罰として、表舞台に出ることを禁じられたの。でもそんなのにあいつがすぐ従う分けない。だから師匠達は、見張りとして自ら裏のグリードになったの。あいつに制裁を下せるように・・・。」

ま、それ以外にも色々あるんだけどねと続ける沙良。

しばらく走ると、空音に止めを刺そうとしているテルスがいた！

「空音！」

慌ててテルスに突っ込み、蹴り飛ばす。

「ゲゲッ!?!」

少しよろめく。

「おらぁ!」

殴り倒す。

「空音ちゃん、大丈夫!?!」

おいおい、よく見りゃなんだよそのカッコ・・・。

「っと!考え事してる場合じゃねえな!沙良!」

「うん！」

ドライバーにメダルをセットする。

さっきの疲れがあるけど、これなら！

「変身っ！」

【ジャッカル！キツネ！オオカミ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャッキオオ！】

そう！ジャッキオオコンボの回復力なら、まだ戦える！

「うりゃあ！」

キツネソードを振り下ろし、テルスを斬りつける。

「ゲゲッ！図に乗るな！」

右手から炎を出し攻撃してくる。

「うあっち！」

慌てて後退する。

だがそれより早く、

「ゲッ！」

炎を纏った蹴りを放ってきた。

「うあああ！」

大きく吹っ飛ばされる。

「勇樹！」

「日野さん！」

いてててて……。

こいつこの前よりパワーアップしてんな……。

「ゲゲッ！相変わらずザコだな！」

「うるせんだよ……！」

つつても、結構こたえるな……。

どうすりゃいいんだ……？

沙良 side

どうしよう。。。。

このままじゃまたテルスにやられちゃうよ。。。。

「沙良。。。。」

空音ちゃんが小さく声を出す。

「なに？空音ちゃん。」

「今から私があいつの動きを封じます。そしたら、何が何でも日野さんに止めを刺させてください。」

え！？それって・・・まさか！

「だ、ダメだよ空音ちゃん！そんなことしたら・・・！」

「今は、これしか手が無いので。」

そんな・・・。

次の言葉を言う間も無く、空音ちゃんはテルスに向かって走った。

「ゲッ！？」

そして背後に回り、自身をメダル化してテルスと同化していく。

「ゲゲッ！？貴様、何を！？」

「決まってるじゃないですか。一体化して、貴方の動きを止めます。」

「ゲゲッ！お前の自我が残ると思うのか？」

「貴方の中には、私のコアもあります。どちらのコアが多いか、分りますよね。」

「ゲゲッ！？」

そして二人が融合し、巨大なドラゴンの様な姿になった。



「空音！」

「空音ちゃん！」

私と勇樹が叫ぶ。

『はやく、してください！私の感情も、いつまで持つかわかりません！』

空音ちゃん……。

「勇樹！止めを……。」

刺してあげて……。

勇樹 side

「勇樹！止めを……。」

何言ってんだ？

「んなことしたら！空音が死ぬんだぞ！分ってんのか！？」

「空音ちゃんが！どんな思いで、あいつと同化したと思ってるの？  
勇樹に託したんだよ！？」

沙良が泣き叫ぶ。

「勇樹が止めを刺すのを、空音ちゃんは望んでるんだよ！？その思いに、答えてあげてよ！」

でも……。

『ガアアアアア！！』

ドラゴンの様な怪物は、周りの建物を破壊し始めた。

「…………止める…………。」

『ガアアアアア！』

「止める…………。」

「勇樹！」

「やめろおおおおお！！！！」

【ワオオオオオオオオン！！】

また、メダルが吼えた。

【スキヤニングチャージ！】

【スキヤニングチャージ！】

2回スキャンする。

【ツインスキャン！！】

キツネソードに光が集まり、巨大な大剣になる。

「うあああああああ！！」

ドラゴンを顔面から切り裂いていく。

「ギャラクシーファング!!」

尻尾まで切り終えると、大爆発を起こし、メダルが散らばった。

s i d e  
o f f

変身を解除した勇樹と沙良は、爆発したところの真下に行った。

そこでは、体の所々がメダルになってきている空音がいた。

「空音!」

「空音ちゃん！」

勇樹と沙良が駆け寄る。

「はぁ・・・はぁ・・・ありがとうございます・・・。」

肩で息をしながら礼を言う空音。

「なんでだよ・・・なんで感謝されなきゃいけないんだよ！」

涙をこぼす勇樹。

「これで・・・あの子の封印も解かれます。」

ニッコリと笑う空音。

「沙良。」

「ん？なに、空音ちゃん・・・？」

「日野さんを、お願いしますね・・・。」

「うん・・・。」

声がうわずってはいるが、しっかりと沙良はうなずく。

「日野さん……。」

「なんだ……?」

涙をこらえながら勇樹は空音を見つめる。

「貴方が、自分の気持ちに気付くまでは……。」

そう言つて勇樹に手を伸ばす。

「私は、貴方が大好きですよ……勇……樹……。」

だが、その手は勇樹に届く前にメダルとなって足元に散らばった。

残っていたのは、空音のメダルと、少しのコアメダルだけだった。

「うあああああ!!!!」

勇樹の叫ぶ声が、辺りに響き渡った。

「ゲゲ・・・危なかった。」

少し離れた場所で、腹を押さえてよたよたと歩くテルスがいた。

「コアも大分もってかれたが・・・ゲゲツ、邪魔者が一人減っただけよしとするか。」

その存在に気付く者は、誰一人としていなかった・・・。

テマリーのメダル  
ジャツカル×3  
キツネ×2  
オオカミ×2  
イタチ×2  
パンダ×2  
クマ×1  
サンショウウオ×2  
サラマンダー×2  
カエル×2  
フクロウ×3  
コウモリ×3  
ミミズク×3



## 第19話 空音とテルスとドラゴン（後書き）

次回、仮面ライダーテマリー！

勇樹

「俺に、そんな価値あるのか・・・？」

沙良

「自分の価値は、自分で決めるものだよ。」

テルス

「ゲゲッ！なぜここが！？」

勇樹

「空音、見てろよ・・・俺の、変身っ！」

【フクロウ！コウモリ！ミミズク！】

次回、【価値と勇氣と空音コンボ】  
お楽しみに！

第20話 価値と勇気と空音コンボ（前書き）

前半が重過ぎる・・・。

今回は空音コンボが登場！

## 第20話 価値と勇氣と空音コンボ

仮面ライダーテマリー、前回の3つの出来事！

一つ、空音とテルスの戦いに、テマリーが割り込む！

二つ、ピンチに陥ったテマリーのため、空音は自らをテルスと同化させる！

三つ、テマリーは止めをさすが、テルスは生きていた……！

「はい、今日もお兄ちゃんお休みで……はい……はい、失礼します」

ゆっくりと受話器を置く。

そしてお兄ちゃんの部屋を見る。

もう何日も開いたところを見てない……。

「お兄ちゃん……。」

帰ってきたら突然泣き出して……

『俺の……俺のせいで……』

って、何回も言っ……

私も、何も出来なくて……。

「優花ちゃん？」

沙良お姉ちゃんが顔を覗き込んできた。

「大丈夫？」

「……うん！大丈夫！今日もお兄ちゃんの事、よろしくね？」

「う、うん……。」

今の私じゃ、お兄ちゃんの力にはなれないので・・・。

今はただ

「行つて来ます！」

祈ることしかできません。

勇樹 side

真つ暗な部屋の隅で、ただひたすら膝を抱えていた。

ガタガタ震える自分を抑えるために。

「俺は・・・俺は・・・」

また、守れなかった。

大事な人を・・・。

こんな俺を、好きでいてくれた人を・・・。

コンコン

ドアをノックする音が聞こえた。

「勇樹？今いい？」

声の主は沙良だった。

「ドアは開けなくていいから」

「・・・・・・・・分かった」

多分、気を使ってくれたんだと思う。

「何で、そんなに落ち込むの？」

「・・・・・・・・また、大事な人を守れなかったから・・・・・・・・」

あのときみたいに・・・・・・・・。

10年前

家族でホテルに来ていた。

すごく、楽しかった。

でも・・・。

異形の怪物が現れ、俺達を襲った。



はつきりとは形を覚えてない。

でも、おぞましいものを放っていたのは覚えてる。

「父さん！母さん！」

二人は俺をただひたすら庇っていた。

そして

「勇樹、強く生きてね……」

10階の窓から、放り投げられた。

「父さーん！母さーん！」

奇跡的に俺は無事だった。

よく覚えてないけど、誰かに助けられた。

それから、高い所が怖くなった。

俺が弱いせいで、大事な人を守れなかった。

「それって、勇樹のせいなのかな？」

「・・・ああ」

「それでもさ、勇樹はたくさんの人を救えてるじゃん。テマリーとして」

「テマリーとして、か・・・」。

「俺に、そんな価値あるのか・・・？」

「その人の価値は、その人自身が決めるものだと思う。だから私にはなんとも言えない・・・。けどね、これだけは言えるよ」

ほんの少し、顔を上げる。

「私は、勇樹以外テマリーの適任者はいないと思う。こんなに脆くて、

こんなに優しくて、  
こんなに一生懸命で、  
こんなに、かつこいいんだから……」

最後の方は、うまく聞き取れなかった。

「俺………」

「……早く、戻ってよ。いつもの明るい勇樹に……。勇樹  
が落ち込むの、空音ちゃんが望んでると思うの？」

声が少し震えてる。

「大事な人を守れなかったって言うけど、これから守っていけばいいじゃん……。失ったものはもう戻ってこないけど……。これから守れるものはたくさんあると思う……」

「これから……。守れるもの……」

「うん……」

何で、そんな簡単なことに気付かなかったんだろう？

いや、気付いてはいたのか。

ただ、それを認めちゃうと、守れなかったものが薄く感じちゃうと思っただけから……。

でも……

「悪い沙良、心配かけた」

ドアを開ける。

「勇樹……」

泣きそうな笑顔で俺を見ていた。

「ありがとな」

「どういたしまして」

どちらからともなく笑い出す。

昼過ぎ、優花が帰ってきたときは大変だった。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！あーん！！」

帰ってくるなり泣き出してタツクルだ。

「いめんな、心配かけて・・・」

「うん、うん、うん！」

晩飯は3人で仲良く食べた。

すると・・・

「勇樹、テルスが近くにいます！」

沙良の言葉に、ピクッと反応する。

「場所は！？」

「このマンションの、すぐ近く・・・」

「おっしや！優花、留守番頼むぜ！」

「うん、行ってらっしゃい！」

優花に見送られ、マンションを駆け下りた。

マンションのほとんどすぐ近くに、テルスがフラフラと歩いていた。

「見つけたぜ！テルス！」

「ゲゲッ！？なぜここが！」

「バレバレだよ！」



ま、そりゃそうだな。

「ゲゲツ！カナを殺した奴が！」

勝てないと判断したのか、挑発を始めた。

「確かに、空音は守れなかったけど……これから守れるものはある！」

ドライバーを装着する。

「いつも傍にいてくれた人や、  
兄妹のように接してくれた人、  
バイト先の人や、クラスの仲間、  
ずっと見守ってくれた町の人、  
なにより……」

ちらつと沙良を見る。

「目を覚まさせてくれた、大事な相棒を守るために！」

「勇樹……！」

メダルをセットする。

「空音、見てろよ・・・俺の、変身っ！」

【フクロウ！コウモリ！ミミズク！フウウクウウウコオオオズツ  
！！】

フクロウのように、尖った2本の角。

コウモリのような羽に、タジャスピナーの紫になった物。

そしてミミズクのような鋭い足先。

仮面ライダーテマリー、フクコウズコンボだ。

「ゲゲゲッ！？」

ゆっくりテルスを指差す。

「お前の罪を、清算しろ・・・！」

左手から紫の電気を帯びた光弾を発射する。

「ゲゲゲゲッ!？」

メダルが散らばる。

「はっ！」

翼を広げ、大きく飛び立つ。

その高さに、忌まわしい記憶が蘇る。

「俺はもう、何も失わない……全部守ってみせる！」

【スキヤニングチャージ!】

両足に紫の電気が走り、足先が長く鋭くなる。

そのままテルスに向かって急降下する。

「はあああああ！おつりやあああああああ！！」

「ゲゲッ！？」

キックが決まり、テルスが爆発する。

「はあ．．．．はあ．．．．」

着地して、変身を解く。

「勇樹、大丈夫？」

沙良が俺の肩に手を添える。

「ああ、平気だ」

メダルを拾い、家に戻った。

ベランダ

満月に、コウモリのメダルを重ねる。

「同じ空を見上げたとき胸の奥なにか目覚め」

いつも空音が弾いてた曲を口ずさむ。

横にいる沙良も一緒に歌い始める。

「「傍にいるよDouble Action」」

「俺は」

「私は」

「いつでも君の隣」

歌い終わると、ふと感じるものがあった。

「これって、空音のことなのかな？」

「分かんないけど、多分、そうじゃないかな？」

コウモリのメダルは、月明かりを受けて綺麗に光っていた。

テマリーのメダル  
ジャッカル×3  
キツネ×2  
オオカミ×2  
イタチ×2  
パンダ×2  
クマ×1  
サンショウウオ×3  
サラマンダー×3  
カエル×3  
フクロウ×3  
コウモリ×3  
ミミズク×3

## 第20話 価値と勇氣と空音コンボ（後書き）

次回、仮面ライダーテマリー！

勇樹

「おいおいおい！なんだよこいつら！」

アंक

「倒してもメダルが出ないだと！？」

沙良

「どうなっちゃってるの！？」

映司

「キリがない！」

勇樹

「人間に化けてるう！？」

次回、【不死者と擬態者とOhカオス】  
お楽しみに！

次回からはディケイド編！平成ライダーだけじゃなくあんな人やこんな人も出るので楽しみに！

そしてもう一つ！

何かいろんな人の見てうつすら思いました企画！

【勇樹と沙良の！仮面ライダーラジオーズ！】



というラジオもどき！皆さんどうでしょう？読みたいですか？  
読みたいって方はお知らせください！  
いない場合はボツとなります。

ではでは、感想等お待ちしてます！

第21話 不死者と擬態者とOhカオス（前書き）

いよいよディケイド編！

今回はディワールさんの所の光がちらつと登場！

## 第21話 不死者と擬態者とOhカオス

「ん？」

何かオレンジ色のUSBメモリの様な物を拾った。

Gって書いてある。

「なんだこれ？」

ガイアメモリなのは分かるよ？

まあ特にそのときは気にせずポケットに入れた。

いつも通り、バイトを終えて帰ろうとしていると

「きゃーー！」

どっかから悲鳴が聞こえた。

「今のは？」

「こつち！」

沙良の耳は頼りになるな。

・・・耳だけは。

「勇樹、何か言った？」

「イエナニモ！」

心の声まで聞こえるのか・・・。

自重しよう。

走っていると、一組の親子がカマキリみたいな奴に襲われてた。

「勇樹！」

「おう！変身っ！」

【イタチ！キツネ！カエル！イ！キール！イキルイ！キール！】

イキルコンボに変身し、カマキリもどきをぶっ飛ばした。

「早く逃げて！」

親子を逃がし、そのヤミーと対峙した。

「勇樹、そいつヤミーじゃない！」

「は！？どういうことだよ！」

「分かんないけど、メダルの気配がしない・・・」

なんでだ？ヤミーじゃないとすると、一体・・・？

そう考えていると、クモみたいなのと戦いながら映司さんがやって

来た。

「映司さん！そいつらヤミーじゃないそうです！」

「勇樹！なるほど・・・だからメダルが出ないのか・・・」

しばらく戦っていると、ヤミー（偽）のベルトがカシャツと開いた。

それに気付かず

【スキヤニングチャージ！】

「はあああああ！おっりやあああ！」

イキルキックをぶちかました。

が、何とビックリ倒されなかった。

「な！？」

「どうなってるの！？」

驚きを隠せないどころの騒ぎじゃない。

俺達が困惑していると

【ファイナルアタックライド・・・ディディディディケイド！】

という音と共にカードの3Dが現れ、ヤミー（偽）を倒した。

そこには、バーコードみたいな顔をした仮面ライダーが立っていた。

「あんたは？」

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ！」

そう言うと共に、もう一体の方も倒した。

俺達は変身を解除し、さっきのバーコードの人に詰め寄った。

「で、あんた結局なんなんだよ！？」

「まあまずは記念に1枚」

首にかけたカメラで俺と沙良を撮る。

「いや、写真はいいから説明してくれよ！」

「面倒だ・・・」

くあり！この人めどくせう！

「土君！ちゃんと説明してあげてください！」

この人の保護者みたいな人が来て、つかさ？つて人の首に指を突き刺した。

「笑のツボ！」

「はっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ……！」

その技を食らった途端、狂った様に笑い出した。

「すみません、土君がまたご迷惑おかけして……」

「あ、いえ、俺たちの方こそ助けてもらいましたし……」



映司さん、こつこつときの対応は素早いよね。

ってまたてって……他のところでも迷惑かけたのか？

「とりあえず、一旦来て下さい。」

そう言われてその人に付いて行った。

たどり着いたところは、本来ならクスクシエがある所だった。

そう、本来なら。

「「「ええ〜〜〜〜!?」「」」

クスクシエがあったところに、光写真館という建物が立っていた。

「それも含めて、今から説明します」

つてな訳で説明を受けた。

さっきの人は門<sup>かどやつかさ</sup>矢士。いろんな世界を旅してるらしい。

で、今説明してくれてるのが光<sup>ひかりなつみ</sup>夏美さん。

その隣にいる優しそうな人が小野寺ユウスケさん。仮面ライダークウガというのに変身できるらしい。

最後に、今プリンを持って来てくれたのが光<sup>ひかりえいじろう</sup>栄次郎さん。さっきの夏美さんのお爺ちゃんらしい。

んで、今この世界がおかしなことになっていて、そのせいでいろん

な世界の怪人達がここに集結しているらしい。

士さん曰く、「どうせ犯人は鳴滝だろ」とのこと。

鳴滝というのは、「おのれデイケイドゥ！」が口癖のしつこい人らしい。他は謎だらけだそうだ。

「あれ？じゃあ優花大丈夫か？」

不安になった俺と沙良は、マンションへと走った。

日野家

「優花！」

家に入ると、おかしな光景が広がっていた。

「「あ！お兄ちゃん！」」

「ゆ、優花ちゃんが二人い〜！？」

どうなってるんだ？

「「優花は私だよ！！！」」

お互いに自分を指差す。

「ど、どっちが本物なの〜！？」

「沙良、俺に任せろ」

1歩前に出る。

「勇樹、分かるの？」

「ま、伊達に兄妹やってねえぜ？」

軽く優花を指差し、この一言を言った。

「ゴキブリ……」

「へっ？」

「きゃあああああああ！！！！！」

リアクションに大きな差が出た。

「あっちの悲鳴を上げたほうが本物だ」

悲鳴を上げなかったほうを睨みつける。

そいつは観念したらしく、緑のサナギみたいな姿になって窓から飛び降りた。

「さてこの！」

一気にマンションを駆け下りる。

「沙良！」

「はい！」

「変身っ！」

【イタチ！キツネ！カエル！イ！キ！ル！イキルイ！キ！ル！】

「はっ！」

キツネソードを握り、そのサナギを斬りつけた。

すると

「シャアアアア！」

何か蛇みたいな姿に変わった。

「あん？」

動きを止めた瞬間、そいつが消えた。

「どこ行っくあっ！」

どこからか攻撃される。

「どうなっ  
てがはっ！」

また攻撃される。

見えないくらい高速で移動してるのか……。

「だったら沙良！ジャッキオだ！」

「え！？……あ、なるほどね！」

沙良からジャツカルとオオカミのコアメダルを受け取る。

【ジャツカル！キツネ！オオカミ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャッキオオ！！】

ジャッキオオコンボになり、すぐにスキャンする。

【スキャンングチャージ！】



耳を澄ませ・・・・・・・・。

聞こえる、あいつの動きが・・・・・・・・。

「そこだああああ！！！」

キツネソードを真後ろに振り、蛇もどきを真っ二つに切り裂いた。

「ふい・・・・・・・・」

「お疲れ様」

変身を解除し、安全面を考えて優花を光写真館に連れて行った。

s i d e  
o f f

その頃、どこかの森で灰色のカーテンが出現した。

そこには、9歳前後の少年が立っていた。

「あれ？ここは・・・？」

その少年、  
「風上<sup>かざかみ</sup>光<sup>ひかり</sup>」の手には、  
色の無い4枚のカードが握られていた。

## 第21話 不死者と擬態者とOhカオス（後書き）

すみませんデイルドさん、勝手にカード増やします・・・。  
まあFFRとFRだけです。

今回は次回予告は無しです！

## 第22話 Wが来たよ！／勇樹変身不能！？（前書き）

今回も光がちょこつと登場！

。後ディワールドさんすみません、ちらつと本編に名前出てます・・・。

## 第22話 Wが来たよ！／勇樹変身不能！？

仮面ライダーテマリー、前回の3つの出来事！

一つ、突如街中に、アンデッドが出現！

二つ、クスクシエが光写真館に変わり、ディケイドこと門矢士が現れた！

そして三つ！同じ頃、灰色のカーテンから謎の少年がやって来た！

【スキヤニングチャージ！】

「二連！爆裂暴風拳！！でりゃああああ！！」

「ググッ！？」

ドコ ……

くっそ！何体いるんだよ！？

虫みたいなの次は良くわかんない言葉しゃべる奴が来たし！

鏡から出てきたり人間が怪物になったりなんかでかい蟹だったりガラスみたいに割れたり・・・。

「もう、良くわかんねえな！！！」

勇樹君26の名言その1

『もう、良くわかんねえな！』

・・・何やってんだ俺？

「勇樹！真面目にやってよ！」

「ういっす！」

すると、後ろから機械音声が聞こえてきた。

【アイスエイジ！】

「あん？」

振り返ると、アイスエイジドーパントが立っていた。

「何でドーパントがここに！？」

驚くが、今はそれどころじゃない……。

「沙良！テルスコンボで行くぞ！」

手を出すか、返事がない。

「沙良？」

振り向くと、そこに沙良はいなかった。

「な！？」

「聞こえるかテマリーー！！」

ビルの陰から、タジャドルの出来損ないみたいな顔した怪人が出てきた。

「沙良あー！」

そいつが沙良の口を抑えていた。

「きたねえ手で、沙良に触れるなああああああ！！！！」

大地を踏みしめ突っ込むが、沙良を前に出されて止まる。

「メダルを全て出せ。さもなくば……」

ノコギリの様なものの付いた盾を沙良の首元に近づける。

「くそっ……」

変身を解除し、メダルを外していく。

「んー！んんー！」

沙良が何か言おうとしてるが、口を抑えられているためしゃべれない。

「ほらよ」



メダルをそいつの方に投げる。

「確かに受け取った」

そう言っでどこかに行こうとする。

「なっ！待ちやがれ！」

俺が走り出すが、その間にアイスエイジドーパントが立ち塞がる。

そしてタジャドルの出来損ないが高らかに叫ぶ。

「我はアポロガイスト！この娘を花嫁とし、世界で最も迷惑な奴になっでやるのだ！」

バカなのこいつ？

っ  
てか！

「花嫁だと！？ふざけてんのかてめえ！」

俺が怒鳴り散らす。

「文句があるなら大シヨツカー本社に来るんだな」

そう言っ  
て飛び去ってしまっ  
た。

「待てこらー！」

追おうとするが、アイスエイジドーパントに吹っ飛ばされる。

「がはっ……」

生身なため、かなりのダメージを負ってしまう。

「ちい……」

ドーパント。

あの人たちがいれば違っただけだなあ……。

再び俺にドーパントが向かってきたとき、何者かがそいつをバイクで轢いた。

「大丈夫か？勇樹」

その男はヘルメットを外した。

その後ろに乗っていた少年も、ゆっくりと降りた。

「翔太郎さん！」

左翔太郎。

俺が前に住んでいた風都でお世話になったことがある。

別名……

「あれ？この子だれっすか？」

その前に後ろに乗ってた少年が気になる。

「あ？さっき拾ってきた」

「風上光です。よろしくお願いします」

ペコリと律儀にお辞儀してくる少年。

「はあ……。ってかこんな子供連れて来ていいんすか!？」

「まあ見てろ……」

そう言って翔太朗さんはドライバーをつけた。

光とか言う少年も白いドライバーをつけた。

「あれ？あれって……」

「行くぜ、相棒！」

どこかに翔太朗さんが声をかける。

【ジョーカー！】

そして二人が構えを取る。

「変身！！」

【サイクロン！ジョーカー！！】

【カメンライド・・・ディケイド！】

あ、やっぱあれディケイドライダーか！

光はディケイドに、翔太朗さんは半分こ怪人・・・もとい仮面ライダーWに変身した。

「『さあ、お前の罪を数えろ！！』」

翔太朗さんと、もう一つ別の声が聞こえる。

その相棒、フィリップの声だ。

「行くぜ！」

左手をスナップさせ、翔太朗さんと光が走り出した。

こんなときに、何もできないなんて……………。

拳を握り締める。

すると、俺の手の中に何かがあった。

手を開くと、1枚のぼやけたカードに1本のメモリがあった。

「これは……………」

じつと見てみると、機械音が聞こえた。

【ジョーカー！マキシマムドライブ！】

【ファイナルアタックライド……ディディディケイド！】

「はあっ！」

「『ジョーカーエクストリーム！！』」

二人の必殺技が決まり、アイスエイジドーパントのメモリが碎かれる。

変身を解除した二人と、一度光写真館に戻った。

その間光とはお互いに自己紹介をした。

s  
i  
d  
e  
  
o  
f  
f

その様子を、ビルの屋上からじつと眺める男性がいた。

「この世界に二人のディケイドが集結してしまった……。」「  
己ディワー」ぶるわぁ!？」

最後まで言い切る前に何者かに石を投げられた。

0 テマリーのメダル



第22話 Wが来たよ！／勇樹変身不能！？（後書き）

えゝ、嫌でしたら訂正します……。

次回、仮面ライダーテマリー

勇樹

「どうすりゃいいんだ……」

フィリップ

「彼にこれを貸したらどうかかな？」

勇樹

「変身っ！」

【ガイア！】

光

「ではこれで」

【フォームライド、テマリージャッキオオ！】

次回、【Gの力／決戦へ】  
お楽しみに！

## 第23話 Gの力/決戦へ(前書き)

予定変更し、ディケイド編を終わらせます。

## 第23話 Gの力/決戦へ

仮面ライダーテマリ、前回の3つの出来事！

一つ、メモリを使った怪人、ドーパントが出現！

二つ、沙良が、アポロガイストに連れ去られてしまう！

そして三つ、仮面ライダーWこと左翔太郎と、もう一人のディケイド、風上光が合流した！

光写真館

「.....」

沙良捕まっちゃったよ.....。

どうしようどうしようどうしよう……？

「まあ落ち着きたまえ、日野勇樹」

フィリップに指摘される。

「そうだぜ勇樹。ハードボイルドじゃねえぞ、そういつの」

「翔太朗さんが言いますか……」

「ああ？」

「なんでもねっす」

でもな、テマリーには変身できないし……。

「翔太郎、彼にこれを貸したらどうかな？」

一つのドライバーを出す。

「ロストドライバー？でも勇樹はメモリ持ってねえだろ？」

「ありますよ？」

「つてあるんかい！」

よう分からんが突っ込まれた・・・？

「おっしやすごいこ！マツハでいこ！もう全速力で行こう！」

「落ち着いてください勇ちゃん」

「勇ちゃん！？」

光よ、そのあだ名は何だ？

「え？勇樹だから勇ちゃんですけど？」

「・・・じゃあ優花は？」

「優ちゃん」

「同じじゃねえか！」

と、いう事をしていたら土さんが戻ってきた。

「なにしてたんすか？」

「ちょっと助っ人をかき集めてきた。さっさと行くぞ！」

それだけ言って行ってしまった。

「もうちょっと分かりやすく言って欲しかった……」

俺は映司さんの乗ったライドベンダーの後ろに乗り、大シヨツカーとやらがいる場所に向かった。

「待ってるよ、沙良……」

何もない広い所に来た。

「え？ここ？」

「良く来た、ライダーの諸君！」

あ、出来損ないタジャドル！

「おい！さっさと沙良を返せ！」

「この怪人達を倒せたらな！」

うっわっうじゃうじゃ出てきた……。

大体……150くらい？

「ま、気にしてらんねえな」

ドライバーを腰に装着する。

『変身っ！！』

7人分の声がする。

【【カメンライド……デイクライド！！】】

【サイクロン！ジョーカー！！エクストリーム！】

【タカ！トラ！バッタ！タ！ト！バ！タトバタ！ト！バ！】

【ガイア！】

俺はガイアのメモリで変身した。



全身オレンジのWといったところか。

武器として、巨大なハンマー（オレンジのドッグハンマー）を握る。

【アタックライド・・・オールライダー！】

大量の灰色のカーテンが現れ、中からいろんな人が出てくる。

「行け！」

できそこタジャの号令で戦闘が始まる。

もはや大乱闘。

「おらあああああ！！！」

重いハンマーを振り回す。

キツイ…………。

すると、ハンマーの下にメモリスロットを見つけた。

「これを入れてみるか」

【ブレイブ！】

ブレイブのメモリをセットする。

【ブレイブ！マキシマムドライブ！！】

「ブレイブストライク！！」

技名を叫んでハンマーを放り投げる。

うん、40体は倒したな。

だが、後ろにもわんさかいる。

「ちっ！」

【ガイア！マキシマムドライブ！！】

ガイアのメモリを腰のメモリスロットに入れる。

すると、右手がしなやかな鞭のような刃になる。

「フォトンエッジ！！」

横に刃を振るい、名前も知らない怪人達を切り裂いていく。

これならいける！

「待ってろ、沙良あ！！」

俺はそう吼えた。

「あれ？その声勇樹？」

「沙良いるじゃん！！！！！！」

ええ~~~~~！！！！！！？？？？

「ちょっ！お前なんでいんの！？」

「忘れてない？私グリードなんだよ？体をメダルにして隙間から逃げてきたんだよ」

おいおい追いおいおいおいおいおいおいおいおいおい！！！！

「俺の苦勞返せよ！！！！」

「あ、ごめん」

軽いなおい！

とりあえず変身を解除し、テマリードライバーをセットする。

やっぱこっちだな！

「変身っ！！」

【ジャッカル！キツネ！オオカミ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャッキオオ！！！！】

ジャッキオオコンボに変身すると、俺が握っていたカードが光る。

「勇ちゃん！」

仮面ライダーバーコードがこっちに来る。

「この声は、光の方のバーコードか」

「デイクイドです。でもって・・・」

【ファイナルフォームライド・・・テテテマリー！！】

「ちょっとくすぐったいぞ！」

「は？」

突然背中に手をつ突っ込まれる。

くすぐったいって言うより痒い・・・。

んで、右を見る。

全身ジャッカルメダルのテマリーがいる。

左を見る。

全身オオカミメダルのテマリーがいる。

自分を見る。

全身キツネメダルになつてゐる。

「「「はあああああ!!???.」」」

3人の俺が叫ぶ。

【ファイナルフォームライド、オールライダー!!!】

【ライジングマイティ!】

【シャイニング!】

【サバイブ！】

【ブラスター！】

【キング！】

【アームド！】

【ハイパー！】

【スーパークライマックス！】

【エンペラー！】

皆さんのお姿が変わりました・・・。

【タカ！クジャク！コンドル！タアアジャアアドルウウウ！  
！】

映司さんはタジャドルコンボになる。

その風を受けて、Wはサイクロンジョーカーゴールドエクストリームになる。

気がつけばもう怪人達は5本の指に入るほどしかない。



そして本家タジャドルを見て恐れをなしたのか

「貴様ら、一体なんなのだ!?!」

と、できそこんが言う。

「「通りすがりの……」」

『「二人で一人の……」』

あ!えつと……

「ゆ、勇気の……?」

「「『「仮面ライダーだ!」』」」

「おのれっえええええ!?!?!」

うん、お約束の負け台詞ご苦労。

【ファイナルアタックライド……オオオオールライダー!!--】

【ファイナルアタックライド……テテテテマリー!!--】

【エクストリーム！マキシマムドライブ！】

【スキヤニングチャージ!!】

全ライダーが飛び上がり、キックの構えをとる。

「はあああああああ！！！」

ダブルエクストリーム！！

「せいやあああああ！」

「「「おりやあああああ！！」」」

キックが決まり、大爆発を起こす。

「なあ、これ俺分裂した意味あった？」

「さあ？」

ライ！

変身を解除すると、いつの間にかライダー達は帰っていった。

「それじゃ、僕もこれで・・・」

光が色を取り戻したら5枚のカードを握って帰ろうとする。

「あ、ちょいまち！」

ポケットから饞別を渡す。

「これは？」

「明日のパンツ」

映司さんに教わった、旅に出る仲間を送るときのベストなアイテム！

・・・らしい。

「あはは…ありがとうございます・・・」

一瞬微妙な表情をして帰って行った。

そしてこっちも

「じゃあな、勇樹」

「翔太郎さんも、お元気で」

「でもいいのかい？このメモリを僕らがもらって？」

「まあ俺は使わないからな。二人が持つててよ」

「ああ」

「勇樹、次会う時は沙良ちゃんと進展してろよ」

「「なっ！？／＼／＼」」

な、何言つてんだよこの人！

「その反応！興味深い……ゾクゾクするねえ……」

「じゃあな！」

そう言つて行つてしまった。

最後に

「ほらよ」

士さんから写真を受け取る。

真ん中に俺と沙良がむすつとした表情で、でもその上にはぼやけているが大きく笑顔の俺と沙良が写っていた。

なにこれ？

気がつくと、光写真館はクスクシエに戻っていた。

「結局なんだったんだ？」

こうして、俺の良く分からない2日間が終わった。

別の所

鳴滝が灰色のカーテンに入ろうとしていた。

「己、またディケイドをしとめそこなった・・・。だが次の世界では・・・！」

灰色のカーテンに入ろうとしたとき、それと鳴滝の間に何者かが割り込んだ。

「貴様は!？」

「・・・・・・・・」

それに答えず、剣を構え・・・・・・・・。

「なっ!？」

鳴滝を、切り裂いた・・・・・・・・。



## 第23話 Gの力／決戦へ（後書き）

なお、光が持っていたのはFRジャッキオオ・タンク・サンマル  
FFAテマリーFFRテマリー、の5枚です。

次回、仮面ライダーテマリー

優花

「きゃ！」

沙良

「え？なんで！？」

勇樹

「あいつら、ついに優花を狙ってきやがったか！」

沙良

「どついうことなの？」

勇樹

「姉さん！！」

次回、オリジナル編、【標的と少年と姉】  
お楽しみに！

次回からオリジナル編に入ります！  
オース本編と違うところが出てくるかもしれませんが、ご了承ください。

## 第24話 標的と少年と姉（前書き）

いよいよオリジナル編に入りました！

前회가クソ回でしたが、今回以降は結構暗くなるかも・・・。

ですが見捨てないで下さい（笑）

では、どうぞ！

## 第24話 標的と少年と姉

「勇樹！」

「おう！変身っ！」

【フクロウ！コウモリ！ミミズク！フウウウクウウウコオオオオズッ！！】

空音コンボに変身し、ヤミーに攻撃した。

「おらあああ！！」

「ぐはっ！！」

そのクモの様なヤミーは一瞬怯んだ。

「だあああああああ！！」

「がああああ！！」

ラッシュを叩き込み、そいつを吹き飛ばす。

「沙良！一気に決める！」

「了解！」

沙良から4枚メダルを受け取る。

【フクロウ！コウモリ！ミミズク！ジャッカル！キツネ！オオカミ！カエル！ギガスキャン！！】

「はああああああ！！おりゃああああああ！！！」

「ぎゃあああああー！！！」

ヤミーが爆発し、メダルが大量に散らばる。

「最近多いね、ヤミー」

「ああ。しかも今までと違うタイプだな」

「クモ、ヘビ、アリ……ウヴァのに近いけど……しゃべれないもんね……」

そつ、ここ最近立て続けにヤミーが出現している。

そしてそいつらの進行方向にいつもあるのが……。

「今回は学校のルートだね．．．．」

そのとき優花がいる所だ。

おそらく優花を狙ってきたんだろう．．．．。

とうとう来ちまったか．．．．。

「でも何で優花ちゃんを襲うんだろうね．．．．？」

「え？あ、ああ．．．．さあな．．．．」

「．．．．勇樹、理由知ってるでしょ？」

「悪い、あいつが良いって言うまでは話せない．．．．」

「．．．．．分かった」

一応納得してくれたようだ。

「ちゃんと守んねえとな………」

俺の呟きは、空に吸い込まれていった。

別の日

「勇樹！またヤミーだよ！」

「場所は！？」

「このルート・・・クスクシエの西1k!」

「今度はクスクシエかよ!」

まずい、また優花のいるところのすぐ近くだ・・・。

「沙良!メダル!ここでジャッキオオになつて走つてく!」

「オツケー!」

メダルを受け取る。

「変身つ!!」

【ジャッカル!キツネ!オオカミ!ジャ!ジャ!ジャ!ジャ!ジャッキオオ!】

「おっしゃあ!」

全速力で駆け抜けた。

「それで全速力？私に負けてるじゃん」

「お前が早いんだよ！」

やべー！優花が出てきた！

「優花！すぐそこから離れろ！」

「えっ！？お兄ちゃん、何で！？」

「ヤミーがお前を狙ってる！」

「えっ！？」



「でも勇樹、私達から離れてヤミに襲われたら、もっと大変じゃない？」

「あゝ！つと、どうすりゃいいんだ！？」

すると、すぐそこにパンダのようなヤミが現れた。

「パンダだと！？」

パンダって、師匠の属性のヤミだろ！？なんで！

「分かんないよぉ！」

沙良もテンパってる。

「その答え、教えてあげようか？」

物陰から誰かが出てくる。

「誰だてめー？」

沙良を庇うように前に出る。

優花からも目を放さないように。

「あれ？君もしかして……？」

沙良は知っているようだ。

「ユーズ……いや、沙良さんって言った方がいいかな？」

「金太君？」

「こ、こんたあ？」

見た目10歳前後の少年は、こっちをじっと見てる。

「なるほど。確かに器に適した青年ですね」

俺を見て第一声がそれかよ！

「つて、それより何で師匠のがいんだよ！」

今はまだこちらを警戒している。

「決まってるじゃないですか。カケルさんがやられたからですよ」

「「なっ！？」」

俺と沙良は驚きを隠せなかった。

「な、何で師匠が！？」

「分かりません。以前会いに行こうとしたら、メダルと共にこれが・  
・・」

一枚の紙を見せる。

『SUBUTU』

と書かれていた。

「すぶつ?」

さすがにそのまんますぎるかな……?

「スブツ!」

「知ってんのか? 沙良」

「至上、最悪のグリード……」

「もしかしてそいつ……」

「うん。コブラ、ヘビ、クモの動物を模してる……」

まだそんな奴がいたのか……!

「今はその話は後回しですね」

金太がドライバーを装着する。

「え!?! ドライバー?」

「そうです」

そう言っでメダルをセツトし、左側についていたスキャナーを左手で握る。

「へんしん」

【ウシ・シカ・ウマ・ウ・ウ・ウ・ウシカウマ！】

他のドライバーよりも機械的な音が聞こえる。

そしてそいつはパンダヤミーを指差す。

「僕の邪魔を、しないでくれる？」

そう言っでヤミーに向かっていった。

「俺も！」

そう思っでいこうとすると、コブライのようなヤミーとハチのようなヤミーが現れた。

「ちっ！沙良！真ん中にコウモリだ！」

「オツケーー！！」

メダルを入れ替える。

【ジャッカル！コウモリ！オオカミ！】

コウスピナーから光弾を連射する。

「はあっ！！」

「ぐおっ・・・」

「ぬっ・・・」

「おりゃああ！！」

そのまま殴り飛ばす。

「てめえら！何で気付いた！優花のことに・・・！」

「・・・」

「そっぴゃしゃべれねえんだっ、な！」

くっ、2体を相手にするのは初めてだからしんどいぜ・・・。

気がつく、金太と背中を合わせるように構えていた。

「お前、何者だ？」

「終わったらゆっくり話します。今は・・・」

「だな・・・」

【ジャッカル！コウモリ！オオカミ！ギン！ギン！ギン！ギガスキ  
ヤン！！】

【スキヤニングチャージ】

二人ともスキヤンをして、必殺技を構える。

「はあああああ・・・！！」

同時に飛び出す！

「おつりやあああああ！！」

「ぜあああああああ！！」

俺の拳がヤミーに炸裂するが、ハチには避けられる。

その機動を生かし、沙良と優花の方に走っていった。

「沙良！」

「えっ！？きゃあ！」

沙良が吹っ飛ばされる。

そしてハチの針が優花に迫ったとき、俺は冷静さを掻いていて、こう叫んでしまった。



「姉さん!!」

テマリーのメダル  
ジャッカル×3  
キツネ×2  
オオカミ×2  
イタチ×2  
パンダ×2  
クマ×2  
サンショウウオ×3  
サラマンダー×3  
カエル×3  
フクロウ×3  
コウモリ×3  
ミミズク×3

## 第24話 標的と少年と姉（後書き）

次回、仮面ライダーテマリー！

沙良

「ねえ、優花ちゃんって……」

勇樹

「俺には姉さんがいた……」

金太

「この適合者を見つけないと……」

優花

「変身……！」

勇樹

「あいつは……」

次回、【正体と日野家と優花変身】  
お楽しみに！

金太の変身するライダーの名前募集してます！

第25話 正体と日野家と優花変身（前書き）

優花が変身します！

なのに今回は勇樹が変身しません！

どうなってんだ？

## 第25話 正体と日野家と優花変身

仮面ライダーテマリー、前回の3つの出来事！

一つ、突如優花を狙って出現するヤミー達！

二つ、そこに現れた謎の少年、仮面ライダーナイトこと黒月金太が現れる！

そして三つ、優花が襲われそうな瞬間、勇樹が叫んだ！

「姉さん！」

無我夢中だった俺は、その事に気付かなかった。

【スキヤニングチャージ！】

オオカミの足で急接近し

「おつりやあああああ！！！」

回し蹴りをはなってヤミーを倒す。

「はぁ・・・はぁ・・・」

息が上がったまま、俺は変身を解除した。

「・・・勇樹、ちゃんと説明してね？」

「優花、良いか？」

「ま、どっかの誰かさんがあんなこと言っちゃね・・・」

「すみません・・・でもその前に！」

金太を見る。

「まずはそっちな」

「分かりました」

俺たちは一度家に戻った。

日野家

「んで、お前はナニモンだ？」

「黒月金太。<sup>くろつき こんた</sup> 800年前は10歳だったので・・・810歳です!」

「ごめん、そこはどうでもいい」

「あ、すみません。えっと、何て言えばいいのかな?・・・あ、これ見てください」

自分の左腕を見せる。

「これ見て、何か気付きますか?」

「気付くって・・・?」

俺と優花でガン見する。

・・・なにもなくなか?

「ああ!」

「うおい!」

び、ビツクリシタヨ!?

「色が違う!」

「色？」

お！確かに！

右手は一般的、よりちょっと白いくらい。

でも左腕、特にひじから下にかけては濁った様な灰色になっている。

「この腕、グリードのなんです」

「ふえ！？」

「じゃあ、アンコみたいに、人間の体借りてんのか！？」

「いえ、確かにしゃべってるのは僕、金太自身の意味です。ですが僕はこのグリードに命を救われました。このグリードと一体化することによって生命を維持できてるんです。ですがそのせいでこいつは自我を失って……」

「仮死状態ってことか……」

「はい。僕の目的は、この子を完全復活させて、ちゃんと生きてもらうことです」



「でもそしたら、金太君はどうなるの？」

「死にます」

自分を殺すために戦ってるってのか・・・？

「後はまあこのドライバーの装着者を探すことですね」

1個のドライバーを見せる。

あれ？これって・・・？

「バース、ドライバー？」

なんていうか例えるなら金のバースドライバー・・・。

「バンクドライバーです」

「基本的にバースと同じだよ？」

沙良がようやく口を開いた。

「これの適合者を見つけることも、僕の目的の一つです」

「これは元々グリード用なんだけどね。装着者の体に、吸い付いたメダルを吸収させるの」

「セルメダルを……！」

一瞬優花と目を合わせる。

「んじゃ、装着者は優花で決まりだな」

「だね！」

「「え!?!」」

うん、お前らのリアクション正しい。

「ちよつ、ちよつと待ってよ！メダルを体内に入れるんだよ！？人間が耐えられる訳ないよ！」

「あゝもう！落ち着け！今全部説明するから！……優花が」

「押し付けないでよ！」

デスヨネ……。

「ん〜っと、どこから話すかな〜・・・?」

「家族関係からじゃない?」

「んじゃそこからで。寝るなよ!」?」

「分かってます」

「頑張ってみる・・・」

俺には姉さんがいた。

厳密には、双子の姉だ。

その人は優しかった。

まるで、花の様に……。

「花の様に、優しい？……まさか！」

「その人の名は……」

日野、優花。

「嘘ですよ！？優花ちゃんって、妹じゃないの！？第一年違うし！」

「最後まで聞け！」

10年前、家族が何者かに殺された。

そのとき、優花も殺されたんだ。

でも、死体は残っていた。

父さんと母さんが研究していた、命のこと……。

試作品の死者蘇生システムが残っていた。

使い方も分からず、俺は無我夢中になって優花を入れ、装置を弄った。

そのとき、その場になぜか落ちていたセルメダルが大量に吸い込まれていった。

後から知った話だが、それは人間の役に立つグリードを作るための装置だったらしい。

それから優花が再び目覚めるまで1年かかった。

目が覚めた優花は、全く変わらない姿だった。

1年空白があるため、そして一度死んでいると知っている人間がい  
たらまずいため、妹という形で過ごす事になった。

一番変わったのは、定期的にセルメダルを投入しないといけないことだ。

だが基本的にグリードは目覚めていない。

しばらくは研究所にあったセルメダルで足りたが、ここ最近で残りが少なくなってきた。

そこで、沙良に会った。

「もしかして、勇樹がテマリーになるのを、あんな簡単に承諾した理由って・・・」

「無論、優花の為だ」



思うと、俺の方がシスコンだったのかもな……。

「まあ簡単に言っちゃうと、私は一度死んだ人造生命体、ホムンクルスだってこと。セルメダルが無いと生きられないからそのドライバーは私が適任、っと」

簡潔にまとめちゃえばそういうことだな。

「……………」

沙良は不満そうな顔してる。

そのときの俺は知らなかった。

沙良に芽生えていた意思が、『人間になりたい』というものであったことに…………。

しばらく沈黙が流れる。

それを破ったのは

「勇樹！ヤミーが出たよ！」

沙良だった。

「おっし！優花初戦闘だ！」

「うん！」

「えっ！？いや、そんな簡単に・・・」

「気にすんな／気にしないで！」

「・・・」

「金太君、あの兄妹に何言っても無駄だよ」

「ですね・・・」

駅前

あ、クモみたいなの発見！

「よっしゃ！優花、いっけー！」

「クモとかやなんだけどな〜・・・」

ぐちぐち言いながらもドライバーを装着する。

そしてメダルを左手で弾く。

「変身・・・」

キャッチせず、そのままスロットに入る。

そしてダイヤルを回す。

パカッ

という音がして、優花の姿が変わる。

「ってまんまバースじゃねえか！」

具体的には銀の部分が金、緑の部分が赤だ。

「一応僕も……へんしん！」

【ウシ・シカ・ウマ・ウ・ウ・ウ・ウシカウマッ！】

金太も変身し、優花の隣に立つ。

「そついや、変身すると何で身長伸びるんだ？」

「さあ？」

馬鹿なことを話していると、どこからか屑ヤミーが大量に現れた。

「金太君は、屑の方お願いしていい？」

「はい！」

すると、金太が右の腰についていたスロットにセルメダルを入れ、それをスキャンする。

【ブレスト・キャノン】

サークルが開き、ブレストキャノンが装着される。

「んなのアリか！？」

しかもその状態で戦ってるし！

「もう、良くわかんねえな！」

一方優花の方では、初戦闘ながら良い動きで敵を翻弄している。

「はっ！」

「ギギッ!？」

メダルをドライバーに入れる。

【ドリル・アーム】

ドリルアームを装着し、敵をガスガス殴る。

確かにそのセルメダルはドリルに吸収されている。

優花と金太<sup>バング</sup><sup>ナイト</sup>が背中合わせに立ち、お互いにセルメダルを2枚入れた。

【【セル・バースト】】

金太の方はまだ入れ続ける。

【セル・バースト】

優花はヤミーに走り出す。

「はあああああああつ!!!」

【セル・バースト】

「ブレストキャノン！発射！」

極太の光線が放たれると同時に、優花の方もヤミーを倒す。

「はあゝ、疲れたゝ」

変身を解除してその場にしゃがみこむ優花。

「はいはい、おんぶしてやろうか？」

「うん、おねがゝい」

そう言って俺の背中に飛び乗った。



「優花重くなった？」

「失礼な！セルメダル一杯吸収したからだよ！」

沙良 s i d e

後ろから優花ちゃんと勇樹の光景を眺める。

その他にも、子連れの夫婦や、カップルなど……。

「沙良さん？どうしたんですか？」

金太君が顔を覗き込んでくる。

「ううん、なんでもないよ」

「ならいいですが……」

黙って空を見上げる。

人間って、いいなあ。・・・。

テマリーのメダル  
ジャッカル×3  
キツネ×2  
オオカミ×2  
イタチ×2  
パンダ×2  
クマ×2  
サンショウウオ×3

サラマ<sup>ダ</sup>ン<sup>ダ</sup>ー<sup>×</sup>3  
カエル<sup>×</sup>3  
フクロウ<sup>×</sup>3  
コウモリ<sup>×</sup>3  
ミミズク<sup>×</sup>3

## 第25話 正体と日野家と優花変身（後書き）

ずっと一緒にいた相棒

その人がずっと嘘を付いていたとしたら、あなたはどうしますか？

黒幕の出現と、残酷すぎる真実・・・

次回、仮面ライダーテマリー

【ヘビと真実と裏切り】

俺はもう、何を信じていいか分からない・・・

第26話 ヘビと真実と裏切り（前書き）

一度ぼつきり折らなきゃ勇樹を強くできない・・・。

そんな自分が情けない・・・。

## 第26話 ヘビと真実と裏切り

優花が仮面ライダーバンクに変身して数日、しばらくはヤミーとの戦闘が続いていた。

だが、戦力が一気に2人も増えたため、大分楽に戦っていた。

恋人を幸せにしたい、という欲望から産まれたヤミーを倒したとき、沙良が言った。

「私、人間になりたかったな……」

「どうした？急に」

「人間になって、大事な人に『行ってらっしゃい』って言うの」

「まさかお前の口からそんな言葉が出るとはな」

「そう？」

ちよつと複雑な気分だな。

なんでだろ？

「優花ちゃん、勇樹さんってもしかして・・・」

「うん、相当鈍感だよ。相手にも自分にも・・・」

「沙良さんも大変そうですね・・・」

その会話は、俺には聞こえなかった。



別の日

「この気配・・・」

「スブツ!？」

金太と沙良が立ち上がる。

「スブツって、師匠をやった!？」

「うん、結構近い!」

急いで沙良達の後を追った。

しばらく走ると、コブラの頭にヘビのような腕、クモの様な脚をした怪人が立っていた。

「スブツ・・・！」

金太が憎しみを込めた目で見る。

「あらナイトの坊や、久しぶり」

どことなくメズールに似た口調で話すスブツ。

こいつ、どこかで見たことが・・・？

「師匠を殺ったって本当なの？」

沙良がきつめの口調で聞いただす。

「もっちろ〜ん！ちよいと毒を注入してやればイチコロだったもん」

「てめえ・・・！」

俺の中にもメラメラと怒りがこみ上げる。

「あらん、怖いわよ、僕ちゃん」

「うつせんだよ！沙良！」

「ガチでね」

言われるまでもねえ！

「「「変身っ！／へんしん！／変身・・・」」」

【イタチ！パンダ！クマ！タンタンタタ！ン！ク！】

【ウシ・シカ・ウマ・ウ・ウ・ウ・ウシカウマっ！】

パカッ・・・！

3人で同時に変身し、スブツに向かっていった。

「でりゃああ！」

「はあっ！」

「ほっ！」

同時攻撃を繰り出すが

「はっ！」

腕に弾かれる。

「硬っ・・・！」

「師匠のコアがあるからか・・・」

「せいかゝい、テマリーちゃん。はああ！」

「うあっ！」

「きゃっ！」

俺と優花が吹き飛ばされる。

優花は運悪くビルに激突してしまい、変身が解除される。

「優花！」

俺のその叫びを聞いて、スブツが何か思いついたようだった。

「優花？あゝ、あのときの娘か。」

なに？

「てめえ、まさか……！」

「そ。日野家を殺したのは、

あ・た・し  
」

「んだと・・・・・!?」

どす黒い感情がわきあがる。

「いやゝ、手ごたえ無かつたわゝほんと」

「余所見をするなあああ！」

金太が剣を振り下ろすが、簡単に受け止められてしまう。

「ほんと齒ごたえの無い奴ばかりで、飽きちゃうわねーっ」と！

口から汚らしい光弾を吐く。

「うあああああー!!」

それを受けて吹っ飛び、変身が解けてしまう金太。

「貴っ様あああああああああああああー!!!!!!!!」

【ガアアアアアアアアアアー!!!!】

メダルが吼え、力がみなぎる。

「うううううううおおおおおおおー!!!!」

台風を起こしながらスブツに突っ込む。

「でえええりやあああああ！！！！」

その拳をぶつけるが

「はっ！！！」

手から出された溶解液の様な物を食らい、変身が解ける。



吹き飛ばされ、その場に倒れてしまう。

「なっ!？」

これって・・・・・・・・!？」

「溶解液。コアメダルの力を無力化する力を持つてるわ」

んだと・・・・・・・・!」

「てめえなんかに・・・・・・・・まだ負けるかよお!」

ふらつきながらも立ち上がる。

「おゝ怖い。でもね、良いこと教えてあげるわ。私の封印を解いたのは・・・」

「ユーズよ」

「えっ………!？」

ユーズって……

「沙………良………？」

ゆっくり振り向く。

そこには、視線を落とした沙良がいた。

「おい沙良、嘘だろ？」

震える声で聞く。

「勇樹、あのね！」

「答えろよ！」

びくつと肩を震わせる沙良。

「嘘、なんだろ………？」

「・・・・・・・・本当だよ」

「な・・・・・・・・」

そのとき、俺の中の何かが崩れた。

信じていたけど・・・・・・・・

目の前にいる奴・・・？

両親を殺したのは・・・

「嘘だ！嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ！！」

狂ったように叫び続けた。

「勇樹、あのね！！」

「近寄るな！」

メダルをぶつける。

「ずっと、騙してたのか・・・？俺を」

「勇樹！お願い話を聞いて！」

「聞きたくねえよ！何で・・・」



大っ嫌いな裏切り者の言うことを聞かなきゃなんねえんだ！」

「っ！」

そう言った後、沙良はその場にへたり込んだ。

「うふふつ、最高ね」

そう言ってスブツは沙良に近づき、鳩尾に拳を入れ、気絶させてどこかへ連れ去った。

「……追わないんですか？」

フラフラと金太が近づいてくる。

「……誰が追うか」

「一緒に戦ってきた仲間なんじゃないんですか！？それなのに「うつせー！」「っ！」

「もう、なにも信じない……。沙良も……。お前らもな！」

金太を睨みつけ、俺は走り出した。

別の場所

どこかの廃工場で、沙良が囚われていた。

その近くに、スブツが立っている。

「うふふ、さあ、最強のグリードを作る実験の始まりよ！」

0 テマリーのメダル

## 第26話 ヘビと真実と裏切り（後書き）

大事な人に嫌われた

メダルを注入され、自分が自分で無くなっていく

それでも、最後に会いたかった・・・

嫌われても、殺されてもいい

ただ一言だけ言いたかった

「勇うううういいいいいいいい！！！！！！」

次回、仮面ライダーテマリー

【想いと願いと沙良の欲望】

さよなら、勇樹・・・

## 第27話 想いと願いと沙良の欲望

膝を抱えて、ただただ震えていた。

信じていた人に裏切られた。

俺はもう、何を信じていいのか分からない……。。

いや……。。

もう、何も信じてない……。。

誰も・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

何も・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

そのとき、  
ドアが開けられた。



沙良 s i d e

「くっ……うっ……」

変な十字架に囚われてる。

中々切れない。

「ふふふ、さあ、実験の始まりよ……」

スブツが私に言う。

どこからか、私に大量のコアメダルが注入される。

それと同時に、激しい痛みが私を襲う。

「あああああああああああああ！！！！」

頭に今までのことがフラッシュバックしてくる。

復活して、今の世界を見て周って…………

勇樹に出会って…………

デマリーにして……………

無茶して師匠と戦って……………

嫌われたと思い込んで……………

空音ちゃんのことであって.....

嫌われちゃって.....

「・・・・・・・・勇樹・・・・・・・・」

嫌だよ・・・・・・・・

「・・・・・・・・勇樹・・・・・・・・」

最後までいい。もう一回会いたいよ・・・・・・・・。

「勇樹・・・・・・・・」

嫌われたっていい。殺されたっていい。

「勇樹・・・・・・・・」

ただ、一言だけ言いたかった。

「勇樹……」

『大好きだよ』って……

だから

「勇ううううううう樹iiiiiiiiiii! ! !」

届かぬと知っても、私は彼の名前を叫んだ。

一度だけでいい。

彼に、言いたい事があつたから……。





「呼んだか？相棒」

「え？」

ドアの前に、一人の青年が立っていた。

私の大好きな・・・

「勇………樹………？」

「おう！」

日野勇樹が。

勇樹 side

ドアが開けられ、そこから映司さんが入ってきた。

「映司・・・・・・・・さん・・・・・・・・？」

「うん。今いいかな？」

なぜか分からないが、警戒を解いてしまった。

映司さんは俺の近くに腰掛けた。

しばらくの沈黙が流れる。

やがて、俺が口を開いた。

「俺は……どうすればいいんですか……?」

震えが止まらない。

「何を信じて、何のために戦えばいいんですか……？」

映司さんは黙って聞いている。

「映司さんは、何のために戦ってるんですか……?」

「俺は今やれることをやるだけ」

「今、やれること……?」

少し顔を上げる。

「そう。手が届くのに手を伸ばさなかったら、死ぬほど後悔する。  
それが嫌だから手を伸ばすんだ」



手を伸ばす、か……。

「勇樹は、今までどうしてた？何を信じて、何の為に戦ってきた？」

「俺は……。」

バカじゃねえの？俺。

答えなんて、最初から見えてたじゃねえか。

「俺は、沙良を信じて、沙良や、優花、俺と関わった人みんなに笑顔でいて欲しくて……」

こんな俺を、好きでいてくれた人、俺が好きになった人、大事な人たちを守りたくて……。

「じゃあ、それでいいんじゃないかな？」

「・・・・・・はい。・・・・・・何やってんだろ、俺・・・・・・」

ゆっくり立ち上がる。

「ありがとうございました」

映司さんに頭を下げる。

「いや、俺は何も・・・」

「でも、立ち上がる切欠をくれたのは映司さんです」

「そっか」

「んじゃ、ちょっと言ってきます!」

それだけ言って、沙良のいる所まで走り出した。

どこかの研究所のようなところで、沙良の声が聞こえた気がした。

その方向にひたすら走り続けた。

「勇ううううううう樹いいいいいいいい！！！」

そう聞こえたので、俺はドアを蹴り破った。

「呼んだか？相棒」

s i d e  
o f f

その事を誰が予想していたるか。

勇樹はゆっくりと、それでいてしっかりと沙良の方に歩みだす。

「勇樹・・・・・・・・」

沙良の目には涙がたまってる。

「バカな！なぜお前がここに！？」

スブツが驚きの声を上げる。

「お前の知ったこっちゃねえよ」

それだけ言って、勇樹は沙良を見つめた。

「沙良、苦しいか？」

「うん……正直……」



大分辛そうな顔をしてる。

「なあ、お前、前に俺に言わなかったけ？人間になりたいって・・・」

「・・・あっ」

それを聞き、沙良は何か閃いた様だった。

「でも、そしたら勇樹が！」

「大丈夫！何とかする。だから今は・・・」

決意の籠った目を沙良に向ける。

「お前の欲望、解放しろ！」

沙良 s i d e

「お前の欲望、解放しろ！」

それを聞いて、私は自分に言い聞かせた。

（人間になりたい！グリードのユーズじゃなくて、一人の人間、犬神沙良として生きたい！）

そう願った瞬間、私の体から大量のメダルが放出された。

いや、私の中にあつた全てのメダルを放った。

コアメダルを1枚だけ取り込んだ、上位版ヤミーが大量に出現した。

メダルを出し終えると、体の中に違うものが流れている気がした。

ドクンドクンという音が聞こえる。

これが、人間になるっていうことなんだ……。

上位版ヤミーは、勇樹を睨みつけてる。

「っ！勇樹！逃げて！」

私は叫ぶ。

それに勇樹は不敵に笑って

「やなこつた！」

そこに踏みとどまった。

0 テマリーのメダル

## 第27話 想いと願いと沙良の欲望（後書き）

変身もできず、生身で大量のヤミーに立ち向かうお兄ちゃん  
その体を動かしているのは、やっぱり目の前にいる人・・・  
たとえ傷ついても、倒れても、何度だって立ち上がる

それが日野勇樹、私のお兄ちゃん、弟

次回、仮面ライダーテマリ

【意思と漢と繋がる心】

二人はようやく、一歩前進する

第28話 意思と漢と繋がる心（前書き）

Q 作者の好きなヤミィは？

A コウモリヤミィ



## 第28話 意思と漢と繋がる心

「やなこつた！」

そう吼えて踏みとどまる勇樹に、少し怯んだスブツはこつそりと逃げ出した。

「勇樹、無茶だよ！」

沙良が悲痛な叫びを上げる。

「無茶でも無理でも何でもいい。目の前で消えそうな光を守るならなあ！」

沙良にそう返す勇樹。

それを合図に、勇樹にヤミー達が飛び掛る。

「勇樹！」

「おつりやああ！」

それらを全て上段回し蹴りで蹴り飛ばす。

「どうした？コアメダルを取り込んでんのにその程度か？」

挑発する勇樹に苛立ちを覚えたヤミー達は、勇樹を囲んで袋叩きにする。

「げほっ・・・がはっ・・・」

「勇樹、勇樹!!」

沙良の声が響いた。

勇樹 side

いつて・・・。

やっぱりなれない挑発なんてするもんじゃねえな・・・。

血を吐きながら攻撃に耐え続ける俺に、3人の救世主が来た。

「たく、見てらんねえなあ！」

「我らの母が認めた理由が分からん」

「まあどうでもいいけどね」

そこには、コウモリヤミー、フクロウヤミー、ミミズクヤミーが立っていた。

あ、優花、金太、映司さんとかじゃないんだ……。

「お前ら、何で!？」

何でヤミーが俺の味方を!？

「はっ!俺達の親を誰だと思ってんだよ!」

お前達の親……!

「空音……?」

「その通りだ。我らが母の気に入った人間。ならば我らもその味方をするのが当然だろう？」

「味方味方〜！」

え？何この展開？

「ザコ共は任せて、相棒のほうへ行きな！」

「ここは我らに任せろ」

「お任せお任せ〜！」

うわ、こいつらすごい奴だ！

「わり、頼むぜ！」

俺が立ち上がると

「道を開けるおおお〜！」



くっ・・・パンダのパンチってか？

「んなもん、誰も笑わねえよぉ!!」

腹を押さえたまま蹴り飛ばす。

それを食らって吹っ飛んだヤミーを一瞥し、沙良を捕らえているチエーンを引きちぎった。

最後のチエーンを千切って倒れこんできた沙良を抱きとめる。

「沙良！」

「勇樹！」

「大丈夫!?」

なんだこのデジャヴ？

「勇樹、手……」

「あ？」

お、無理やり引きちぎったから血が出てんな……。

「ま、どうってことないない！」

手をぶらぶらさせる。

空気がしみる……。

ま、気にしてらんねえか！

「コウモリ共！力を貸してくれ！」

「おっしゃー！」

「心得た」

「変身変身ー！」

その場でメダルになり、コアメダルだけが俺の手元に来る。

それをキャッチし、ドライバーにセットする。

「沙良！久々にあれ行こうぜ！」

「うん！」

沙良がスキャナーを握る。

スキャナーの待機音と、ヤミーの荒い呼吸だけが響き渡る。

沙良がスキャナーを滑らせるのと同時に、俺も左手を構える。

「「変身っ！！」」

【フクロウ！コウモリ！ミミズク！フウウクウウコオオオズツ  
！！】

空音コンボを発動し、翼を広げる。

「はあっ！！」

その翼から雷球を飛ばす。



「疲れてっからな、さっさと決めるぜ！」

【フクロウ！コウモリ！ギン！ギン！ギン！ギガスキャン！！】

左手に紫のドラゴンが宿る。

「はあああああ・・・！！！」

そのままヤミーの群れに突っ込む。

「でえええりやああああ！！！」

フルムーンストライクをぶちかまし、3体のヤミーを倒す。

今のに紛れて結構な数のヤミーが逃げ出した。

残っているのはカエルとイタチが1体ずつに、さっきぶっ飛ばしたパンダだ。

倒したヤミーから出たメダルを入れる。

まさかこれとはな・・・。

「コンボチェンジ！」

【ジャッカル！キツネ！オオカミ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャッキオオ！！】

姿が変わり、相変わらずのジャッキオオになる。

「うおおおおおおお！！！！」

【ワオオオオオオオオオオ！！】

メダルが吼える。

最近多いな。

【スキヤニングチャージ！！】

オオカミの足で攪乱し、一箇所に集める。

そして勢いに乗って飛び上がり、キックを構える。

「ファングウウウウ、インパクトオオオオ！！」

テマリー最強の必殺技をぶちかまし、ヤミーが爆発する。

「ふう……」

変身を解いた瞬間、沙良が抱きついてきた。

「おわっ！」

「勇樹、勇樹！勇樹い！！」

親に甘える子犬のように擦り寄ってくる。

俺はそれを引き離し、瞳を見つめる。

が、すぐにそらす。

「沙良、あの、その……………」

謝らなきゃいけないのに、言葉が出ない…………。

なんて言えはいんだろう？

「えっと、なんつか、上手くいえないけど、ごめんぬぐっ！？」

言い切る前に口を塞がれる。

しばらくの間、ぴちゃぴちゃという水はけのある音が響く。

ゆっくり沙良が唇を離れた時、銀の糸がかかっていた。

「さ、さら！？イ、イイイイッタイナニオ！？」

すると沙良は頬を真っ赤にして

「えへへ、人間になると、ちゃんと勇樹の味を感じるんだね」

・・・うん、その笑顔反則。

何言おうとしたか忘れちゃったじゃねえかい！

「謝んなくて良いよ！こうして勇樹が助けに来てくれたんだもん！」

「沙良・・・」

「それに、改めて分かったし・・・」

「？なにを？」

「私は・・・」

「  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
ふえ！  
？」

「勇樹が好き。」

イマナント・・・・・・・・？

「もう！一回も言わせないでよ！恥ずかしいんだから・・・・・・・・」

そっぽを向く沙良。

いや、今のは耳を疑いますよ・・・・。

「えーっと、好きっていうのは、『愛してる』って解釈でオケー？」

ゆっくり頷く沙良。

マジすか！

「ゆ、勇樹は!？」

「へっ!？」

「私の告白に対する返事！」

顔を紅くしつつも、真剣にこっちを見てくる沙良。

うつゝ、恥ずかしい……。

あゝもう!こうなりや考えるのは止めだ!!

「好きに決まってるんだろ？この世の誰よりも！」

「ふふっ、ありが……とう……」

そう言っで沙良が倒れる。

「ちよっ、おい、沙良!？」

「すうっ、すうっ……」

寝ただけか……。

「ったく、脅かすなよな……？」

沙良をおんぶし、俺は家に帰った。



おんぶしているときの沙良が、とても嬉しそうな顔だったのは誰も知らない。

テマリーのメダル  
ジャッカル×1  
キツネ×1  
オオカミ×1  
イタチ×1  
パンダ×1  
カエル×1  
フクロウ×1

コウモリ  
×  
1

ミミズク  
×  
1

## 第28話 意思と漢と繋がる心（後書き）

取り戻した日常と、繋がった想い

メダルは減ってしまったけど、もっと大事なものが残った

でもそのせいで、沙良さんまでヤミーの標的になってしまった  
頑張って守んなきゃ！ね、勇樹さん！

次回、仮面ライダーテマリー

【騎士と日常と君だけを守りたい】

僕の邪魔をするなら、容赦しないよ？

第29話 騎士と日常と君だけを守りたい（前書き）

ゆゝけゝ疾風かせの如くゝ

魔戒の剣士ゝよ 月ゝ満夜にゝ

金色にゝなゝれゝ

雄雄しき姿のゝ

孤独な戦士よゝ

魂を込めたゝ

怒りの刃叩きつけて

時代にゝ輝けゝ

牙狼ゝ！！

これが分かったあなたは中々の特マニ。

## 第29話 騎士と日常と君だけを守りたい

仮面ライダー テマリ、前回までの3つの出来事お！

一つ、スプツとか言うのが出てきたり沙良が捕まったりでさあ大変！

二つ、生身で沙良を助けに言った俺パネエ！

そして三つう！沙良と仲直りした俺は、お互いの想いを口にした！

7：12

一人の青年が布団にうずくまってる。

その部屋に入るのは腰まである長い金髪の女性。

ノックもせず部屋に入り

「勇樹く、朝だよー！」

その青年、勇樹を起こし始める。

「んゝ．．．後2時間45分37秒ゝ．．．」

ごろんと寝返りを打ち、具体的な答えを返す。

「むうゝ．．．．．！」

しばらく考えていた女性は、急に何かをひらめいた表情になる。

「勇樹く？起きないとキスしちゃうぞゝ．．．／／／／」

とまあこつ恥ずかしいセリフを言ったはいいが、言ってから恥ずかしくなったようにもじもじし始めた。

なにがしたいねん。

「ん、すれは……」

青年からはなんともやる気の無い返事が返ってくる。

それにイラッときた女性はズンズンベッドに向かっていき、バツと勢い良く布団をはぎ、青年の腹に乗った。

「ふうっ！」

「ええからはよ起きんかい!!」

「サー、イエッサー！」

その反動を利用し、飛び起きる青年。

別に女性が怖かったからではない。

決して！

「鳩尾がハンパなくいてー・・・」

「勇樹、静かに」

青年・・・めんどくせー勇樹は、入学式を腹を抑えながら眺めている。

（１年前はあそこに優花がいたんだよね。感慨深いな・・・）

おっさんかお前は！

そして勇樹はふと思った。



（入学式・・・つまり4月5日・・・っ！あゝ、俺明後日誕生日なのか）

そのことに少し思考をめぐらせる勇樹。

（バイクの免許とるか・・・）

その日はそれっきりヤミーも出ず、穏やかに1日が終わろうとしていた。

勇樹 side

「物足りない！」

沙良がぷくつと頬を膨らませてこっちを見ている。

「どした？」

「私達お互いに告白したんだよ？恋人同士だよ？なのに勇樹、なんの変化も無いんだもん！」

「あゝ、そーいやそーだな・・・」

いや忘れてた訳じゃないんだが、特に変化させることも無いしな・・・。

「まさか、もう浮気？」

「お前が普段俺をどう見てるのが良く分かったぜ」

告白してすぐ浮気とか下衆だろ！

「する訳ねーだろんなもん。大体、俺を好きになる奴なんてそうそういないぜ？こんなバカな奴」

「まあそうだね」

「否定してくれよ・・・」

結構ダメージ来たぞ・・・。

主に内側に。

「でも勇樹だって年頃の男の子な訳だし、そういうのもしちゃうと思うんだよ。そこで！沙良ちゃん絶対愛する宣言をここでしてもらおうと思うの！」

「マジかよおい！」

なんでそんなこつ恥ずかしいことしなきゃいけないんだ！？

でもなんか

「ぷっ」

「むう、なんでそこで笑うの？」

「わりーわりー。何かお前も結構独占欲高いんだな」と思ってな・・・。  
うしー！」

立ち上がって沙良の傍に行き、両肩を掴む。

「<sup>おれ</sup>日野勇樹はここに誓う。

大事な人を守る騎士として、お前だけを愛すると誓う。  
この日常を守る為、君だけを守りたいから・・・」

「~~~~~っ／／／／／」

今更顔を真っ赤にする沙良。

言っただ方だって恥ずかしいんだよ・・・。

「勇樹・・・あ、ありがとう・・・」

「ど、どういたしまして・・・」

しばらく沈黙が続く。

「一番恥ずかしいのは聞いてる側なんだけど？」

「うわぁ!?!」

## 第29話 騎士と日常と君だけを守りたい（後書き）

牙浪かっこいいよ牙浪！

テマリーの最強フォーム（近日登場予定）の見た目が牙浪しか浮かばない・・・。

### 第30話 免許取得とコア奪還と最強コンボ（前書き）

ついに30話まで来ました！

4クルの番組だったらもう後半戦ですね．．．。

ついにテマリー最強のコンボが登場！

ですが．．．



### 第30話 免許取得とコア奪還と最強コンボ

「ただいま」

免許取得のため学校休んでまで合宿に行くこと3日。

なんとビックリ免許取得！

俺才能あるらしい。

「おっかえり〜！」

沙良がドゴツと飛び込んでくる。

「ドゴツ！？ぐ、うううう・・・」

「む、これで倒れないとは・・・中々強くなったね勇樹」

「今の強さ見極める為にやってたの!？」

あゝ、このやりとりも久々だな・・・。

「丁度良いや！ヤミーが出たよ。あのコア持つてるタイプの奴」

「何体だ？」

「・・・5体だね」

「金太は？」

「今、スブツが作ったヤミーを倒しに行ってる」

「おし！バイクで行くか！」

せっかく免許取ったし！

ライドベンダーにメダルを入れ、バイクモードにする。

なぜか沙良も一緒に乗り込む。

沙良の指示の下、ヤミーの出た場所へと向かった。

そこでは、特に理由もなくキツネ、ジャッカル、オオカミ、クマ、サンショウウオの3体のヤミーが暴れていた。

「うまいことコンボのパーツがそろってんな・・・沙良！」

「うん！」

メダルを受け取り、ドライバーにセットする。

「変身っ！」

【ジャッカル！キツネ！オオカミ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャッキオオ！】

「っしゃあ！」

キツネソードとメダジャリバーを握り、ヤミー共に突っ込む。

「おらおらおらおらおらおらあー！！」

さすがにグリードよりは脆い為、結構簡単に切りつけられる。

「順調順調」

斬りつけて出たセルメダルをメダジャリバーにセットする。

一度スキャンしようとする

「ガアアア!!」

「うあっ!!」

何者かに妨害される。

そこには、もう一組キツネ、ジャッカル、オオカミのヤミーがいた。

8対1かよ……。

「くっそ!!」

再び戦闘に入る。

だが、数の多さに結構苦戦する。

攻撃したら違う奴らが攻撃してくる。

このままじゃラチが開かない・・・。

「ああもう！」

【トリプル！スキヤニングチャージ！】

【スキヤニングチャージ！】

【ツインスキヤン！！】

二本の剣を交差させる。

「ツインファングストラッシュ！！」

必殺技を放ち、何とかヤミー達を粉碎する。

「はぁ．．．はぁ．．．」

だが、クマ、サンショウオは無傷だった。

「くそ．．．うつ．．．」

長時間コンボでいた所為か、体に疲れが襲ってきた。

「勇樹！」

「やべ．．．」

そつつぶやいた瞬間、クマヤミを一筋の光線が消し飛ばした。

「大丈夫？お兄ちゃん」

「優花！それに金太！」

ナイスタイミングで来てくれるじゃねえか！

あ、ちなみにさっきのは優花のプレストキャノンだったらしい。

「はああああ！」

【スキヤニングチャージ】

金太がサンショウオヤミーを切断し、何とか助かった。

「でもこれで、沙良のメダルが全部そろったのか」

「まあ今はいらないけどね」

そりゃそうだ。

「いないならあたしにukれないかしら？」

バツと振り向くと、スブツとヘビヤミィが数体立っていた。

「スブツ……！」

「お前だけは絶対に僕が倒す！」



金太が怒りを露にする。

「あらあ？この前あんなに簡単に負けた子がなにをほざいてるのかしら？」

「貴様！」

「落ち着け金太」

飛び出そうとした金太を止める。

「あいつの攻撃でコアの力が無力化されるのを忘れたのか？」

「ですけどっ！」

「中々賢いじゃないテマリーの坊や。なら良い事教えてあげるわ。その9枚のコアメダル、3枚に融合させて変身すれば、あたしの攻撃は効かないわよ」

くすくすと笑いながら俺に情報を与えるスブツ。

「そうなのか？沙良」

「できるけど、誰もやったこと無いからどうなるか分かんないよ？」

「なんでもいい！あいつに勝てるなら！」

そう言って変身を解き、沙良に9枚のメダルを渡す。

「うん・・・」

渋々自分の足元にメダルを並べる沙良。

「我が求むは究極の光

闇を照らす金色の刃

その種を、今ここに与えたまえ」

詠唱をすると、メダルが集まっていく。

そして輝き、3枚のメダルに変わっていた。

「はい。でも無理はしないでね」

「ああ」

何かを企んでる様にも見えるスブツをよそに、俺はメダルをセツトした。

「変身っ！」

【ジャッキオオ！ジャッキオオ！ジャッキオオ！】

その瞬間、俺の体に激痛が走る。

「ぐ、うううう・・・うあああああああ！！！」

頭が割れる様にいたい。

「うあああああああああああああああ！！！」  
【ガアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

そう吼えた後、俺の意識は途切れた・・・。

第30話 免許取得とコア奪還と最強コンボ（後書き）

次回、仮面ライダーテマリー！

勇樹

「がああああああー！」

沙良

「勇樹！目を覚まして！」

スブツ

「ふふふ、こんな簡単にいくとはね」

勇樹

「ここは、どこだ？」

優花

「バカな弟は、私がしっかりお仕置きしてあげる！」

次回、【計画と暴走と自分対自分】  
お楽しみに！

人気投票も明日で終了なので、まだの方はお早めに！

### 第31話 暴走と計画と自分対自分

「うあああああああああああああああ！！！！」

【ガアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！】

そう吼えた勇樹の体に、漆黒の刺々しい鎧が装着された。

両肩にはオオカミの顔の様な装飾が付き、顔も以前のジャッカルより荒々しい物になる。

【ケルベロスッ！！】

ドライバーがコンボ名を叫ぶ。

「勇樹！勇樹！」

沙良が叫ぶが、それは勇樹の耳に入っていない。

テマリはゆっくりと沙良の方を向き、突然襲い掛かった。

「きゃあ！」

「危ない！」

バンクこと優花がそれを止める。

「勇樹、何でこんなこと？」

後ろから掴みつつ優花が質問する。

「ダメレ。タダゼンブツブスノミ。コノヨノスベテヲナア！！」

拘束を振り払い、優花の腹部に蹴りを入れる。

「きゃっ！」

それを受けて大地を転がる優花。

「優花さん！」

「勇樹！目を覚まして！」

金太と沙良がほぼ同時に叫ぶ。

「ふふふ、まさかこんな簡単にいくとはね」

楽しそうに笑うスブツ。

「貴様ああああああ！！！」

キレた金太が突っ込むが、

「貴方はこれの相手でもしてなさい」

大量のヘビヤミーが襲い掛かり、スブツはその隙にどこかへ消えた。

「くそっ！どけ！」



2本の剣を構えた金太がヤミー達を切りつけるが、数が多く中々進めない。

「くううう・・・」

その頃

【ドリル・アーム】

「はあああっ！」

ドリルアームを右腕に装着したバンクが攻撃するが、それを簡単に受け止めるテマリ！。

「ぐっ……うっ……」

逆に押され始め、バンクに焦りが見える。

「ジャマダ」

「きゃあああー！」

ついにドリルアームを掴んで放り投げ、バンクが壁に激突する。

「優花ちゃん！」

「……まだ……まだ……」

ふらつきながらも立ち上がるバンク。

「ナゼソウマデシテタカウ？」

テマリーがバンクに質問する。

「なんで？決まってるじゃない！」

壊れたドリルアームをテマリーに向ける。

「バカな弟を、私がお仕置きする為よ！」

メダルを入れ、ダイヤルを回す。

【シヨベル・アーム】

【カッター・ウィング】

「見せてあげる！弟を思う姉の本領を！」

勇樹 side

「う．．．ん．．．」は？」

何もない、真っ白な空間にいた。

「確か沙良のメダル9枚を使ったコンボに変身して．．．．．ど  
うなったんだ？」

そこからの記憶が無い。

「ここはお前の意識の中。そしてお前は今、暴走して姉を攻撃してる」

後ろから何者かの声がした。

いや、この声は……

「まさか！」

勢い良く後ろに振り向く。

そこには、腕を組んだ俺が立っていた。

「俺？」

「そう。俺はお前だ」

s  
i  
d  
e  
  
o  
f  
f

「はっ！」

シヨベルアームを振り下ろすバンク。

だがそれを簡単に避け、背中に蹴りを入れるテマリー。

「きゃあ！」

地面に叩きつけられ、そのまま背中を踏まれる。

「げほっ……」

ボロボロになったカッターウィングが、空しく消えていく。

「勇樹！もうやめてよ！」

沙良が泣きながら叫ぶ。

だが、テマリーはそれに答えない。

「やっぱり、お尻ペンペンする必要があるみたいね・・・」

あくまで強気の姿勢を保つバンク。

「でりゃあああああ！」

そこへネイトが突っ込み、テマリを斬りつけた。

「金太君！」

「優花さん、大丈夫ですか？」

優花から離れたテマリーの前に構えるネイト。

「うん、ありがとう」

「みんなで戻しましょう。いつもの勇樹さんに」

首だけ後ろを向き、みんなに提案する。



「そうだね！」

「うん！」

優花と沙良も同意し、バンクとナイトがテマリーの前に構える。

「レッツ！お仕置きタイム！」

勇樹 side

「んで、そのもう一人の俺が何の用だ？」

「ただお前の力を見極めに来ただけだ。同じ俺として」

「もし期待はずれだったら？」

「俺がお前になる」

どっちも俺だからややこしいが、簡潔に纏めりゃあいつの人格にな  
っちまうんだよな。

「んなもんお断りだぜ！」

ドライバーを装着する。

「良い心がけだ」

相手もドライバーを装着する。

「変身っ!」

【ジャッカル! キツネ! オオカミ! ジャ! ジャ! ジャ! ジャッキオオ!】

【ジャッキオオ! ジャッキオオ! ジャッキオオ! …ケルベロスッ!】

相手は金色の、さっき俺がなろうとしたコンボに変身する。

キツネソードを構えた俺がまず動く。

「おらあああああ!」

相手に向かって振り下ろす。

「…遅いな」

剣が当たろうとした瞬間、相手が消える。

「なっ！？・・・がはっ！」

後ろから強烈な蹴りを食らい、大きく吹っ飛ぶ。

「ちい・・・そのコンボ、そんなに強烈なのかよ・・・」

優花達勝てんのかな？

「まあ、今は自分の戦いに集中すつか！」

立ち上がって、相手おれを睨みつける。

俺対俺の戦いが始まっていた・・・。





### 第32話 己と愛と動機（前書き）

戦う理由が人間味あふれるヒーローっていいですね！  
ティガとか小野寺クウガとか・・・。  
勇樹もそんな感じのを目指してます！

### 第32話 己と愛と動機

テマリー（表）とテマリー（裏）が激しい戦いを繰り広げる。

いや、主人格である勇樹の方が押され始めている。

「ぐあああああー!!」

強烈な肘打ちを食らい、膝をついてしまう勇樹。

「止めた……」

【スキヤニングチャージ!】

裏テマリーの方の体が輝き、脚にエネルギーが溜まっていく。

「はあああああー!!」

その強化された蹴りを食らい、遠くへ吹き飛ばされてしまう勇樹。

「うああああああっ!」



体のあちこちから火花が散り、オーリングサークルが点滅する。

「ぐ．．．あ．．．」

体を動かしたくても動かせない勇樹。

「どうした？こんなもんで終わりか？」

「ざっけんじゃねえ．．．」

口では強気にいるが、中々立ち上がることができない。

（くそっ．．．．．）

「はああああああっ!!」

【セル・バースト】

【スキヤニングチャージ】

強化したシヨベルアームでの攻撃と、二本の氷を纏った剣の剣戟が炸裂する。

だが、テマリーは無傷で立っていた。

「フン！」

地面を強く踏み、周りにあるものを大地ごと吹き飛ばす。

「きゃあああ！」

「うあああっ！」

ビルに激突してしまうバンクとネイト。

「優花ちゃん！金太君！」

沙良が物陰から優花と金太に声をかける。

「大丈夫です……。沙良さんは物陰から出ないで！」

「でも「平気だよ……。」「優花ちゃん!？」」

二人がゆっくりと立ち上がる。

「ナゼダ？」

テマリが首を傾げる。

「ナゼキズツキ、ナンドタオレテモコノカラダヲタスケヨウトスル？ソコマデノカチガコノオトコニアルノカ？」

その言葉に、3人が薄い笑みをこぼす。

「人の価値は、私達が決めるものじゃない」

始めに沙良が口を開く。

「何度倒れても立ち上がる？大事な仲間が傷ついてたら誰だってそうしますよ」

次に金太が。

最後に・・・

「何よりも、バカで世話の焼ける弟を助けるのも、姉としての役目だからね！姉弟愛ってとこかな？」

優花が締める。

「アイ・・・？」

「僕はまあ、愛というよりは友情ですかね？もしくは弟のようにしてもらってるので兄弟愛かと」

「私は純粹にただの愛だよ。日野勇樹という男性を愛している、一人の女の子としての」

金太と沙良による『愛』という単語に、テマリーが頭を抑えて苦しみ始める。

「ウウウウウ……ウアアアアアアア！！！」

「終わりだ」

裏テマリが勇樹に迫る。

「っ！」

勇樹が腕で顔をかばった瞬間

「うぐっ・・・！？」

裏テマリが苦しみ始める。

「なんだ！？体が、維持できない！？」

突然の変化に驚きを隠せない裏テマリ。

それに思い当たるところがあつた勇樹は、立ちながらこう言った。

「どうやら、切り札は常に俺の下にあるようだぜ・・・！」

「なに・・・！？」

「俺の仲間と、姉貴と・・・・・・・・何より大事な人がやってくれたみてえだぜ！」

バンクがセルメダルを入れ、ダイヤルを回す。

【ブレスト・キャノン】

バンクの胴体にブレストキャノンが装備される。

【セル・バースト】

セルバーストを繰り返し、ブレストキャノンにエネルギーを溜めていく。

【スキヤニングチャージ】

ナイトの方も、スキヤニングチャージで双剣にエネルギーを溜める。

「ふうふうふう．．．」

ナイトが両腕を交差させ、精神を集中する。

「はっ！」

勢い良く飛び出し、テマリーのすぐ目の前に行く。

「凍結乱舞斬！」  
やうけつらんぶざん

高速でテマリーを斬りつけ、切った場所が凍りつく。

「ブレスト！キャノンッ！！」





「くううううらああああええええええ！」

**【ワオオオオオオオン!!!】**

【スキヤニングチャージ！】

テマリーが走り出し、大きくジャンプする。

「ファンゲウ、インパクトオオオオオ！」

キックを裏テマリーに叩き込み、そのまま変身が解除される。

「はあ・・・はあ・・・」

肩で荒く息をする勇樹。

裏勇樹も変身が解かれ、地面に蹲っている。

「俺の……勝ちだよな？」

裏勇樹に近づき、そう問いかける。

「ああ。だが一つだけ聞かせてくれ。お前がテマリーとして戦う動機を」

勇樹を見上げながら裏勇樹が質問する。

「動機？んなもんいっぱいあるよ。手が届くのに手を伸ばさなかったら、死ぬほど後悔するし、お世話になった人を助けたいし、優花を二度も失いたくないし……」

指を折りながら色々な理由を挙げる勇樹。

「・・・俺に嘘を言っても無駄だぞ？」

裏勇樹がニヤけながら勇樹を見る。

「・・・じゃあ聞くなよ・・・」

恥ずかしそうにぼそぼそとつぶやく勇樹。

「決意というのは口にしなければ意味がないぞ？」

「これは決意とは違うだろ！」

「では俺が代わりに言おうか？」

「それだけはやめてくれ・・・」

勇樹同士の謎の駆け引きが行われる。

「ああもう！分かったよ・・・」

俺が戦う理由の、一番の大元を占めてるのは・・・

沙良に、一緒にいて欲しかったから」

恥ずかしそうに頬を掻きながら勇樹が話す。

「今だから分かるが、俺は沙良に最初から惚れてたんだよな．．．。だからテマリーになれば沙良が傍にいてくれると思ったから。喜んでくれると思ったから。家にも住まわせたし．．．。でも今は、いろんな理由がこっちゃんになってるな」

半ばすすきりしたようにしゃべる勇樹。

「あゝ、何か口で言ったらすすきりしたわ．．．」

「なら良い。沙良達が待ってるぞ？」

顎で出口をさす裏勇樹。

「ああ。またな、勇樹」

「ああ。元気でな、勇樹」

勇樹同士で拳をぶつけ、表勇樹は出口に走っていった。

勇樹 side

「ん．．．ん？」

目が覚めると、沙良と優花と金太が顔を覗き込んでいた。

「あれ？ベッド？」

「「勇樹！！」」

「うわぁ！？」

沙良と優花が俺に抱きついてくる。

金太はそれを目尻に涙を浮かべつつ、笑顔で見る。

「勇樹！勇樹い！！」

「もう！このバカは人に心配ばかりかけるんだから！」

「あはは・・・でも、本当にみんな心配したんですよ？」

「ありがとう。沙良、金太、姉さん」

「うん！」

「はい！」

「姉さん・・・久々に言われたね」

そうだな。



俺はこのみんなを守りたい。

他に何も残らなくても良い。

ここにいる人達だけは、絶対に守りぬく。

だから安心してみてろよ、勇樹！

### 第32話 己と愛と動機（後書き）

自分対自分。

一度やってみたかったですよね。

後、今回ジャッキオオでケルベロスに勝てたのは仲間のおかげですからね？

本来のスペックはケルベロスが格段に上です。

### 第33話 心配と利用規約とライダーキック（前書き）

今回は一度やってみたかったあの必殺技！

うまく表現できてるか不安です…。

### 第33話 心配と利用規約とライダーキック

「仮面ライダー テマリー！ 変身する際の3つの約束！

一つ！ メダルは全てこれからも私が管理します！

二つ！ 私が許可したとき意外はコンボにはさせません！ イキルかそれに1枚変えた亜種コンボで戦うこと！

そして三つ！ 私や優花ちゃん以外の女の子にデレデレしないこと！」

朝起きてから最初に言われたのがこれだ。

「はっ？」

オーケー、一つ一つ冷静に質問していこう。

「えっと、いきなりどうした？」

まずはそっからだ。

なぜいきなり？

「勇樹が無理にケルベロスになるなんて言い出すから、利用規約を作りました！」

んなビシッと指差されても…。

じゃあ二つ目だ。

「何でお前がメダル管理するんだよ！？」

「勇樹はすぐ無茶するから！」

即答っ！？

「くっ…じゃ、じゃあなんでイク「イキルコンボは負担がからないから！」…言わせろよ！」

確かにイキルは楽だ。

だけど力が弱いし名前がな…。

なぐんて言ったらぶっ飛ばされるんだろっとなぐ…。

「s」そもそも勇樹がスブツの口車に乗せられたのがいけないんでしょ！？ それってデレデレしてたって見られてもおかしくないんじゃない！？」「……………」

あげく音を出し終わる前に遮られたよ…。

ってか！

「別にデレデレしてなくね！？」

「ほんとに？」

なんだそのジト目は！？

「つか、俺はあんな奴に鼻の下伸ばすほど趣味悪くねえよ！」

「たしかに」

なんであんな気持ち悪い奴にデレデレしなきゃいけないんだ！？

「それに利用規約なんて無くていいだろう？　今までなかったんだし…」

「これは優花ちゃんや金太君とも話し合って決めたことなの！　みんな勇樹が心配なんだから…」

二人も関わってたのか。

そういえば昨日

『すみません、4つしか減らせませんでした…』

って金太が言ってたな。

元々は7つもあったのか…。  
金太ありがとう

「別にそんな心配されなくても、もう無茶なんかしねえよ！」

「じゃあその証拠を見せてもらおうか！」

はい？

「ヤミーが出たよ」

現場には、カエルヤミーとイタチヤミーが1体ずついた。

「っしやあ沙良！ ジャツキオオ……ひい！？」

ジャツキオオって言ったら凄い目で睨んできた。

こええ………。



「うそっす！ イキルコンボお願いしますっ！」

「よろしい」

メダルを受け取り、ドライバーにセットする。

「変身っ！」

【イタチ！キツネ！カエル！イ！キ！ル！イキルイ！キ！ル！】

「はっ！」

キツネソードを握り、ヤミーに向かって行っ

「でありゃっ！」

2体を横払いで斬りつける。

「うゝん、やっぱ力が入んないなゝ…」

ぼやきながらも、順調に斬りつける。

すると

「「ガアアアアア！」」

突然ヤミー達が吼えた。

「なんだ!？」

テンパっていると、すぐに声が止まる。

特に変化は見えない。

「? まあいつ、か！」

キツネソードを振り下ろす。

だが

ボキィ……

「ああ!？ 折れた!？」

キツネソードが真つ二つになった。

「おい沙良！ どうなってんだよ！」

「もしかして、あの子達のメダルも覚醒したの！？」

「覚醒？」

ああ、あのメダルが吼える奴か…。

それってまずくね？

「ガアアアッ！」

「ぐあっ！」

イタチヤミーのパンチを食らい、少しよろめく。

「グッ！」

キツネヤミーに斬りつけられ、膝を突いてしまう。

結構パワーアップしてんな……。

何か無いか考えていると、ライドベンドーが目に残った。

「あれだ！」

敵の攻撃をかくぐり、ライドベンドーにメダルをいれ、バイクモードにする。

それに乗り、助走をつけるために少し離れる。

ブウンブウンブウンブウン……。

アクセルを回す音が鳴り響く。

「行くぜ！」

勢い良く走り出しその間にドライバーをスキャンする。

【スキヤニングチャージ！】

バイクの上に立ち、勢いに乗ってジャンプする。

「はああっ!」

そのまま空中で一回転し、右足を向ける。

「ライダーキック!!」

その掛け声と共にキックを決め、ヤミィを爆発させる。

辺りに散らばったメダルを見ながら、変身を解いた。

「ふう、これは問題ないだろ?」

満足げに沙良にメダルを返す。

「……………バイクの上に載るのは良くないよ」

「そこ!?!」

「罰として一つ私の言うことを聞くこと」

「それがしたかっただけじゃねえの!?!」

もう、良くわかんねえな！

沙良のお願い？

後残りの日中密着して過ごしましたが何か？

風呂もですが何か？？

ベッドもですが何か！！？

テマリーのメダル  
ジャツカル×3  
キツネ×3  
オオカミ×3  
イタチ×2  
パンダ×1  
クマ×1  
サンショウウオ×1  
カエル×2  
フクロウ×1  
コウモリ×1  
ミミズク×1

ジャツキオオ×3





### 第33話 心配と利用規約とライダーキック（後書き）

次回、仮面ライダーテマリー！

金太

「複数のメダルを持った上位ヤミー改ですね…」

優花

「硬っ…！」

沙良

「これしかないの…？」

勇樹

「俺は、自分を超える！」

【ジャッキオオ！ジャッキオオ！ジャッキオオ！】

次回、【上位と改と自分超え】

お楽しみに！

非常にどうでも良い話ですが、オーズはやっぱ再構成が良いですね〜。

こんなん書いてる自分が言うのもなんですが…。

あのメダル争奪戦などを書くのは（作者側としては）楽しいと思うんですよね〜。

みなさんどう思います？

### 第34話 上位と改と自分超え（前書き）

これが終わったら過去編です！

過去編、スブツ編、ちらつとオーズ介入、現代グリード編、と流れていきます。

つてな訳で久々にグリード募集します！

恐竜系、絶滅種系、生きた化石系、幻獣系のいずれかをお願いします！

### 第34話 上位と改と自分超え

仮面ライダーテマリ、前回の3つの出来事！

一つ、心配をかけすぎた勇樹に、沙良が利用規約を突きつける！

二つ、そのせいでイキルコンボしか使えない勇樹は、パワーアップしたヤミーに苦戦を強いられる！

そして三つ、勇樹は、ライダーキックを放ってそのヤミーを撃破した！

「という訳で、転校生を紹介する」

「犬神沙良です！ みんなよろしくね！」

ワァァ!

「ちよつと待てえええええ！」

落ち着けよおめーらよお！

なに！？　なんで沙良がいんの！？

つかお前ら一回沙良見てるだろ！？

(第5話参照)

体育

ザワザワ……ザワザワ……

「おい、まさかあのスポーツ万能の焔ほむに勝つつもりか？」

「無理に決まってるだろ、女子だぜ？」

なんというベタな展開！

明らかに沙良がぶっちぎりで「おおー！」ってなって沙良がモテモテでその彼氏が俺で俺が妬まれてバッドエンドオー！

つてのが見え見えじゃねえかよ！

もつと捻れよ！

つてか何で沙良がいんのかまだ聞いてねえiiiiiii！

「ど、どうしたの勇樹？」

「おや人気投票で一票もらっていたから出番が来た佐藤漣君ではないか」

「説明ありがとう。で？　なに唸ってたの？」

「いや、こつちの話だ……………」

うわ行動に出てたとか恥ずかしっ！

ちなみに、俺の予想は九割合っていた。

違ったのは妬まれるではなくからかわれた……。

ええーい！

彼女のいないかわいそうな連中め！

「んで？ 何でお前は学校に？」

帰り道での会話だ。

俺、沙良、優花、後2年生に飛び級設定で転向してきた金太。



「いや、勇樹達が学校行ってる間は金太君しか動けないじゃん？  
それだと大変だから、いつそ皆高校生になっちゃおう！」と

金太が「止められなくてすみません…」という目で俺を見てくる。

お前しか常識人がいないって……………？

「……………本当は高校生になってみたかったんだよね、とか言うなよ？」

「……………この気配、ヤミーだね」

「ヲイ！」

何だその露骨な無視は！？

まあ行くけどさ！

現場には、フクロウとコウモリとミミズクを合わせた様なヤミィが立っていた。

「おいおい、空音のメダルコンプリートかよ……」

「あれって……？」

「複数のメダルを持った上位ヤミィ改ですね……」

金太、説明ご苦労。

「ま、何でもいいか！ 沙良、こいつは手強そうだからコンボでも

「良いよな？」

「ダメ！ はいこれ」

ちっ！ 結局イキルかよ…………。

「「「変身っ！／変身…／へんしん！」「」」

【イタチ！キツネ！カエル！イ！キ！ル！イキルイ！キ！ル！】

パカッ…………

【ウシ・シカ・ウマ・ウ・ウ・ウ・ウシカウマッ！】

3人で同時に変身し、ヤミーに向かっていく。

「でりゃああっ！」

「はっ！」

「はあああっ！」

剣と拳が命中するが…………

「硬っ……………」

攻撃したこっちの手が痛い……。

「グオオオオオ!!」

全身から雷球を発射する。

「うああああっ!!」

みんな大きく吹っ飛ばされる。

「くう……!!」

【ドリル・アーム】

「はっ!!」

優花がドリルアームを装着して突っ込むが、ドリルの方が削れていく。

「うそっ!?!……………きゃあっ!!」

「優花!!」

優花が吹き飛ばされ、ビルに衝突する。

「このっ……!!」

【ブレスト・キャノン】

【セル・バースト】

【セル・バースト】

【セル・バースト】

【セル・バースト】

「いつけええええ!!」

金太が強化したブレストキャノンを放つ。

が、

「ガアアアアアア!!」

それらを吸収し、跳ね返してた。

「うわああ!!」

「金太あ!!」

あれは痛い！

そのまま金太の変身が解かれてしまう。

「沙良！ ケルベロスしかねえ……」

今はためらってる余裕なんかない！

「これしかないの………？」

沙良はまだ悩んでる。

「1分でけりをつける！ だから！」

「もう！ 分かったよ！」

怒られた……。

キツネメダルを沙良に返す。

「我が求むは究極の光

闇を照らす金色の刃

その種を、今ここに与えたまえ！」

沙良の詠唱が終わり、ジャツキオオメダルが3枚生み出される。

「絶つつつつつ対に！ 1分だからね！」

「わぁーってる！」

ドライバーのメダルを入れ替える。

スキャナーを握り締めるが、その手が震えている。

「怖い、か……………」

もう、あんなことにはなりたくないからな……………。

でもっ！

「俺は、自分を超える！」

【ジャッキオオ！ジャッキオオ！ジャッキオオ！・・・ケルベロス  
ッ！ー！】

身体が変わり、金色の鎧を纏った姿に変わる。

その瞬間に、身体を激しい電撃が襲う。

「うううう、あああああ！ー！！」

「勇樹！」

沙良の声が聞こえる。

俺は……………俺はッ！

「俺は俺だあああああ！ー！！」  
【ガアアアアアアアアア！ー！！】



そう吼えると、電撃が止む。

「あれ？」

「嘘………使いこなせるの？」

沙良が驚きに目を見開く。

まあ一番ビックリしてるのは俺なんだけど……。

「…あ！ 勇樹！ 後45秒！」

「先に言えよ！」

武器が無いので、手に付いてる無数の鋭い爪で切り裂く。

「だらだらだらだらだらだらだらだらだらだらあー！ー！」

斬ったところからメダルが噴出される。

「食らえ！」

【スキヤニングチャージ！】

両足にエネルギーを溜め、大きく飛び上がる。

鋭くなった両足を、ヤミーに向ける。

「フアングエクストリイイイイム！！」

必殺技が決まり、ヤミーが爆発する。

「お、おおおお？」

その瞬間に、変身が強制的に解除され、俺は気を失った。

使いこなすのは、まだ先か……………。

テマリーのメダル  
ジャッカル×3  
キツネ×3  
オオカミ×3

ジャッキオオ×3

イタチ×2  
パンダ×1  
クマ×1  
サンショウウオ×1  
カエル×2  
フクロウ×2  
コウモリ×2  
ミミズク×2

### 第34話 上位と改と自分超え（後書き）

次回、仮面ライダーテマリー！

勇樹

「先代テマリーって、どんな人なんだ？」

沙良

「行ってみる？ 過去に」

先代テマリー

「はあっ！」

優花

「あれが、先代テマリー……」

勇樹

「なんだあのゲキリュウケンみたいなの？」

次回、【三と剣と三頭犬】

お楽しみに！

べ、別にダジャレなんかじゃないんだからね！

### 第35話 三と剣と三頭犬（前書き）

過去編突入！

### 第35話 三と剣と三頭犬

【トリプル！ スキャニングチャージ！】

「おりゃああああっ！」

メダジャリバー・テマリー・ヴァージョンを振り、サラマन्दァーヤミーを撃破する。

「はぁ…はぁ…」

イキルコンボとはいえ、こつも連戦だと疲れが溜まる。

「もう！ この程度で息切れ？ 情けないな」

最近沙良が冷たいです…。

連戦なんだからしょうがねえだろ！

「でも先代のテマリーは連戦でも平気だったよ？」

「ほんとかよ？」

信用できねえ。

だってイキルコンボでもこんなに辛いんだぜ？

それで他のコンボで連戦とか……

考えらんねえ。

「だいたい、先代テマリーってどんな奴なんだ？」

「行ってみる？ 過去に」

行けちゃうの！？



どこかの山奥。

俺と沙良と優花が奥へと進んでいた。

金太も来るかと聞いたが、何やら3人が限界らしい。

戦える奴が残ったほうがいいということで、あいつが残った。

……だから人気投票で1票も来ねえんだよな…。

「着いたよ」

どこかの遺跡のような場所にたどり着いた。

その先に入っていく。

壁にはいろいろな絵が描かれており、最後には3人の戦士が描かれた絵にたどり着いた。

「沙良、これは？」

「絵は気にしないで。ほら、これに触れて」

優花と顔を見合わせ、壁に触れる。

最後に沙良が触れた瞬間

「「ふえ！？」」

何かに落ちていく感覚が体を襲った。

「うわあああああああ！？」

「きゃあああああああ！？」

目が覚めると、さっきの遺跡と場所は変わってなかった。

だが、少し新しくなった様だった。

優花は隣に居たが、沙良が見当たらない。

「沙良！？」

沙良を探していると、足元から蓋を開けて出てきた。

「ふう！ あ、二人とも起きた？」

「お前、何してたんだ？」

「ん？ ちょっと探し物」

俺がそれについて聞くまでも無く、沙良は出口へと急かした。

出ると、大量のヤミー達が暴れていた。

「はあっ！」

そこへ剣の様な物を振り回しながらテマリーが戦っていた。

「あれが、先代テマリー……」

横で優花が呟く。

「おい、あのゲキリユウケンみたいなのはなんだ？」

今テマリーが使っている。

ゲキリユウケンの持ち手の横にある弧を描くようなパーツはないが、真ん中に獣の顔が着いてたり、形が一緒だ。

「あれはフアングセイバー。テマリーの必殺武器だよ」

「でもあんなの一回も俺使ってねえぞ！」

「そりゃ現代には無いからね」

は？

どゆこと？

「この時代で突然消えちゃったんだよ。まだ戦ってる途中なのに」

「なんじゃそら」

まぬけな話もあるもんだ。

「さて、この時代に来た目的は3つあります」

沙良が俺たちに説明を始める。

「一つ、失われたファングセイバーを奪った犯人を突き止める。

二つ、錬金術師、イナに出会う。

そして三つ、先代テマリーの戦いをよく見ておくこと！」

戦いの方を見ると、もう数は残り少なかった。

テマリーがファングセイバーにメダルを5枚食わせる。

【ジャッカル・キツネ・オオカミ・ジャッカル・キツネ！ ヒッサ  
ーッ！】

【スキヤニングチャージ！】

それをスキヤンし、エネルギーが溜まっていく。

「はああああっ！！」

振りかざし、三日月形の刃が発射され、ヤミー達を撃破した。

「ふう………」

そしてテマリは変身を解除した。

「ええ~~~~~~~~~!!?」

そこに立っていたのは



沙良だった。

「そ！ 先代デマリーは私だよ」

テマリーのメダル  
ジャッカル×3  
キツネ×3  
オオカミ×3  
イタチ×2  
パンダ×1  
クマ×1  
サンショウウオ×1  
サラマンダー×1  
カエル×2  
フクロウ×2  
コウモリ×2  
ミミズク×2

### 第35話 三と剣と三頭犬（後書き）

次回、仮面ライダーテマリー！

勇樹

「まさかの展開だな…」

沙良（過去）

「未来の私の彼氏か」

優花

「お婆ちゃん？」

沙良（現代）

「これが欲しかったんだよね」

勇樹

「金色の刃は分かるけど、白き翼ってなんだ？」

次回、【過去と未来と継承】

お楽しみに！

新グライドのアイデアはまだ募集してます！

### 第36話 過去と未来と継承（前書き）

熱く燃え盛れ G A G A G A

ネタが浮かばなかったので過去編は一旦終了です。

### 第36話 過去と未来と継承

仮面ライダーテマリ、前回の3つの出来事！

一つ、謎に遺跡に連れてこられた勇樹達は、過去へ飛ばされる！

二つ、そこで先代のテマリの活躍を見る！

そして三つ、先代テマリは、何と沙良だった！

「予想外すぎるだろ」

今、沙良（現代）が沙良（過去）に現状を説明してる。

今はドライバーを付けてるからいいが、外したらどっちがどっちかわかんねえぞ！？

「お待たせ〜！」

沙良（×2）が戻ってくる。

「へ〜、これが未来の私の彼氏なんだ〜」

品定めをするように過去沙良が俺をジロジロ見ってくる。

ちょっと恥ずかしいんだが……………。

「何か、ビミョウだね……………」

「うつせーわ！」

あげくこれですよ！

失礼きわまりねえなあおい！

「大丈夫！ 800年後にはそれも好きになってるから！」

「ええー！？」

……………「ごめん泣いていい？」

「勇樹……………」

優花が肩に手をぽんと置いてくれる。

さすが双子、考えてることが勝手に伝わるのか。

「私の胸でだったら、いつでも泣いていいよ?」

「ありがとう、胸薄っぺらいけどありがとう……」

「ねえねえ、こいつ殺っていいかな? かな? かな?」

「すいません調子乗りました!」ビシッ

やだよ……（ガクガクブルブル）

今『やる』の字がおかしまつたよ……。

そんなこんなで、今は沙良の埒わにいる。

「ほんで? そのゲキリュウケンみたいなのはなんなんだ?」



腕に装着されている。

…まんまゴッドゲキリュウケンやん。

色もそっくりだ！

あれ？ でも形は普通のゲキリュウケン…？

『だれがゲキリュウケンだこの野郎！』

「「しゃべった！？」」

しかもネタが通じただと！？

「えつと、鍵鍵……？」

『チェンジ、リュウケンドー………じゃねえつつてんだろ！ 俺は  
フアングセイバーだあ！』

こいつとは良い友達になれそうだ。

最近ツツコミにばかり回ってたからな。  
たまにはボケたいぜ…。

そんでまあフアングセイバーの使い方を教わった。

これを使えるのはテマリ一の適合者のみ。

つまり過去は沙良。現代は俺だけってことだ。

この持ち手についてるグリップを上にはずらすと、剣の中心についてる才オカミの顔が上に動き、その穴にメダルを入れる。

5枚まで入れてスキャンすることで最高の力を発揮する。

「と、こんなところかな？」

沙<sup>か</sup>良が説明を終える。

「うん、ありがと。それで、おばあちゃんはどこかな？」

「お婆ちゃん？」

沙良の言葉に、優花が反応する。

「うん。私達を作り出した錬金術師のイナだよ！」

凄くうれしそうに話すなあ…。

過去沙良に案内され、その錬金術師の所に向かった。

「お婆ちゃん、こんばんわ」

まずは過去沙良が入る。

「おや沙良、いらっしやい。……そちらさんは？」

「紹介するね。未来から来た私と、その時代のテマリーとバンクだよ！」

「おやおや、ようきたねえ」

……………お婆ちゃん!?

どう見ても20歳前後にしか見えないんだが?

「若すぎね?」

「おや? これでも300年生きてるんだけどねえ」

「マジかよっ!?! ……にしても見た目は若いな……」

「おやおや、こんな年寄りを褒めても何もでないよ」

「勇樹?」

現沙良が物凄い目つきで俺を睨みつけてくる。

「勇樹って、ああいう人が好みだったの?」

「優花、頼むから誤解される様な事を言うな。後沙良、睨むな。どう頑張っても、俺はお前以外の人間を好きにはならねえよ」

真顔でそう言うと、沙良は顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。

自分では平気で言うくせに、言われると弱いんだよねあゝ…。

「それで？ 未来から態々何をしに来たんだい？」

現沙良に婆ちゃんが聞く。

「あ、そうそう……ここによここによ………なんだけど、どこにあるの？」

なにやら耳打ちしている。

「ああそれなら、こっちだよ。着いておいで」

沙良が婆ちゃんに連れられてどこかに行ってしまった。

残った俺と優花は、過去沙良からちよつとした昔話を聞いた。

深き欲望の神が世界を覆いし時、2人の勇者が立ち上がった。

金色の刃、白銀の翼。

二色の戦士は神を切り裂き、人々に平等な欲望を与えた。

三連星と希望の戦士は、そのまま深き眠りに着いた。

と言うものだった。

「金色の刃は分かるけど、白銀の翼ってなんだ？」

「さあ？」

過去沙良も分からないらしい。

現沙良の用事が終わった後、俺達は帰ることになった。

「ゆっくりしてけば良かったのに」

過去沙良がちょっと残念そうに俺達に言う。

「いいの。元々このためだけに来たんだから」

そう言つて石版に触れようとしたとき、過去沙良が俺を呼んだ。

「なんだ？」

「……えい」

そう言つと同時に、頬に柔らかい感触が走った。

「っ!？」

驚きの声を上げる間もなく、無理やり石版に手を押し付けられる。

現代に戻ってきたとき、沙良と優花に散々言われた。

『災難だな…』



「ほんとだよ……ってあれ!？」

いつのまにかファングセイバーが俺の左腕にくっついてる。

「なんでお前いんの!？」

『イナが着いて行けって言っただから』

「軽っ!」

『ま、よろしく頼むわ』

かくして、ちょっと軽いけど頼れる仲間が加わった。

「ところで沙良？ お前は何を持ってきたんだ？」

「ん？ ふふん……秘密」

### 第36話 過去と未来と継承（後書き）

次回、仮面ライダーテマリ！

勇樹

「1000回記念映画？」

沙良

「私ヒロイン！？」

金太

「あの、これ役って言うんですか？」

漣

「僕も出んの？」

勇樹

「変身っ！」

次回、【千と記念と破壊者】  
お楽しみに！

## 最終回に関するお知らせ（前書き）

超重大発表です。

## 最終回に関するお知らせ

2011年3月5日から書いてきたこの『仮面ライダー000外伝  
〜仮面ライダーテマリ〜』  
ですが…………、

後2話で最終回を迎えます。

理由は3つ。

一つ、元々現代グリード編は第2部としてやる予定だった！  
二つ、舞台が変わり、オリジナル要素が多くなる為、000外伝ではなくなるから！  
そして三つ、続編とかやってみたいじゃん！？

ってな訳で、現代グリード編は1年後を舞台に別枠で連載いたします。

タイトルは、『仮面ライダーテマリ〜街を照らす三連星〜』  
スプツとの激闘を追え、高校も卒業し鳴海探偵事務所で働く青年、

『日野勇樹』

その相棒兼恋人の『犬神沙良』

終わったかに見えたグリードとの戦いは、まだ続いていた！

ガイアメモリとも絡む現代グリードとの戦いに、勇樹達はとう立ち向かうか！？

と言うあらすじです。

今作の見所は3つ！（またかよとか言わない）

一つ、金太にもスポットを当てる！（予定） 金太と同化したグ

リードはどこへ行ったか？など…

二つ、仮面ライダーWも準レギュラー！

そして三つ、久々に仮面ライダーガイア、そして仮面ライダークロム・強化形態が登場！

こうご期待！

……まあそれもあるんですが、今言いたいのはそっちじゃないです  
だ。

〇〇〇外伝の方なんですけどね？

今の案は3つあります。

？、本編は完結し、番外編の消化をしていく。

？、本編を、元の〇〇〇の物語に介入していく形に戻す。

？、日常編をちびちびやってから終わらせる。

それぞれデメリットもあるんですけどね。

？は面白くない。

？は更新ペースが下がる。

？は戦闘が無い。

という具合です。

？？でどれが良いか選んで下されると助かります。

他に「こうした方がいんじゃない？」というのがあっても嬉しいです。

ではでは、完結まで、そして次回作もよろしくお願いいたします。

ハナトでした！

## 最終回に関するお知らせ（後書き）

そんな訳で、テマリーの今後を考えてくださると助かります。

あ、見所に追加で！

- ・ネイト最強形態登場！
- ・バンクも最強形態登場！
- ・旧オリジナルグリード全員登場！
- ・新キャラ、新ライダー募集！



### 第37話 体育祭と最終決戦と最凶形態（前書き）

大幅な路線変更をしてきた仮面ライダーテマリですが、特に意見も来ないので次回で最終回とし、それ以上は更新しません。  
ご了承ください。

### 第37話 体育祭と最終決戦と最凶形態

過去から帰ってきた俺達は、5月に行われる体育祭の練習や準備に追われていた。

幸いなことにここ最近ヤミーの出現は無く、安心して学校生活を送れる。

そんなある日。

「……まずいね」

ボンボンを作りながら、沙良が唐突に口を開いた。

「なにがだ？」

主語が無いから全く分からない。

「今さ、体育祭が近いからどのクラスも勝とうと躍起になってるじゃん？ その『勝ちたい』って欲望が多い上に強いから、それを利用されると厄介かな？ って」

「確かにな……」

前に見た『強くなりたい』って欲望から生まれたヤミーは結構強かったしな……。

『ま、俺も居るんだから何とかなるさ！』

左腕に装着したファングセイバーがしゃべる。

「そうだな……。頼むぜ！ ゴッドゲキリュウ……ファングセイバー！」

『もうそこまで来たら言っちゃえよ！　ってかいい加減覚えろよ！』

しかし、金太を助けたって言うグリーのコアメダルはどこにあるんだ？  
今までそんな話が出たことないし…。

後日

「きゃあああああっ！」

予想通りといって良いのか何なのか…。  
学校内に悲鳴が響き渡った。

大方『勝ちたい』とか『優勝したい』って欲望を使われたんだろうな…。

ハチャミーやガヤミーが大量に現れる。

……………キモイ…。

おまけにクマ、パンダ、サンショウウオ、サラマンダーのヤミーも現れる。

合計で20体か……………。

ってか生徒いっぱいいるし、ここで変身したら正体ばれるよな…。

「まあ、気にしてらんねえか。沙良！」

「はい！」

メダルを受け取る。

「あれ？ 利用規約はどこいった？」

「今はそんなこと言ってらんないでしょ」

「ですよ〜…。変身っ！」

【ジャッカル！キツネ！オオカミ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャッキオオ！！】

久々にジャッキオオコンボに変身し、ヤミー達に向かっていく。

「え！？ 日野が！？」

「仮面ライダー！？」

おうおう、色々言われてるよ…。

そんな暇あったら逃げろよ…。

「数が多いからな、ゲキリュウケン！」

『もうそれでいいよおおおお！　うわああん！』

セイバーモードになったファングセイバーを構え、キツネソードと共にズバズバ切り裂いていく。

辺りにメダルが散らばるが、致命傷を与えられない。

「ガアアアアッ！」

「うあっち！」

サラマンダーヤミーの火炎をもろに食らってしまう。

「くっ……『勇樹！　後ろだ！』…後「うあっ！」

今度はパンダヤミーのパンチを食らい、地面を転がった所をクマヤミーに踏みつけられる。

「がはっ……」

『「勇樹！」』

沙良とファングセイバーが同時に叫ぶ。

じりじりと他のヤミーが迫ってきたとき、ヤミーが何かに吹っ飛ばされた。

「っ!？」

驚きに脚をどかしたクマヤミーから離れ、ぶっ飛ばした主を見る。

「大丈夫ですか？」

そこには、左腕をグリード状態にした金太と優花がいた。

「「へんしん／変身……!」「」

【ウシ・シカ・ウマ・ウ・ウ・ウ・ウシカウマッ!】

パカッ

二人がネイト、バンクに変身し、俺の横に立った。

「お兄ちゃん、立てる？」

「ああ、大丈夫だ」

膝に手を置いて立ち上がる。



「さてと、行きますか！」

「はい！」

「うん！」

3人でヤミー達に向かって走る。

【クレーン・アーム】

【ドリル・アーム】

【シヨベル・アーム】

「はあっ！」

優花は強化した両腕を振り回しながら一掃していく。

「ふっ！ はっ！」

金太は二本の剣を器用に振り回しながら切り裂いていく。

そして俺も…

「でええええりやあああああー！」

【ジャッカル・キツネ・オオカミ・ジャッカル・キツネ！ ヒッサ

ーッ！」

【スキヤニングチャージ！】

ファングセイバーを思いっきり振り、敵を全て両断する。

【スキヤニングチャージ】

【セル・バースト】

「はああああああああつ！！」

金太と優花の方も、必殺技で敵を一掃した。

「ふい〜……」

変身を解除しようとしたその瞬間、何かが俺達に直撃した。

「うわあああああ！！」

「きゃあああああ！！」

それによって強制的に変身が解除される。

この技、まさか！

攻撃して来た方を睨みつける。

「ウフフフフ…」

気色悪い笑い声を上げるスブツが立っていた。

「貴様……！」

金太の殺気が強まる。

「あら？ あのときの負け犬君じゃない」

「…黙れ」

「おゝ怖い怖い。変身もできないくせに強がっちゃって」

この技を食らうと、しばらくは変身できない。

普通のメダルでは。

「見せてあげる。完全復活したグリードの力」

周りにあったメダルが全てスブツに引き寄せられる。

「くっ…っっ」

同じくメダルでできている優花が飲み込まれない様必死で支える。

吸引がやむとスブツが巨大なメデューサの様な姿になっていた。

『本物の恐怖を味わわせてやるわ』

重く響くような声で俺達に言い放つ。

「上等じゃねえか！ こっちも本物の勇気を見せてやるぜ！ 沙良！」

「無理しないでね…」

心配そうな沙良にサムズアップをし、メダルをドライバーにセットする。

【ジャッキオオ！ジャッキオオ！ジャッキオオ！・・・ケルベロスッ！ー！】

「さあ、お前の罪を清算しろ！」

N  
E  
X  
T  
  
F  
I  
N  
A  
L  
  
S  
T  
E  
A  
G  
E

**第37話 体育祭と最終決戦と最凶形態（後書き）**

次回、仮面ライダーテマリー 最終回

【希望と本気とそれぞれの道】

最終回 希望と本気とそれぞれの道（前書き）

OP・挿入歌『Anything Goes!』



## 最終回 希望と本気とそれぞれの道

「さあ、お前の罪を清算しろ！」

そうメデューサの様な姿をしたスブツを指差すテマリー。

その右手にはファングセイバーが握られる。

「行くぞ、ファングセイバー！」

『ああ！ 名前で呼ばれて本領発揮だ！』

ファングセイバーの刃が銀に輝く。

『小ざかしい！』

スブツが蛇の様な巨大な触手を数本伸ばしてくる。

「邪魔だあああああー！」

ファンゲセイバーを大きく横に振り、20本はあった触手を全て切り裂く。

そして一気に加速して高くジャンプする。

「でえええりやああああ!!」

脳天に重たい一撃を食らわせる。

『ぐおおおおおっ!?!』

そして頭から数枚のメダルが飛び出る。

それをキャッチし、地上に着地する。

「おっし、金太、これ使え!」

ナイトに3枚のメダルを投げる。

それをドライバーにセットし、スキャンする。

【コブラ・ヘビ・クモ・コオオオオビイイモオオ!!】

頭はコブラが巻きついてターバンになった様な形。

胴体はウナギの黒ヴァージョン。

脚はタコの黒ヴァージョンの戦士、  
仮面ライダーナイト・コビモコンボに姿が変わる。

「優花！ お前は大丈夫だよな!？」

「弟の癖に姉の心配をするなんて、2分早いよ!」

「意外とすぐだな!？」

ツツコミをほどほどに、3人は元の大きさに戻ったスブツの方に向く。

「ぐ……うあああ……」

身体からボロボロとメダルを落とし、苦しんだ様子のスブツ。

「さあ！ 決めてや……おお！？」

不意に勇樹の変身が解かれる。

「時間切れか……」

勇樹  
side

参ったな…。

まだ身体が慣れてなかったか…。

「勇樹、大丈夫？」

沙良が俺の方に駆け寄ってくる。

「大丈夫だ！ メダルを…」

「うん！」

3枚のメダルを受け取り、ドライバーにセットしてスキヤナーを握る。

「沙良から受け継がれてきたこの力……………」。

それに選ばれた……………」

今更の様にこのドライバーの重みが伝わってくる。

過去に行ったのが一番大きい。

「選んでもらった……、」

俺が、変身っ！！」

【イタチ！キツネ！カエル！イ！キ！ル！イキルイ！キ！ル！】

イキルコンボに変身し、2人の間に立つ。

「行くぜ？ 2人とも」

「うんっ！」

「はいっ！」

3人で大地を踏みしめ、スブツに向かって走り出す。

「死にぞこないどもがあああああああ！！！」

発狂したかのように腕を伸ばしてくるスブツ。

「はっ！」

それを金太が鞭で受け止める。

「おらああああ！！！」

「はあああああ!!」

優花と同時に殴り飛ばす。

「ぐっ……」

「勇樹！ 次はこれ！」

6枚のメダルを沙良から受け取る。

「サンキュ！」

【フクロウ！コウモリ！ミミズク！フウウウウウウコオオオオズッ!!】

空音コンボになり、上空に飛び上がる。

【カッター・ウィング】

【ドリル・アーム】

優花も飛び上がって来て、俺の横に浮遊する。

【フクロウ！コウモリ！ミミズク！イタチ！パンダ！クマ！カエル！  
ギガスキャン！！】

【セル・バースト】

俺の左の拳、優花の右の拳にエネルギーが溜まる。

「優花！ 頼むぜ！」

「オッケー！」

優花がスブツに向かって急降下する。

それに合わせて俺も紫の龍を放つ。

ドリルアームと合体し、優花の右手に龍が宿る。

「ドラゴニックトルネード！！」



その技が決まり、スブツが後方に吹っ飛ばされる。

：さすがに大量のメダルを吸収した分、かなり頑丈になっている。

「おのれええええええ！」

「倒れない!？」

「嘘でしょ!？」

「んなことあ想定内なんだよおお！」

【イタチ！パンダ！クマ！タンタンタタ！ン！ク！】

お師匠コンボになり、翼を失ったことで勢い良く落下する。

【スキヤニングチャージ！】

俺の右手に風が集まる。

それだけで台風の様な。

「真！爆裂暴風拳！！」

それを何も無い大地に叩き込む。

そこからスブツに向かって大地が割れていく。

「烈火怒濤<sup>れつかどう</sup>お!!」

割れた大地からマグマが噴出し、スブツを焦がす。

「あああああああつ!?!」

「止めだああ!」

【ジャッカル! キツネ! オオカミ! ジャ! ジャ! ジャ! ジャッキオオ!】

【スキヤニングチャージ!】

【【ブレスト・キャノン】】

【【セル・バースト】】

キツネソードにエネルギーを溜めてる間に、2人はブレストキャノンのエネルギーをチャージする。

「今だ！」

優花の合図と同時に走り出す。

「ブレストキャノン！」

「シュウウウウツト！！！」

二つの極太のブレストキャノンが直撃し、足元で爆発が起きる。

それを突き抜けて俺がスブツをすれ違いざまに切り裂く。

「ブレイブ……ストライザアアアアア！！！」

横に一閃したとき、スブツが大爆発を起こした。

「う……あ……」

コンボのやりすぎか、変身が解除され、倒れかける。

だが俺の体を、涙目になった沙良が抱きとめる。

「勇樹……」

「沙良………終わったぜ……」

「……………うんっ！」

沙良に支えられて校庭の中心に来たとき、どっと拍手が沸き起こる。

見ると、学校の生徒全員が俺たちに拍手していた。

「日野すげーぞ！」

「優花ちゃんすごい！」

「金太君もかっこよかったよー！」

色々言われ、若干照れくさい空気になったとき、誰かが言った。

「お前らほんと何者だー！？」

それにだけ俺はこう答えた。

「勇気の仮面ライダーだ！ 覚えておけ！！」

1年後

タキシードを着た青年と、ウェディングドレスを着た女性が、今まさに口付けをしようと見詰め合っていた。

「……早かったな、ここまで」

「でも、幸せだよ……」

「  
だ  
な  
」

「  
……結婚、するんだね  
」

「これからずっと、幸せになるために……」

そう、今日は結婚式だ。



漣と鈴の。

そこからなんやかんやあり、ブーケトスを今まさにしようとしたそのとき！

『きゃあああっ！』

ステゴサウルスの様な姿をしたヤミーが現れた。

「早く、結婚したい…！ 早くっ！」

すっげー切実だなあおい！

驚き、困惑する人々。

つたく、こんなおめでたいときにまで……。

「しゃあねえ、沙良！ ちょっくら行って来るわ」

「うん、行ってらっしゃい」

メダルを受け取り、ドライバーに入れてからヤミーの前に立つ。

「変身っ！」

【ジャッカル！キツネ！オオカミ！ジャ！ジャ！ジャ！ジャッキオオ！ー！】

ジャッキオオコンボに変身すると、いろんな人が口々に話す。

『仮面ライダー！？』

『もしかして、あの！？』

そしてヤミーを指差す。

きっとこれからも、俺は同じことをするんだろう。

皆を守る、仮面ライダーとして。

皆が欲望に打ち勝てるよう、ほんの少しでいいから手助けするために。

「さあ、お前の罪を清算しろ！」

俺はこれからも、戦い続ける。

E  
N  
D

## 最終回 希望と本気とそれぞれの道（後書き）

という訳で、いかがでしたでしょうか？

仮面ライダー〇〇〇外伝／仮面ライダーテマリー／  
これにて完結でございます。

飽き性である僕がここまで続けてこれたのも、ひとえに読んでくださった皆様のおかげでございます。

また機会があったら、そのときにお会いいたしましょう。

それでは最後に、メインキャスト4人から一言ずつ頂きましょう。

金太

「えっと、途中登場だった金太です。

途中介入という形だったので、皆さんから批判がこないか心配でしたが…。

批判も無くここまで来ることができました。

出番は少なかったですが、次回作などで会えたなら、そのときはよろしくお願い致します」

優花

「どうも～！ 勇樹の妹兼姉の優花ちゃんで～っす！

人気投票で1位を頂いたり、何かと皆様に受け入れていただけたと自負しております。

次の作品の方でも、ぜひよろしく願いします！」

沙良

「先代テマリー兼勇樹の恋人の、犬神沙良だよっ！<sup>パートナー</sup>

第1話からの予定を大きくそれたこの作品ですが、飽きずに読んで下さった皆様、本当にありがとうございます。

すでに始まつてるテマリーの次回作でも、私は変わらず勇樹の相棒をやらせてもらってます。

もしもテマリーというライダー、並びに作品を気に入っていただけたなら、そちらの方も読んでいただけると嬉しいです。では、私の相棒にバトンタッチ！」

勇樹

「バトンタッチされた日野勇樹です。

むずかゆカップルなんてタグがついてんのに、途中から全然むずかゆく無くなつたのはなぜでしょうか？

まあ冗談は置いて…。

テマリーになつてからの1年間、そちらでは1ヶ月ですかね。

それは俺にとつてかけがえの無い時間となりました。

沙良がいて、優花がいて、金太がいて…、何より読んでくれた皆さんがいてくれたおかげでここまで戦ってこれました。

次回作の成長した俺をお楽しみに！

じゃあな！」

そんなこんなでここでおしまいです。

既に始まつている次回作ですが、テマリーシリーズの方から行くことができます。

読みたいと思つてくださった方はそちらから。

それでは最後に、今回の話に関してですが、この回の感想のついでに、作品全体を通しての感想も頂けると嬉しいです。

次回作に生かしてまいりますので。

では、仮面ライダー○○○外伝『仮面ライダーテマリー』を読破し  
てくださった皆様、本当にありがとうございました！

ハナト



## Episode Lost 昔と今とこれから…

勇樹は一人、ベランダに干した派手ながらのパンツを眺めていた。

「勇樹、何してるの?」

沙良の声を聞き、少し振り返る。

「んにゃ、ちょっと昔の事を思い出してた」

沙良が俺の横に立ち、聞きたそうな目でこっちを見てくる。  
そっぴやまだ話してなかったな。

俺がまだ、7歳の頃……

仮面ライダー○○○外伝／仮面ライダーテマリ／  
E r i s o d e L o s t 昔と今とこれから…

11年前

家族でホテルに来ていた。

海が近くて、凄く綺麗な場所だった。

優花も元気で、二人で走り回っては母さんに心配かけてた。

でも

「勇樹逃げろ！」

突然俺達の部屋のドアが溶け、そこから異形の怪物が現れた。

今だから分かるが、それはスブツだった。

「ふふふ、見つけたわよ　　器ちゃん」

意味は分からなかったが、俺を狙ってることだけは分かった。それは父さん達も同じだった様で、ずっと俺を庇い続けた。

しばらく経って、父さんが血を流しながら力なく倒れた。

「ひっ……」

それを見て、俺は無性に怖くなった。

母さんも、俺を庇って同じ様になった。

残った俺と優花は、二人で寄り添う様に隅で丸くなっていた。

そしてどんどんスブツが近付いてきたとき、優花がこう言った。

「勇樹、一人でも、しっかり頑張ってね……?」

その目には涙が溜まっており、見ている俺も涙が出てきた。

「姉さん……?」

「バイバイ、勇樹……」

そして姉さんは俺を、15階の窓から突き落とした。

そこからは、よく覚えてない。

ただ、目が覚めると、どこかの公園のベンチで寝転がっていた。

「あ、気がついた？」

俺を助けてくれた人は、凄く良い服を着ていた。

どこか、金持ちの家の人だろうと思った。

11歳くらいのその人は、俺に色々教えてくれた。

詳しい事情は知らない筈なのに、なぜここまでしてくれるのだろうか？

気になった俺は、その人に聞いてみた。

そしたら

「誰かが困ってたら、絶対に諦めないで手を伸ばす。それが俺だから」

そう言って、派手な柄のパンツをくれた。

その人は夜まで帰ろうとしなかったが、迎えが来たので渋々帰って行った。

残された俺は、意外なほど冷静だった為ホテルに戻った。

立ち入り禁止もお構い無しに、瓦礫の山を漁った。

奇跡的に瓦礫と瓦礫の間に居て、形だけは保った優花を見つけた。

もちろん目を開けることも、呼吸をすることも無い。

俺はそれを背負い、父さんの仕事場に向かった。

そこにあっただカプセルの中に優花を居れ、無我夢中でボタンを押した。

「とまあ、ここからは前に話したっけ？」

「うん……」

「んじゃ、その先の、欠けた1年間の話だな……」

優花が目を覚ますまで、かなり時間がかかった。

だが俺はそこから出ようとはしなかった。

今思えば正解かも知れない。下手に見つかって警察事になったら大変だからな。

飯も無かったから、そこにあった物を食べて暮らしていた。

何かって？

メダルだ。



銀じゃなかったことを考えると、コアメダルだったのかも知れない。

でも子供の顎で噛み砕けるほどだったから問題ないだろう。

それは意外と腹に溜まったので、長く持った。

だがそれもそこを着いたとき、俺はあの公園に向かった。

もしかしたらあの人が居るかもしれない。

だが、そこには誰も居なかった。

空しくベンチに座っていると

「どーしたの？」

同年くらいのも、栗色の髪をした少女が声をかけてきた。

つっても、もう顔も名前も思い出せなかったけどな。

その子は、俺と色々話をしてくれた。

ずっとずっと…。

聞けば、その子も今は一人ぼっちだったらしい。

帰る間際に言われたのが

「ともだちになってよ！」

それから一度も会わない、それでも妙に印象に残ってる友達になった。

その子がくれたほんの少しのお菓子で残りを繋いでいた。

もう限界、となる寸前で、優花が目を覚ました。  
俺は嬉しくて優花に抱きついた。  
そこまでは良かった。

だが、優花は定期的にセルメダルを入れないといけない。  
そして、二人分の衣食住を用意しないといけないかった。

「んで、困っていたところをおやつさんに助けられた、と…」  
「ふん…」

少女が出てきた辺りから、沙良が詰まらなさそうにこっちを見てる。

「で、それとパンツとどう関係あるの？」

「パンツで思い出したんだよ」

「？　じゃあそのパンツくれて、色々教えてくれた人って…！」

俺は薄く微笑み、こう言った。

「火野映司、映司、思い出したよ……」

今の俺があるのは、いろんな人が助けてくれて、支えてくれたおかげなんだ。

だから俺は、その色んな人達の役に立ちたい。

もう少ししたら、探偵になろう。

テマリーの力と、探偵として、せめてもの恩返しをしよう。

そう、心に誓った。

「もちろん、私も行くからね？」

「わぁーってるよ」

だって俺達は

「コンビだからな！」

仮面ライダー○○○外伝〜仮面ライダーテマリー〜  
Episode Lost 昔と今とこれから…

完

## Episode Lost Sの記憶／兄妹と風都とおやつさん

仮面ライダーテマリ、ここまでのハイライト！  
ある事件により家族を失った少年、『日野<sup>ひの</sup> 勇樹<sup>ゆうき</sup>』は、人造生命体<sup>ホムンクルス</sup>として復活を遂げた双子の姉、『日野<sup>ひの</sup> 優花<sup>ゆうか</sup>』と共に、各地を放浪する生活を送っていた……！

「はぁ……はぁ……」

小さな少女を背負った小さな少年は、ただひたすらに歩いていた。だがある一線を越えたとき、とうとう力尽きて倒れてしまった。

しばらくして、その少年の傍に一人の男性がやって来た……！

仮面ライダーOOO外伝／仮面ライダーテマリ～  
Episode Lost Sの記憶／兄妹と風都とおやつさん



「んっ……、ここは……？」

少年が目を覚ますと、どこか家と呼ぶにはどこか物足りない、言うなれば『事務所』の様な場所に居た。

少し固めのベッドから状態を起こすと、何かが焦げた様な臭いがした。

目覚めたばかりなので覚束ない足取りでそちらに行くと、白いスーツに身を包んだ中年の男性がコーヒー豆からコーヒーを淹れ様としていた。

「また失敗か……」

そうボヤキながら焦げて悪臭を放つ豆を捨てる男性。

少年はそれを見ながらただポカンと口を空けて目を丸くしていた。それに気が付いた男性は、何事も無かったかのように少年に向き直った。

「目が覚めたか坊主……お前の連れはそっちだ」

自分が目覚めた方とは違うベッドを指差す。そこには、自身が背負ってきた少女が、規則正しい寝息を立てて眠っていた。それを見て少年は胸を撫で下ろし、男性に頭を下げた。

「ありがとうございます、助けて下さって……」

「礼は良い。家は何処だ？ 送ってやる」

「あ、えつと……」

『家』という単語が出た途端、少年の表情が曇る。それを見た男性は少し眉を顰める。

「まさか……お前、名前は……？」

「勇樹……ゆき日野 勇樹ゆきだけど……？」

「勇樹か……良い名前だな。……今からお前の家はここだ」

「えっ!？」

突然言い渡された言葉に理解ができず、思わず少年は素っ頓狂な声を上げてしまう。  
悪い人じゃないのは分かってる。でもどうやって信じれば……。そう思った少年は、無意識の内に男性の眼を見つめていた。

対する男性を見返す。

やがて沈黙に耐えられなくなった少年が視線を落とす。  
その頭に、男性はその大きな手の平を置く。

「良い目をしているな。お前はきっと強い男になる……」

その言葉と手の大きさに、少年の記憶に残った僅かな父親との思い出が蘇る。

気が付くと少年は男性に飛び付き、ただひたすら泣いていた。  
いつまでも、いつまでも……。

それから6年という月日が流れた。

男性、『鳴海<sup>なるみ</sup> 壮吉<sup>そうきち</sup>』と、少年『日野<sup>ひの</sup> 勇樹<sup>ゆうき</sup>』、少女『日野<sup>ひの</sup> 優花<sup>ゆうか</sup>』  
は、本当の家族の様に生活していた。

と言っても、勇樹と優花は壮吉の事を『おやっさん』と呼ぶのだが。  
これは二人が壮吉の事情 自身に家族があり、とある事情によりも  
う娘には触れる事ができなくなった事を知り、あえて『父さん』  
と呼ぶ事を控えた事に由来する。

そしてそんな3人の生活に、もう1人住人が追加された。

「おやつさん！ 今日の依頼は！？」

高校のブレザーに半ズボンの青年が元気良く入ってきた。

朝食を取ろうとしていた3人は、その青年に冷ややかな眼を向ける。

「騒ぐな翔太郎。飯が焦げる」

「なっ……へいへいすんません……」

「だから半人前なんだぞ翔太郎」

「んだと勇樹？ ガキの癖に生意気な……！」

「そのガキに凶星突かれる大人って……プツ」

「あぁん！？」

みみっちい喧嘩を始める勇樹と翔太郎。

黙々と朝食を取る優花と、ゆっくりと箸を置く壮吉。

「お前等……出てくか？」

「」「ごめんなさい！！」「」

壮吉の背後に出現した静かかつ強大なオーラに圧倒され、すぐに頭を下げる勇樹と翔太郎。

そして壮吉は再び朝食を取り始め、勇樹と翔太郎は互いの顔を見た後、勇樹は朝食、翔太郎は鏡に向かい合った。

その日の以来は、とある親子からのものだった。

『ミュージアムに狙われている娘を助けて欲しい』

早速その親子に会う為風都の街を歩く4人。

親子に遭遇したその直後、娘に向かってスーツに骸骨の様な顔をした怪人、『マスカレイド・ドーパント』が襲い掛かってきた。

すぐさま壮吉が迎え撃ち、勇樹と優花は隅へ避難、翔太郎は壮吉が殴り飛ばした怪人に追い討ちの蹴りを入れていた。

だがその際、一人前である所を見せ様とした翔太郎がマスカレイドに挑みかかり、逆に返り討ちにあってしまう。

それに気が付いた壮吉は、すぐに翔太郎に襲い掛かっているマスカレイド達を殴り飛ばした。  
だが

「きゃあああ!!」

依頼人の女性にマスカレイドが襲い掛かり、その際に依頼人の娘が数人のマスカレイドに捕まってしまった。

マスカレイド達はすぐにそこから立ち去ってしまった。

勇樹と優花は物陰から出て来たが、壮吉が翔太郎を殴り飛ばした事で足を止めてしまう。

「依頼人に怪我をさせる……そんなのは探偵以前に人として失格だ……」

勇樹と優花はその時初めて壮吉の怒りを露にした顔を見た。恐怖に足がすくみ、歩く事も座る事もできなかった。

「……お前等3人は事務所に戻ってろ。後は俺がやる」

そう言い残し、依頼人を送って壮吉はどこかに行ってしまった。その背中を見ながら、翔太郎は力無くその場に膝を着いた。

鳴海探偵事務所

覚束無い足取りで歩く翔太郎と、その背中を心配そうに見つめる勇樹と優花。

事務所に戻るなり翔太郎はソファーに座り込み、深くため息をついた。

始めて見る喧嘩相手の暗い表情に、勇樹は黙ってられず口を開いた。

「翔太郎……」

返事はない。

「あんた、あのままでいいのか？ あんな言われっぱなしで、人として失格って言われたままで、それでいいのか？」

「……ああ。おやっさんの言う通りだから……俺は探偵失格だ……見限られたんだよ、俺は……」

自嘲気味な笑みを浮かべる翔太郎。

それを見た勇樹は、壮吉が殴った方とは逆の頬を殴った。

「あの人は…… おやつさんは！ そんな簡単に人を見限る様な人じゃねえ！ ああ言ったのはあんたが、左 翔太郎が！ 今よりもっと成長する為に言ってくれたんだぞ！」

「でも……俺は……」

「例え体一つになっても食らい付いて倒す！ それぐらいの心意気で居なきゃダメだ！ おやつさんは…… コレをバネにして、あんたが成長できるって信じてるんだよ！」

耳まで真っ赤にし、怒鳴り散らす様に吼える勇樹。

子供ゆえ、何も考えていない分単純な事に気付いた様だ。

はっと眼を見開いた翔太郎は、ゆっくりと立ち上がって勇樹の頬を殴った。

一瞬よろめいた勇樹だが、その程度の威力であつた事の方が驚きだった。翔太郎の方を見ると、笑顔でこちらを見ていた。

「目が覚めたぜ……、さ、行こうぜ！」

「ああ！」

短く言葉を交わし、壮吉の下に走り出した。



どこかのビルの屋上

現場では、壮吉の変身した『仮面ライダースカル』が、頭にドラゴンの顔の様な物が付いた『テラー・ドーパント』と交戦していた。が、テラーの拳から放たれた青黒い光線を食らい、スカルの変身が解かれてしまう。

テラーの周囲に立っているマスカレイドの一人が、依頼人の娘を押さえつけている。

それを見て立ち上がる壮吉。そこに……

「「おやつさん!!」」

勇樹と翔太郎が駆けつけた。

それに向かってくるマスカレイド達を翔太郎が殴り飛ばし、その隙間を掻い潜って勇樹が壮吉の下に走った。

「お前等……何をしに来た……?」

「決まってるでしょ。俺も翔太郎……さんも、このまま黙って見てるなんて嫌だからな!」

「俺の戦いだと言った筈だが……？」

「依頼の方は任せるよ。でも……！」

勇樹が言葉を区切るのと同時に、マスカレイドを片付けた翔太郎が駆け寄り、勇樹の横に立つ。

「気に入らない奴をぶっ飛ばすぐらい、させてくれっての！」

そう言った直後、勇樹と翔太郎が同じ動きをする。指鉄砲を構え、手を肩まで上げる。

それを大きな動きで下から振り上げ、敵を指差す。

「さあ！」

「お前の罪を……！」

「「数えろ……！」」

言い切ると同時に勇樹が滑り込み、ロストドライバーを拾う。それを腰につけ、1本のメモリを取り出す。

「勇樹……何をする気だ！」

壮吉の同様にも似た声が届く。

「大丈夫、少しだけだから」

「やめろ……そいつを使うな！」

壮吉の語尾が強まる。

だが勇樹は構いもせずメモリをドライバーに差し込み、掛け声と共に傾ける。

「変身っ！」

【STAG!】

黒い体に真っ赤な眼、クワガタの様な頭をした戦士、『仮面ライダースタッグ』に変身した。

その瞬間、スタッグの体に電撃が走る。

「うぐっ……うあああっ……」

それを我慢し、スタッグはマスカレイド達を次々と殴り飛ばしていく。

どこからか黒い棒、『スタッグシャフト』を取り出し、それで一度に数体纏めてなぎ払う。

そしてテラーの前に立つ。

「次はてめーだ……」

『はっはっは……勝てるのかね？ この私に』

テラーの発した言葉に、スタッグは一瞬身震いする。  
だがそれを振り払い、シャフトを振り下ろす。  
が、それはテラーの左手に受け止められてしまう。

「なに！？」

『はっ！』

右手から放たれた青黒い光線に吹き飛ばされ、ビルのフェンスにぶつかって変身が解除される。  
蹲り、悶える勇樹。

そこに翔太郎が駆け寄り、勇樹を抱き起こす。

「勇樹、おい！」

「うう……あつ……」

痛みに苦しみ、翔太郎の呼びかけに応えることもできない。  
それを横目に見た壮吉は帽子を被り直し、テラーを睨む。

「貴様……！」

そう呟くと同時にテラーに向かって走る。

テラーの放つ攻撃を全て避け、その手に捕まった少女を奪い返す。  
少女が走って依頼人の下に駆け寄ったのを確認し、テラーを数回殴り飛ばす。

その攻撃を食らったテラーは口元を拭き、青黒い海の中に消えていった……。

鳴海探偵事務所

帰ってくるなり、勇樹は壮吉の拳を食らった。

理由は簡単。勇樹が壮吉の忠告も無視して勝手にメモリを使ったからだ。

「でも……あれは！」

「黙れ……身の丈以上の力を持てば、いつか自滅する。力を使うと

きは常に臆病になれ。でないとお前が死ぬぞ……」

その言葉に言い返せず、俯いて両目に涙を溜める勇樹。

その際に握っていた手のせいで、スタッグのメモリが壊れる。

壮吉はその頭にそつと手を置き、軽く撫でた。

「だが、お前の機転のおかげで助かった……ありがとな……」

「っ！……うん！」

手の甲で涙を拭い、満面の笑みで返す勇樹。

その姿はさながら、本当の親子の様であった。

そして勇樹と壮吉の約束が作られた。

『高校を卒業したら、ここに戻って来て探偵の仕事を手伝う』

Episode Lost Sの記憶／兄妹と風都をおやつさん

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3746r/>

---

仮面ライダー000外伝～仮面ライダーテマリー～

2011年10月8日17時22分発行